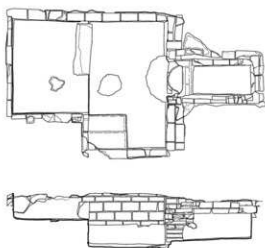


横尾遺跡 8

—大分市横尾土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



2014

大分市教育委員会

横尾遺跡 8

—大分市横尾土地地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2014

大分市教育委員会

序 文

本市教育委員会では大分市横尾土地区画整理事業に伴い、事業地内のほぼ全域に所在する横尾遺跡の発掘調査を平成3年度より実施してまいりました。

これまで区画整理事業との円滑な調整を図るために、工事の工法変更等により遺跡の保護に努めながら、効果的な発掘調査の実施に取り組んできました。

横尾遺跡の発掘調査はこれまでに152箇所が終了し、旧石器時代から明治時代までおよそ二万年間の横尾地区の歴史を雄弁に物語る遺跡が発見されています。

今回報告いたします発掘調査は、大分市大字横尾字寺ノ下外において実施したもので、事業地の西南部に現存する法雲寺の門前とその周辺部一带にあたります。この一帯には白色の粘土層が分布しており、その粘土の採掘がおよそ二千年前の弥生時代から行われていたことが明らかとなっています。発掘調査では平安時代の粘土を採掘した穴が数多く発見されました。

また、横尾地区では、台地を流れる豊富な地下水を利用して清酒や焼酎が醸造されました。平安時代の粘土採掘坑に重なって発見された、江戸時代から明治時代の建物跡や竈跡さらには井戸跡や排水施設などは酒の醸造が行われていたことを示す貴重な成果となっています。

本書が、地元の皆さんとともに多くの方々の文化財愛護への理解を深める一助となり、市民の皆さんに郷土の歴史学習の資料として幅広く活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、本調査事業の実施にあたり、ご配慮、ご協力いただきました横尾地区の皆さまをはじめ、関係各位に対しまして心より感謝申し上げます。

平成26年3月14日

大分市教育委員会

教育長 足立 一馬

例 言

- 1 本書は、大分市教育委員会が大分市大字横尾において、大分市横尾地区土地区画整理事業に伴い、平成4～12年度、平成25年度に調査を実施した横尾遺跡18地点の成果を記録した発掘調査報告書である。
- 2 調査は、平成4～12年度の17地点分に関しては大分市教育委員会文化財課が調査主体となり実施した。平成25年度の1地点分(第151次調査)に関しては大分市教育委員会文化財課(監督員 堀地潤一)の委託を受け、株式会社九州文化財総合研究所(業務責任者 服部真和)が実施した。
- 3 調査担当は、第1表 調査地及び担当者一覧のとおりである。
- 4 遺構の実測は、各調査担当が行ったほか、株式会社九州文化財研究所(第52・53・57・58次調査)、株式会社埋蔵文化財サポーターシステム(第80次調査)、株式会社九州文化財総合研究所(第151次調査)が大分市教育委員会文化財課の委託を受けて行った。
- 5 遺構の写真撮影は各調査担当が行ったほか、株式会社九州文化財研究所(第49・52・53・57・58・73次調査)、株式会社九州文化財総合研究所(第151次調査)が大分市教育委員会文化財課の委託を受けて行った。各調査地点の全体写真撮影及び遺構全体図作成については、平成7年度の第45次調査、平成8年度の第48・49・52・53次調査、平成9年度の第58次調査は株式会社写真エンジニアリングが行い、平成8年度の第52次調査、平成9年の第57次調査、平成12年の第80次調査は九州航空株式会社が行った。また平成25年度の第151次調査については、東亜航空技研株式会社が行った。
- 6 報告書に掲載した遺構図の製図、出土遺物の実測・製図は、株式会社九州文化財総合研究所(業務責任者 松浦智)が委託を受け行った。一部の遺物実測を、整理作業スタッフ(第1表に記す)が行った。また一部の遺構図の製図を永井美香(大分市教育委員会文化財課)が行った。
- 7 遺物の写真撮影は、大分市教育委員会文化財課の委託を受け、株式会社九州文化財総合研究所(業務責任者 松浦智)がデジタル写真撮影を行った。
- 8 本書の執筆は、以下のとおりである。
第Ⅰ章(永井美香) 第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ章(松浦智)
- 9 本報告書巻末の写真図版および掲載できなかった写真図版を付属のDVD-ROMに収容している。詳細はDVD-ROM内の「はじめにお読み下さい。」を参照頂きたい。
- 10 出土遺物・記録資料は、大分市埋蔵文化財保存活用センター(大分市大字田原337番地の5)に収蔵・保管している。
- 11 本書の編集は、大分市教育委員会の企画に基づき、編集作業を株式会社九州文化財総合研究所(業務責任者 松浦智)が行った。

凡 例

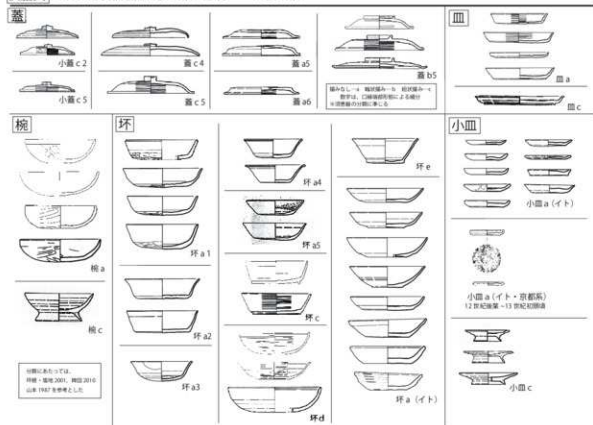
- 1 本書で用いた遺構略号と遺構掲載順番は、以下のとおりである。
SB:掘立柱建物跡、SA:棚状遺構、SK:粘土採掘坑・土坑、ST:土壇墓・近世墓、SD:溝跡、SE:井戸跡、
SP:ピット・柱穴、SX:性格不明遺構・埋納遺構・遺物包含層、その他:表土、整地層
- 2 本書に用いた方位はすべて座標北(G.N.)である。座標は、旧日本測地系の平面直角座標2系(北緯33°0′、東経131°0′)のX・Y座標を基点として表記している。
- 3 本書に掲載した遺構配置図の表記は、新旧関係を実線で示し、下位の遺構については点線、以下一点鎖線、二点鎖線の順で記している。また、表記上、遺構の新旧関係が不明瞭な場合は、矢印で補足している。
- 4 遺構の規模と深度の単位は原則としてメートル(m)で、遺物の法量はセンチメートル(cm)で表記している。
遺物の法量の内、器高と口径、底径、高台径は以下のとおり計測している。
器高:底部を水平に置いた状態で、最も高い部分の高さ
口径:上記の状態で、口縁端部外縁の最大径
底径:口縁部を水平に置いた状態で、底部と認識した部分の最大径
高台径:高台端部外縁の最大径
- 5 本書に掲載した遺物の実測図の表記は、以下のとおりである。
①遺物断面が黒塗りのもの…須恵器・須恵質土器・陶器 ②遺物断面が灰色のもの…瓦質土器・瓦器・瓦
③遺物断面の稜線と調整の変換点…実線 ④調整が同じでその単位が分かるもの…長破線
⑤輪と付着物、黒斑等その範囲を示す必要があるもの…点破線
- 6 本書に用いた出土土器の分類および年代観は次ページに掲げる分類資料図-1、分類資料図-2に示す標識資料との比較による。なお、これらの資料が掲載された文献は分類資料図-2にある一覧のとおりである。

土師器分類 (8 世紀～ 13 世紀までの土師器)

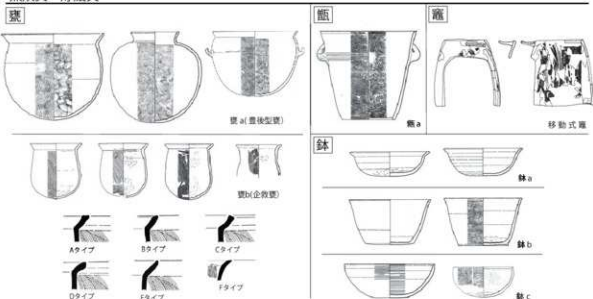
供膳具

三方巾 a2 がある場合は各分類のあとに (三方巾) を加える

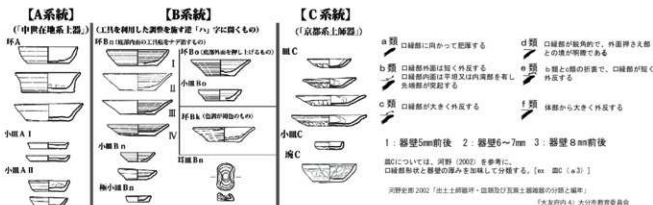
ex: 皿 a (三方巾)



煮炊具・貯蔵具

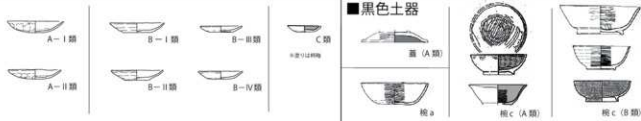


土師器分類 (14 世紀～16 世紀の土師器)



土師器分類 (17 世紀～19 世紀の土師器)

その他の供膳具 分類



<分類にあたっての参考文献>

〔土師器〕

河野史郎 1995 『竹葉 田山遺跡出土土器に関する二・三の考察』『田山遺跡 II』大分市教育委員会

河野史郎・池田真一 2001 『豊後国出土土器の分類と年代』『大分・大友土器研究会会報』大分・大友土器研究会

熊田清美 2010 (4) 近代の土師器について。『下都遺跡報告』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書 第100集

山本浩夫・山村達平 1997 『中世食器の地域性 九州・鹿児島編』『共同研究』中世食文化の基礎的研究。国立歴史民俗博物館研究報告 第71集

山本浩夫 1987 『竹葉・土師器の分類』『大分県史研究』11

林賢也・中西武典・今田しのぶ 2001 『豊後における中世系土師器について』

〔瓦質土器〕土師瓦土器

田中明子 1996 (6) 土師瓦土器。『和泉原遺跡 女院近世墓群 庄ノ原遺跡群』九州福岡自動車道沿線埋蔵文化財発掘調査報告書 (5) 大分県教育委員会

山本哲也 2009 『豊前・豊後における瓦質土器の初期段階』『中世土器の基礎研究』22 日本中世土器研究会

河野史郎 2002 『出土土師器群・血縁及び瓦質土器群の分類と編年』『大友町内4』大分市教育委員会『大分・大友土器研究会会報』大分・大友土器研究会

<輸入品については、以下の文献による分類を使用>

〔貿易陶磁器〕

大分市教育委員会 2000 『大分県東部XV-陶磁器分類編-』

小野誠 1982 (15～16 世紀の染付・藍・白の分類と年代)『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会

上田清美 1982 (14～16 世紀の青磁の分類について)『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会

森田 1982 (14～16 世紀の白磁の分類について)『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会

吉田真 2003 『中世大友府内出土の産地不明陶磁器について』『貿易陶磁研究』No. 28

〔陶磁器〕

森田真 2005 『備前』『全国シンポジウム 中世東部の産地・生産技術の展開と編年 資料集』

中野昭久 1995 『常滑・瀬戸』『備前 中世の土器・陶磁器』真境社

〔近世陶磁器〕

九州近世陶磁学会編 2000 『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会 10 周年記念

その他、灰地陶器・緑地陶器・黒地陶器・瓦質土器・石類など『備前 中世の土器・陶磁器』真境社

目 次

第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 調査経過	1
第2節 調査組織	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	7
第Ⅲ章 調査の成果	10
第1節 調査の概要	10
第2節 各地区の遺構と遺物	11
(1) 横尾遺跡第5次調査	11
(2) 横尾遺跡第16次調査	18
(3) 横尾遺跡第18次調査	31
(4) 横尾遺跡第20次調査	40
(5) 横尾遺跡第21次調査	56
(6) 横尾遺跡第22次調査	65
(7) 横尾遺跡第32次調査	69
(8) 横尾遺跡第37次調査	73
(9) 横尾遺跡第45次調査	76
(10) 横尾遺跡第48次調査	79
(11) 横尾遺跡第49次調査	88
(12) 横尾遺跡第52次調査	101
(13) 横尾遺跡第53次調査	114
(14) 横尾遺跡第57次調査	128
(15) 横尾遺跡第58次調査	139
(16) 横尾遺跡第73次調査	145
(17) 横尾遺跡第80次調査	151
(18) 横尾遺跡第151次調査	156
第Ⅳ章 総括	161
第1節 古代の粘土探掘坑について	161
第2節 近世以降の酒造遺構群について	164
第3節 中世から近世にかけての遺跡様相について	167

写真図版

報告書抄録

図版目次

第 1 図	調査範囲図 (1/6,000)	4	第 48 図	S8003 遺構実測図 (1/80)	59
第 2 図	横尾遺跡位置図 (1/400,000)	6	第 49 図	S8004・S8005 遺構実測図 (1/80)	60
第 3 図	横尾遺跡周辺地質図	7	第 50 図	S8006 遺構実測図 (1/80)	61
第 4 図	周辺遺跡位置図 (1/40,000)	9	第 51 図	S8007・S8008 遺構実測図 (1/80)	62
第 5 図	調査範囲図 (1/4,000)	10	第 52 図	SD001・SD001～SD003 (調査区東壁) 土層図 (1/40)	63
第 6 図	第 5 次調査区遺構配置図・全体遺構図 (1/300)	12	第 53 図	第 21 次調査区出土遺物実測図 (1/3)	64
第 7 図	SK001・SK020・SK049 遺構実測図 (1/40)	13	第 54 図	第 22 次調査区遺構配置図 (1/200)	65
第 8 図	SK054・SK069・SK077 遺構実測図 (1/60)	14	第 55 図	第 22 次調査区全体遺構図 (1/200)	66
第 9 図	SD003・SD004・SD005 土層図 (1/40)	15	第 56 図	SK008・SK010・SK012・SK015 遺構実測図 (1/40・1/60)	67
第 10 図	第 5 次調査区出土遺物実測図 (1/3・1/4)	16	第 57 図	第 22 次調査区出土遺物実測図 (1/2・1/3・1/4)	68
第 11 図	第 16 次調査区遺構配置図 (1/200)	19	第 58 図	第 32 次調査区遺構配置図・全体遺構図 (1/150)	69
第 12 図	第 16 次調査区全体遺構図 (1/200)	20	第 59 図	SE002・SK011 遺構実測図 (1/30・1/40)	70
第 13 図	S8001・S8002 遺構実測図 (1/80)	21	第 60 図	SD002 土層図 (1/40)	71
第 14 図	S8003・S8004 遺構実測図 (1/80)	22	第 61 図	第 32 次調査区出土遺物実測図 (1/3・1/4)	72
第 15 図	S8006 遺構実測図 (1/80)	23	第 62 図	第 37 次調査区全体遺構図 (1/150)	73
第 16 図	S8007・S8008 遺構実測図 (1/80)	24	第 63 図	SD001 土層図 (1/40)	74
第 17 図	S8009・S8010・S8011 遺構実測図 (1/80)	25	第 64 図	第 37 次調査区出土遺物実測図 (1/3・1/4)	75
第 18 図	S8012 遺構実測図 (1/80)	26	第 65 図	第 45 次調査区遺構配置図・全体遺構図 (1/150)	76
第 19 図	S8013・S8014 遺構実測図 (1/80)	27	第 66 図	S8001 遺構実測図 (1/60)	77
第 20 図	SK001 遺構実測図 (1/30)	28	第 67 図	SK001・SK002 遺構実測図 (1/40)	78
第 21 図	SD001・SD002・SD003 遺構実測図 (1/40)	29	第 68 図	第 48 次調査区遺構配置図 (1/200)	80
第 22 図	第 16 次調査区出土遺物実測図 (1/3・1/4)	30	第 69 図	第 48 次調査区全体遺構図 (1/200)	81
第 23 図	第 18 次調査区遺構配置図・全体遺構図 (1/300)	31	第 70 図	S8001 遺構実測図 (1/80)	82
第 24 図	S8001 遺構実測図 (1/80)	32	第 71 図	S8002 遺構実測図 (1/60)	83
第 25 図	S8002 遺構実測図 (1/80)	33	第 72 図	S8004 遺構実測図 (1/60)	84
第 26 図	S8003・S8004 遺構実測図 (1/80)	34	第 73 図	SK012・SK016・ST011・SK014 遺構実測図 (1/40)	85
第 27 図	S8005・S8006 遺構実測図 (1/80)	35	第 74 図	SK018・ST019 遺構実測図 (1/20・1/40)	86
第 28 図	SK001・SK002 遺構実測図 (1/30・1/60)	36	第 75 図	第 48 次調査区出土遺物実測図 (1/3)	87
第 29 図	SD001 土層図 (1/40)	37	第 76 図	第 49 次調査区遺構配置図 (1/300)	88
第 30 図	第 18 次調査区出土遺物実測図 (1/3・1/4・1/6)	38	第 77 図	第 49 次調査区全体遺構図 (1/300)	89
第 31 図	第 20 次調査区遺構配置図 (1/200)	40	第 78 図	SK002 遺構実測図 (1/30)	90
第 32 図	第 20 次調査区全体遺構図 (1/200)	41	第 79 図	SK004 遺構実測図 (1/30)	91
第 33 図	S8001・S8002 遺構実測図 (1/80)	42	第 80 図	SK022・SK037 遺構実測図 (1/30)	92
第 34 図	S8003 遺構実測図 (1/80)	43	第 81 図	SD005・SD006・SD007・SD008 SD011・SD015・SD016 土層図 (1/50)	93
第 35 図	S8004 遺構実測図 (1/80)	44	第 82 図	SX069 遺構実測図 (1/30)	95
第 36 図	S8005・S8006 遺構実測図 (1/80)	45	第 83 図	第 49 次調査区出土遺物実測図 1 (1/3・1/4)	96
第 37 図	S8007・S8008 遺構実測図 (1/80)	46	第 84 図	第 49 次調査区出土遺物実測図 2 (1/3・1/4)	97
第 38 図	S8009 遺構実測図 (1/80)	47	第 85 図	第 49 次調査区出土遺物実測図 3 (1/3・1/4)	98
第 39 図	S8010・S8011 遺構実測図 (1/80)	48	第 86 図	第 49 次調査区出土遺物実測図 4 (1/3)	99
第 40 図	SE001 遺構実測図 (1/30)	49	第 87 図	第 52 次調査区遺構配置図 (1/200)	102
第 41 図	SK001・SK003・SK005 遺構実測図 (1/30)	50	第 88 図	SE050 遺構実測図 (1/30)	103
第 42 図	SK007 遺構実測図 (1/40)	51	第 89 図	ST014・ST020 遺構実測図 (1/20)	104
第 43 図	SK011・ST012・ST014・SX002 遺構実測図 (1/20・1/30)	52	第 90 図	ST017・ST041・ST047 遺構実測図 (1/20)	105
第 44 図	SD001・SD002 土層図 (1/40)	53	第 91 図	ST045・ST046 遺構実測図 (1/20)	106
第 45 図	第 20 次調査区出土遺物実測図 (1/3・1/4)	54			
第 46 図	第 21 次調査区遺構配置図・全体遺構図 (1/300)	57			
第 47 図	S8001・S8002 遺構実測図 (1/80)	58			

第 92 回	ST052・ST053・ST066 遺構実測図 (1/20)	107	第 123 回	第 57 次調査区出土遺物実測図 (1/3・1/4)	138
第 93 回	SD004・SD040 土層図 (1/40)	108	第 124 回	第 58 次調査区遺構配置図 (1/200)	139
第 94 回	調査区北側近世墓地群遺構配置図 (1/50)	109	第 125 回	第 58 次調査区全体遺構図 (1/200)	140
第 95 回	第 52 次調査区出土遺物実測図 1 (1/1・1/3・1/4)	110	第 126 回	SK073・SK101 遺構実測図 (1/20/1/30)	141
第 96 回	第 52 次調査区出土遺物実測図 2 (1/1・1/3)	111	第 127 回	SD041 土層図 (1/40)	142
第 97 回	第 52 次調査区出土遺物実測図 3 (1/3)	112	第 128 回	第 58 次調査区出土遺物実測図 1 (1/3・1/4)	143
第 98 回	第 52 次調査区出土遺物実測図 4 (1/3・1/6)	113	第 129 回	第 58 次調査区出土遺物実測図 2 (1/3・1/4)	144
第 99 回	第 53 次調査区遺構配置図 (1/200)	115	第 130 回	第 73 次調査区遺構配置図 (1/400)	145
第 100 回	SB001 遺構実測図 (1/60)	116	第 131 回	SK011・SK013・SK015・SK016・SK017・ SK018・SK019 遺構実測図・ 調査区東壁土層図 (1/40)	146
第 101 回	SB002 遺構実測図 (1/60)	117	第 132 回	SD001 土層図 (1/40)	147
第 102 回	SB003 遺構実測図 (1/60)	118	第 133 回	第 73 次調査区出土遺物実測図 1 (1/3・1/4・1/5)	148
第 103 回	SB004 遺構実測図 (1/60)	119	第 134 回	第 73 次調査区出土遺物実測図 2 (1/3・1/4・1/5)	149
第 104 回	SE016 遺構実測図 (1/40)	120	第 135 回	第 80 次調査区遺構配置図 (1/200)	151
第 105 回	SK019 遺構実測図 (1/30)	121	第 136 回	SE070 遺構実測図 (1/50)	152
第 106 回	SK021 遺構実測図 (1/30)	122	第 137 回	SD035 土層図 (1/40)	153
第 107 回	SK049 遺構実測図 (1/30)	123	第 138 回	SK015・SK040 遺構実測図 (1/30)	154
第 108 回	SK090 遺構実測図 (1/40)	124	第 139 回	第 80 次調査区出土遺物実測図 (1/3・1/4)	155
第 109 回	SK096 遺構実測図 (1/30)	125	第 140 回	第 151 次調査区遺構配置図・全体遺構図 (1/200)	157
第 110 回	SK121 遺構実測図 (1/30)	126	第 141 回	SA009 遺構実測図 (1/60)	158
第 111 回	SD050 土層図 (1/30)	127	第 142 回	SA010 遺構実測図 (1/60)	159
第 112 回	第 53 次調査区出土遺物実測図 (1/3・1/4)	127	第 143 回	SK005・SP011・SP016 遺構実測図 (1/20)	160
第 113 回	第 57 次調査区遺構配置図 (1/200)	128	第 144 回	第 151 次調査区出土遺物実測図 (1/1・1/3・1/6)	160
第 114 回	第 57 次調査区全体遺構図 (1/200)	129	第 145 回	粘土探掘坑及び関連遺構分布図 (1/6,000)	162
第 115 回	SB001 遺構実測図 (1/80)	130	第 146 回	粘土探掘坑出土遺物実測図 (1/4)	163
第 116 回	SB002 遺構実測図 (1/80)	131	第 147 回	酒造遺構復元図	164
第 117 回	SB003 遺構実測図 (1/80)	132	第 148 回	第 49 次調査区酒造遺構群配置図 (1/200)	165
第 118 回	SB004 遺構実測図 (1/80)	133	第 149 回	槽場復元図	166
第 119 回	SE115・SK011・SK014・SK030 遺構実測図 (1/50)	134			
第 120 回	SK080 遺構実測図 (1/40)	135			
第 121 回	SK097 遺構実測図 (1/40)	136			
第 122 回	SK112 遺構実測図 (1/20)	137			

表 目 次

第 1 表	調査地及び担当者一覧	3	第 16 表	第 52 次調査区出土遺物観察表②	174
第 2 表	横尾遺跡報告書掲載地点一覧	5	第 17 表	第 53 次調査区出土遺物観察表	174
第 3 表	第 5 次調査区出土遺物観察表	169	第 18 表	第 57 次調査区出土遺物観察表①	174
第 4 表	第 16 次調査区出土遺物観察表	169	第 19 表	第 57 次調査区出土遺物観察表②	175
第 5 表	第 18 次調査区出土遺物観察表	169	第 20 表	第 58 次調査区出土遺物観察表	175
第 6 表	第 20 次調査区出土遺物観察表	170	第 21 表	第 73 次調査区出土遺物観察表①	175
第 7 表	第 21 次調査区出土遺物観察表	170	第 22 表	第 73 次調査区出土遺物観察表②	176
第 8 表	第 22 次調査区出土遺物観察表	170	第 23 表	第 80 次調査区出土遺物観察表	176
第 9 表	第 32 次調査区出土遺物観察表①	170	第 24 表	第 151 次調査区出土遺物観察表	176
第 10 表	第 32 次調査区出土遺物観察表②	171	第 25 表	第 5 次調査区遺構番号一覧表	177
第 11 表	第 37 次調査区出土遺物観察表	171	第 26 表	第 16 次調査区遺構番号一覧表	177
第 12 表	第 48 次調査区出土遺物観察表	171	第 27 表	第 18 次調査区遺構番号一覧表	178
第 13 表	第 49 次調査区出土遺物観察表①	171	第 28 表	第 20 次調査区遺構番号一覧表	178
第 14 表	第 49 次調査区出土遺物観察表②	172	第 29 表	第 21 次調査区遺構番号一覧表	179
第 15 表	第 52 次調査区出土遺物観察表①	173	第 30 表	第 22 次調査区遺構番号一覧表	179

第 31 表	第 32 次調査区道橋番号一覧表	179	第 41 表	第 53 次調査区道橋番号一覧表②	184
第 32 表	第 37 次調査区道橋番号一覧表	179	第 42 表	第 57 次調査区道橋番号一覧表①	184
第 33 表	第 45 次調査区道橋番号一覧表	180	第 43 表	第 57 次調査区道橋番号一覧表②	185
第 34 表	第 48 次調査区道橋番号一覧表	180	第 44 表	第 58 次調査区道橋番号一覧表①	185
第 35 表	第 49 次調査区道橋番号一覧表①	180	第 45 表	第 58 次調査区道橋番号一覧表②	186
第 36 表	第 49 次調査区道橋番号一覧表②	181	第 46 表	第 73 次調査区道橋番号一覧表	186
第 37 表	第 49 次調査区道橋番号一覧表③	182	第 47 表	第 80 次調査区道橋番号一覧表①	186
第 38 表	第 52 次調査区道橋番号一覧表①	182	第 48 表	第 80 次調査区道橋番号一覧表②	187
第 39 表	第 52 次調査区道橋番号一覧表②	183	第 49 表	第 151 次調査区道橋番号一覧表①	187
第 40 表	第 53 次調査区道橋番号一覧表①	183	第 50 表	第 151 次調査区道橋番号一覧表②	188

写真図版目次

写真図版 1

- 1 第 49・57 次 調査区道橋 (南より)
- 2 第 151 次 調査区道橋 (南より)

写真図版 2

- 1 第 5 次 調査区全景 (東南より)
- 2 第 5 次 調査区全景 (北より)
- 3 第 5 次 SK020 完備状況 (南より)
- 4 第 5 次 SK049 土層 (南より)
- 5 第 5 次 SK049 遺物出土状況 (南東より)
- 6 第 5 次 SK003・004 土層 (北東より)
- 7 第 5 次 SK005 土層 (北西より)
- 8 第 16 次 北側調査区全景 (南西より)

写真図版 3

- 1 第 16 次 南側調査区全景 (北西より)
- 2 第 16 次 西側調査区全景 (南より)
- 3 第 16 次 SK001・002・003 掘り下げ状況 (西より)
- 4 第 16 次 SK003 遺物出土状況 (北より)
- 5 第 18 次 完備状況全景 (東より)
- 6 第 18 次 SK001 完備状況 (東より)
- 7 第 18 次 SK001h 土層 (南より)
- 8 第 18 次 SK002・005 完備状況 (東より)

写真図版 4

- 1 第 18 次 SK002b 土層 (南より)
- 2 第 18 次 SK001 掘り下げ状況 (北より)
- 3 第 18 次 SK002 遺物出土状況 (東より)
- 4 第 20 次 調査区全景 (南より)
- 5 第 20 次 竪立柱建物跡完備状況 (北より)
- 6 第 20 次 SK001 完備状況 (西より)
- 7 第 20 次 SK003 土層 (北より)
- 8 第 20 次 SK005 土層 (北より)

写真図版 5

- 1 第 20 次 SK005 遺物出土状況 (南より)
- 2 第 20 次 SK007 遺物出土状況 (西より)
- 3 第 20 次 SK012 土層 (北より)
- 4 第 20 次 SK012 早稲出土状況 (北より)
- 5 第 20 次 SK014 土層 (南西より)
- 6 第 20 次 SK014 完備状況 (北より)
- 7 第 21 次 SK001～SK006 完備状況 (東より)
- 8 第 22 次 調査区全景 (西より)

写真図版 6

- 1 第 22 次 調査区全景 (東より)
- 2 第 22 次 SK012 土層 (北東より)
- 3 第 22 次 SK015 遺物出土状況 (北より)
- 4 第 32 次 調査区全景 (東より)
- 5 第 32 次 SK002 掘り下げ状況 (西より)
- 6 第 32 次 SK011 完備状況 (東より)
- 7 第 32 次 調査区東側掘り下げ状況 (東より)
- 8 第 37 次 調査区全景 (南より)

写真図版 7

- 1 第 37 次 SK001 掘り下げ状況 (西より)
- 2 第 37 次 SK002 遺物出土状況 (北より)
- 3 第 45 次 調査区全景 (南より)
- 4 第 45 次 SK001 土層 (東より)
- 5 第 45 次 SK001 完備状況 (東より)
- 6 第 48 次 調査区全景 (北より)
- 7 第 48 次 調査区全景 (東より)
- 8 第 48 次 SK001 検出状況 (北より)

写真図版 8

- 1 第 48 次 ST019 土層 (西より)
- 2 第 48 次 ST019 早稲出土状況 (北西より)
- 3 第 49 次 調査区全景 (北より)
- 4 第 49 次 調査区西側 (西より)
- 5 第 49 次 調査区東側 (東より)
- 6 第 49 次 調査区中央部 (南より)
- 7 第 49 次 SK002 掘り下げ状況 (西より)
- 8 第 49 次 SK002 完備状況 (西より)

写真図版 9

- 1 第 49 次 SK067 検出状況 (南より)
- 2 第 49 次 SK008・SK009 右列検出状況 (北より)
- 3 第 49 次 SK069 完備状況 (北より)
- 4 第 49 次 SK069 完備状況 (東より)
- 5 第 52 次 調査区全景 (北より)
- 6 第 52 次 調査区全景 (北より)
- 7 第 52 次 SK050 掘り下げ状況 (北より)
- 8 第 52 次 近世墓群全景 (北より)

写真図版 10

- 1 第 52 次 ST017 橋底掘出土状況 (南より)
- 2 第 52 次 ST020 遺物出土状況 (北西より)
- 3 第 52 次 ST041 完備状況 (南より)
- 4 第 52 次 ST045 土層 (北より)
- 5 第 52 次 ST045 遺物出土状況 (南より)
- 6 第 52 次 ST046 遺物出土状況 (西より)
- 7 第 52 次 ST047 土層 (南より)
- 8 第 52 次 ST052 遺物出土状況 (北より)

写真図版 11

- 1 第 52 次 ST066 遺物出土状況 (北より)
- 2 第 53 次 調査区全景 (北より)
- 3 第 53 次 SK016 土層 (東より)
- 4 第 53 次 SK016 遺物出土状況 (東より)
- 5 第 53 次 SK016 掘り下げ状況 (東より)
- 6 第 53 次 SK019 完備状況 (東より)
- 7 第 53 次 SK021 完備状況 (北より)
- 8 第 53 次 SK049 土層 (北より)

写真図版 12

- 1 第 53 次 SK049 遺物出土状況 (北より)
- 2 第 53 次 SK096 遺物出土状況 (南より)
- 3 第 53 次 SK121 土層 (東より)
- 4 第 53 次 SK121 遺物出土状況 (東より)
- 5 第 57 次 調査区全景 (北より)
- 6 第 57 次 SK115 土層 (北より)
- 7 第 57 次 SK011 土層 (北西より)
- 8 第 57 次 SK011 完備状況 (北より)

写真図版 13

- 1 第 57 次 SK014 土層 (南より)
- 2 第 57 次 SK014 遺物出土状況 (南より)
- 3 第 57 次 SK014 遺物出土状況近景 (南東より)
- 4 第 57 次 SK080 土層 (北より)
- 5 第 57 次 SK080 遺物出土状況 (北より)
- 6 第 57 次 SK097 土層 (西より)
- 7 第 57 次 SK097 遺物出土状況 (北西より)
- 8 第 57 次 SK097 遺物出土状況近景 (北西より)

写真図版 14

- 1 第 57 次 SK112 掘り下げ状況 (北西より)
- 2 第 57 次 SK112 遺物出土状況 (北西より)
- 3 第 57 次 SK112 遺物出土状況 (北東より)
- 4 第 57 次 SK112 完備状況 (北東より)
- 5 第 58 次 調査区全景 (北西より)
- 6 第 58 次 SK073 上部掘り下げ状況 (北より)
- 7 第 58 次 SK073 下部掘り下げ状況 (北より)
- 8 第 58 次 SK073 掘出土状況 (北より)

写真図版 15

- 1 第 58 次 SK101 土層 (南西より)
- 2 第 73 次 調査区全景 (東より)
- 3 第 73 次 調査区東端土層 (西より)
- 4 第 73 次 SK011 完備状況 (西より)
- 5 第 73 次 SK011 完備状況 (北より)
- 6 第 80 次 調査区全景 (東より)
- 7 第 80 次 SK070 土層 (東より)
- 8 第 80 次 SK070 完備状況 (東より)

写真図版 16

- 1 第 80 次 SK040 土層 (北より)
- 2 第 80 次 SK040 完備状況 (東より)
- 3 第 151 次 調査区全景 (北東より)
- 4 第 151 次 SA009・010 完備状況 (北東より)
- 5 第 151 次 SK005 検出出土状況 (北より)
- 6 第 151 次 SK011 検出出土状況 (南より)
- 7 第 151 次 SK011 礎石検出状況 (下層) (西より)
- 8 第 151 次 SK016 遺物出土状況 (西より)

写真図版 17

主要出土遺物写真①

写真図版 18

主要出土遺物写真②

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査経過

横尾遺跡は大分県大分市大字横尾に所在する埋蔵文化財包蔵地である。本遺跡が周知される範囲のほぼ全域におよぶ土地区画整理事業が平成 2 年度に認可され、横尾土地区画整理事業として市街地の整備が進められている。その施行面積は 82.1 ヘクタールである。この横尾土地区画整理事業に伴う横尾遺跡の発掘調査は、平成 3 年度より実施されており、平成 25 年 3 月において 152 地点の調査を完了している。当該地域に周知される 5 遺跡（横尾下組遺跡・多武尾遺跡・東中尾遺跡・有田遺跡・有田古墳）は、平成 14 年には総称して横尾遺跡という名称に変更されている。

平成 12 年度に縄文時代のドングリ貯蔵穴や水場遺構の発見を機に、縄文時代早期以降の遺構が存在することが明らかになった。平成 17 年度には事業計画の変更も認可され、自然と歴史など地域の特性を活かした魅力ある環境整備が着手されている。平成 21 年 2 月 21 日に横尾貝塚が国の史跡に指定される。

なお、本書に所収する発掘調査の報告は、横尾遺跡の西側を中心とする平成 4 年度から平成 10 年度、平成 12 年度、平成 25 年度に行った発掘調査のうち 18 地点の記録である。総調査面積は 11,904 m² である。

第 2 節 調査組織

調査を実施した各年度の調査組織を列記する。職名等は調査当時のものである。

〈平成 4 年度〉

調査主体者	大分市教育委員会	教育長	安東 裕	大分市都市計画部区画整理課	課長	法華津 修之
	大分市教育委員会社会教育課	課長	内田 悟	横尾土地区画整理事務所	所長	山口 正一郎
		主幹	秦 政博			
	文化財室	技師	池邊 千太郎			

〈平成 5 年度〉

調査主体者	大分市教育委員会	教育長	清瀬 和弘	大分市都市計画部区画整理課	課長	法華津 修之
	大分市教育委員会文化振興課	課長	内田 悟	横尾土地区画整理事務所	所長	山口 正一郎
		参事	秦 政博			
	文化財室	技師	池邊 千太郎			

〈平成 6 年度〉

調査主体者	大分市教育委員会	教育長	清瀬 和弘	大分市都市計画部区画整理課	課長	倉原 宗人
	大分市教育委員会文化振興課	課長	内田 悟	横尾土地区画整理事務所	所長	吉良 剛生
		参事	秦 政博			
	文化財室	技師	池邊 千太郎			

〈平成 7 年度〉

調査主体者	大分市教育委員会	教育長	清瀬 和弘	大分市都市計画部区画整理課	課長	倉原 宗人
	大分市教育委員会文化振興課	課長	工藤 久典	横尾土地区画整理事務所	所長	吉良 剛生
		参事	秦 政博			
	文化財室	技師	池邊 千太郎			

〈平成8年度〉

調査主体者	大分市教育委員会	教育長	清瀬	和弘	大分市都市計画部区画整理課	課長	大山	晴久
	大分市教育委員会文化振興課	課長	工藤	久典	横尾土地区画整理事務所	所長	首藤	孝信
		参事	秦	政博				
	文化財室	技師	池邊	千太郎				

〈平成9年度〉

調査主体者	大分市教育委員会	教育長	清瀬	和弘	大分市都市計画部区画整理課	課長	大山	晴久
	大分市教育委員会文化振興課	課長	野尻	政文	横尾土地区画整理事務所	所長	首藤	孝信
		参事	秦	政博				
	文化財室	主任技師	池邊	千太郎				
	文化財調査員	小野	貴史					
	文化財調査員	永松	正大					

〈平成10年度〉

調査主体者	大分市教育委員会	教育長	清瀬	和弘	大分市都市計画部区画整理課	課長	矢野	貞夫
	大分市教育委員会生涯学習課	課長	園田	裕彦	横尾土地区画整理事務所	所長	首藤	孝信
		参事	秦	政博				
	文化財室	主任技師	池邊	千太郎				
	文化財調査員	栃原	嘉明					

〈平成12年度〉

調査主体者	大分市教育委員会	教育長	清瀬	和弘	大分市都市計画部区画整理課	課長	衛藤	道男
	大分市教育委員会文化財課	課長	秦	政博	横尾土地区画整理事務所	所長	後藤	健男
		課長補佐	帯刀	修一				
	文化財係	係長	讃岐	和夫				
		技師	塩地	潤一				
		嘱託	奥村	義貴				
		嘱託	田中	貴				

〈平成25年度〉

調査主体者	大分市教育委員会	教育長	足立	一馬	大分市都市計画部まちなみ整備課	課長	内田	寿
	大分市教育委員会教育部文化財課	課長	塔鼻	光司		参事	溝辺	清美
		参事	神田	洋	庶務担当班	参事補 (グループリーダー)	温水	一徳
		参事補	坪根	伸也			主査	吉野 まゆみ
	大分市歴史資料館							
	大分市埋蔵文化財保存活用センター				横尾土地区画整理事務所			
	埋蔵文化財担当班					参事兼所長	富永	好一
		参事補 (グループリーダー)	池邊	千太郎	換地工務担当班			
		専門員	塩地	潤一		参事補 (グループリーダー)	田中	佳人
		嘱託	永井	美香		専門員	由布	則秀

整理スタッフ

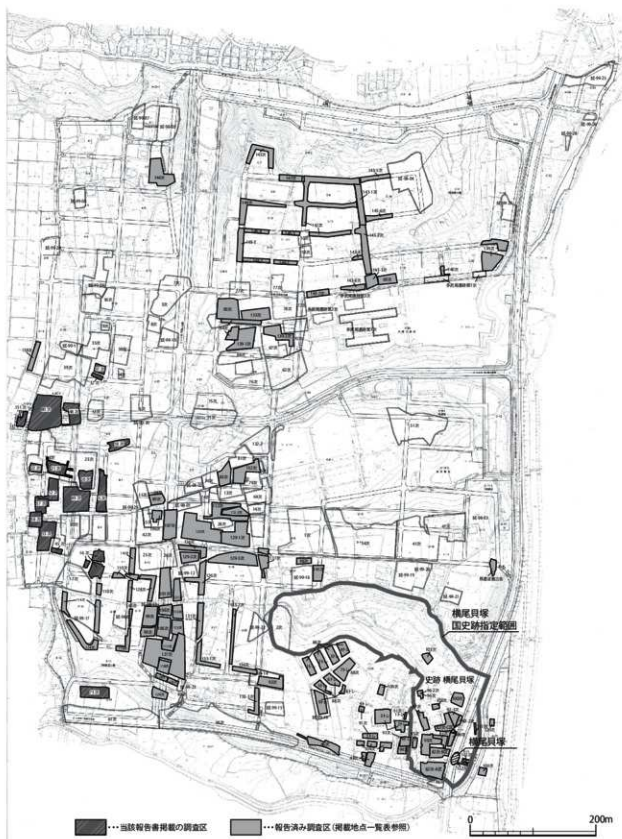
伊東	祥子	坂下	香里	鷲司	夏子	太田	牧枝	敷島	佳代子	佐藤	志信	平田	美智子
町田	ユカリ												

第1表 調査地及び担当者一覧

調査年度	調査地点	調査担当者	調査面積	調査期間	種別	掲載年報
平成4年	5次	池邊千太郎	1,000㎡	19920527～19920909	区画	年報4
平成5年	16次	池邊千太郎	760㎡	19930527～19930721	区画	年報5
	18次	池邊千太郎	400㎡	19930927～19931022	区画	年報5
	20次	池邊千太郎	616㎡	19931213～19940617	区画	年報5
	21次	池邊千太郎	450㎡	19940118～19940520	区画	年報5
	22次	池邊千太郎	300㎡	19940118～19940518	区画	年報5
平成6年	32次	池邊千太郎	110㎡	19940615～19940705	区画	年報6
	37次	池邊千太郎	220㎡	19941031～19941122	区画	年報6
平成7年	45次	池邊千太郎	148㎡	19951026～19951108	区画	年報7
平成8年	48次	池邊千太郎	500㎡	19951222～19960118 19960802～19960820	区画	年報8
	49次	池邊千太郎	1,200㎡	19960130～19960810	区画	年報8
	52次	池邊千太郎	580㎡	19961007～19961218	区画	年報8
	53次	池邊千太郎	1,050㎡	19961210～19970331	区画	年報8
平成9年	57次	池邊千太郎・小野貴史	538㎡	19970402～19970606	区画	年報9
	58次	池邊千太郎・永松正大	510㎡	19970507～19970801	区画	年報9
平成10年	73次	池邊千太郎・橋原嘉明	800㎡	19990201～19990308	区画	年報10
平成12年	80次	塩地潤一・奥村義貴・田中貴	2,442㎡	20000707～20001005	区画	年報12
平成25年	151次	塩地潤一	280㎡	20130718～20130906	区画	—

*掲載年報

- 年報5 『大分市埋蔵文化財調査年報 Vol.5 平成5年度』 大分市教育委員会 1994
 年報6 『大分市埋蔵文化財調査年報 Vol.6 1994年度』 大分市教育委員会 1995
 年報7 『大分市埋蔵文化財調査年報 Vol.7 1995年度』 大分市教育委員会 1996
 年報8 『大分市埋蔵文化財調査年報 Vol.8 1996年度』 大分市教育委員会 1997
 年報9 『大分市埋蔵文化財調査年報 Vol.9 1997年度』 大分市教育委員会 1998
 年報10 『大分市埋蔵文化財調査年報 Vol.10 1998年度』 大分市教育委員会 1999
 年報12 『大分市埋蔵文化財調査年報 Vol.12 2000年度』 大分市教育委員会 2001



第1図 調査範囲図 (1/6,000)

第2表 横尾遺跡報告書掲載地点一覧

報告書名	調査地点	報告書名	調査地点	報告書名	調査地点
横尾貝塚 2008	82次-A区	横尾遺跡3 2010	139-1次	横尾遺跡7 2013	99次
	82次-B区		139-2次		101次
	82次-C区	横尾遺跡4 2011	69次		102次
	82-2次		134次		104次
	82-3次		140次		105次
	86次		141次		106次
	87次		142次		107次
	93次	横尾遺跡5 2012	143-1次		108次
	100次		143-2次		109次
	103次		143-3次		110次
	120次		143-4次		111次
	122次		143-5次		112次
横尾遺跡 2008	112-2次		143-6次		県道方面立合調査
	113次		143-7次	横尾遺跡8 2014	5次
	114次	横尾遺跡6 2013	143-8次		16次
	115次		144次		18次
	116次		145次		20次
	117次		146次		21次
	118次		147次		22次
	121次		148-1次		32次
	123次		148-2次		37次
	124次		148-3次		45次
	125次		148-4次		48次
横尾遺跡2 2009	126次	横尾遺跡7 2013	148-5次		49次
	127次		43次		52次
	128次		46次		53次
	129-1次		83次		57次
	129-2次		84次		58次
	129-3次		88次		73次
	130次		89次		80次
	131次		90次		151次
横尾遺跡3 2010	132次		91次		
	133-1次		92次		
	133-2次		94次		
	133-3次		95次		
	135次		96次		
	136次		96-2次		
	137次		97次		
	138次		98次		

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

横尾遺跡は大分市域の中央部にあり、市街地より南東方向約7.5km地点の大分市大字横尾に位置する。大分の沖積平野を形作った県内最大河川である大野川と大分川に挟まれた下流域に広がる鶴崎台地上にあり、その東端、標高30m前後の台地上に遺跡が広く展開している。遺跡の東側には、大野川の分流である乙津川が流れ、南側には支流の中尾川が流れている(第2図)。天正年間に大野川下流部の改修が行われ、乙津川が分流されるまで大野川は鶴崎台地に近接して流れていたことが指摘されており⁽²¹⁾、本遺跡は県内最大河川の下流域に形成された遺跡と位置付けることができる。

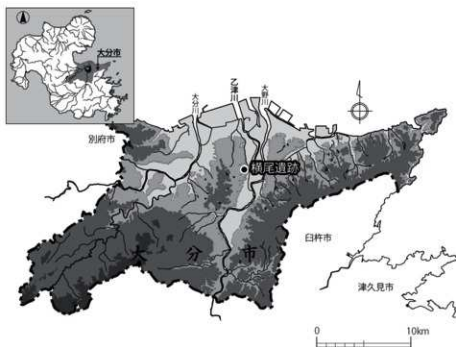
鶴崎台地は、標高165.3mの古城山を最高位に、平坦面が広く南北方向に広がり、台地の東部には段丘地形が顕著に発達する。

第3図の地質図に記した囲みの位置が、本遺跡の形成された場所である。本地域では、中位Ⅰ段丘堆積物(tm1)、中位Ⅲ段丘堆積物(tm3)、低位Ⅰ段丘堆積物(tl1)が広く分布しており、それぞれが横尾面、城原面、松岡面に概ね対応するものと判断される⁽²²⁾。

その中でも、遺跡が集中する場所は中位Ⅲ段丘堆積物(tm3)が分布する城原面で、高度は31～39m地点に相当する。また、本拠地には谷が北側と東側に向けて細かく開析しており、これらの地形を効率的に利用して弥生時代に環境が掘削され、その内側の平坦面に集落が形成されることとなる。

また、上記囲み内の、中位Ⅰ段丘堆積物(tm1)と中位Ⅲ段丘堆積物(tm3)の分布の境界、つまり横尾面から城原面に地形が変換する地点から東側の城原面にかけて白色粘土層が広く分布する。この粘土の採掘が弥生時代から行われており⁽²³⁾、土器製作等に利用されたものと判断される。

第3図の丸印は地下水が段丘崖から湧出している地点である。同図囲み部の低位Ⅰ段丘堆積物(tl1)が分布する地点にも地下水が伏流しており、その湧水地の場所が「古井戸(ふるいのこ)」と語り継がれ、現在に至っている。



第2図 横尾遺跡位置図(1/400,000)

墓1基で形成された墳墓群であったが、近年の確認調査で周溝を伴う小型の円墳2基が新たに発見され追加されている。集落については地蔵原遺跡で古式土師器を伴う古墳時代前期の竪穴住居跡を検出し、また横尾遺跡群の南方1km地点の毛井遺跡では古墳時代後期の竪穴式住居約60基が確認されていることから、周辺遺跡と併せて大野川をとりまく低地上に、当該期の遺跡が展開している⁽²⁸⁹⁾。

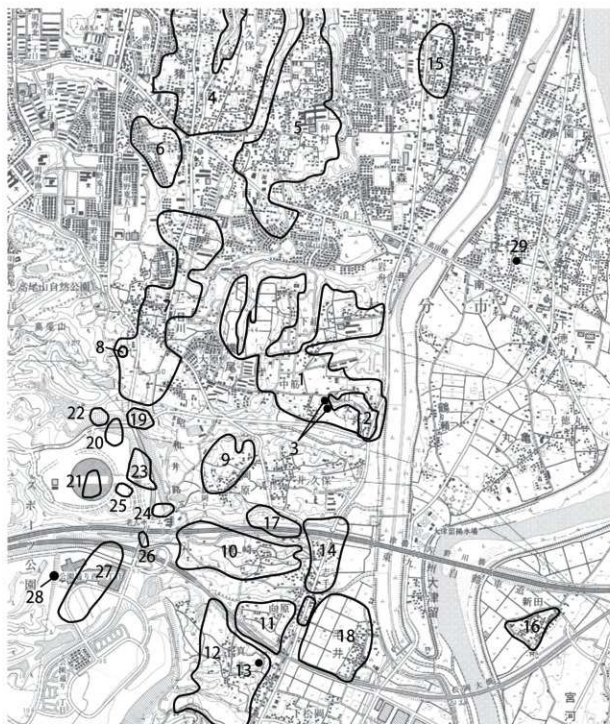
古代に入ると、同台地上では、奈良時代や平安時代の官衙的性格をもった遺跡が出現してくる。横尾遺跡群の北側に位置する地蔵原遺跡では、掘立柱建物跡約80棟や、コの字状に区画される溝が確認され、3点の円面硯が出土している⁽²⁹⁰⁾。また猪野新土井遺跡からは、南北60m、東西45mの溝で区画された空間の中に約20棟の掘立柱建物跡が確認され、『豊』と書かれた墨書土器が出土している⁽²⁹¹⁾。生産遺跡としては、横尾遺跡群の西側や南側に、8世紀中頃から後半にかけての須恵器を焼成した窯跡が発見された松岡古窯跡群⁽²⁹²⁾、8世紀末から9世紀にかけての土師器の焼成土坑が確認された井ノ久保遺跡⁽²⁹³⁾、包含層や遺構からフイゴの羽口や鉄滓が多数出土し、工人集落に比定されている二目川遺跡⁽²⁹⁴⁾などが所在している。これらの間に位置する横尾遺跡群では、9～10世紀代的大型掘立柱建物跡、火葬墓の可能性が想定される方形周溝遺構や木簡墓も確認され⁽²⁹⁵⁾、出土した墨書土器・刻書土器や風字硯、緑釉陶器等から、地蔵原遺跡や猪野新土井遺跡同様、横尾遺跡においても官衙的要素をもった施設が展開していたと示唆される。また横尾遺跡群の西南部一帯では、9～10世紀代を中心とする粘土採掘坑が確認されており、この周辺で継続的に土器生産が行われていたことが窺える。

中世では、横尾遺跡において戦国期に比定される方形館跡が4基確認されている⁽²⁹⁶⁾。そのうちの1つは、半町(1辺約60m)規模の方形館跡で、16世紀後半～末頃まで存続していたことが確認されている。またここから北西へ約2.5km地点の猪野中原遺跡や猪野新土井遺跡からも戦国時代の方形館が確認され、これらの各遺跡から朝鮮王朝産陶磁器が出土している⁽²⁹⁷⁾。この鶴崎台地一帯は中世高田荘に比定されている地域であり、南北朝時代以降に大友氏の所領になった荘園にあたる。また大友氏はその所領を家臣への預置地として家臣団編成の手段に利用していたことから、これらの遺跡が大友家臣によって構成された可能性が考えられる。

近世に入ると、文禄2(1593)年に第22代の大友吉統(義統)が、朝鮮出兵での失態を理由に豊臣秀吉により、豊後国から除国される。その後は、豊臣秀吉の直轄地(蔵入地)となった豊後国は、複数の豊臣大名により七つに分国支配されるようになる。文禄3(1594)年の記録には、当該地は横尾村となり、周辺地域の猪野、小池原、森町、宮川内、天津留、毛井、二目川などととも、江戸時代を通じて白杵藩領に属していた。横尾村には村々から集めた年貢米の収納施設として、規模2間半×3間半の在蔵が設置された記録が残っている。ここで集められた年貢米は、白杵城下に回送せず、北側の森村、猪野村の日向道を向けて、家島の村にあった白杵藩の蔵から大阪へ直送されていた⁽²⁹⁸⁾。

横尾村は、明治時代になると何度か行政単位の編成を経て、明治二十二(1889)年4月1日に施行された市制町村制により、横尾を含めた周辺6か村が合併して明治村となり、昭和二十九(1954)年3月31日には明治村を含めた4か村が合併し、鶴崎市となった。次いで、昭和三十八(1963)年3月10日に大分市に編成され、現在に至っている。

今回報告する発掘調査地点は主に横尾遺跡群の西側にあたる範囲であるが、近辺の大字横尾字寺ノ下に臨濟宗妙心寺派の増上山法雲寺が所在する。嘉永四(1851)年に法雲寺住職であった大環和尚が書き残した『増上山略伝記』によると、南北朝時代の康永3(1344)年に法雲寺の前身である長福寺が、高田荘の葛木修理太夫によって創建されたと伝わっている⁽²⁹⁹⁾。住職が二代目以降は女性であったため、以後尼寺禅寺として継承されていた。大友時代は大加藍で、寺領として本田二反大や本畠一町七反、永楽銭三十貫文などが大友氏から与えられていたようで、天正十五(1587)年には島津氏侵攻による兵火によって焼失し廃寺となっている。近世に入ると、白杵藩はキリスト教禁圧に頭を痛めており、17世紀中頃にはキリスト教を圧する目的で、藩領内各地に寺院を多く創建している。そのような情勢の中で、万治三(1660)年には白杵藩の命によって高僧の賢藏や祖拾が法雲寺として再興し、翌寛文元(1661)年には本堂が落成している。平成二十三(2011)年には、法雲寺中興三百五十年祭が挙行されている。



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	横尾遺跡群	弥生～近世	11	向原遺跡	弥生	21	一方平Ⅲ遺跡	旧石器・縄文・奈良
2	横尾貝塚	縄文	12	真堂遺跡	古墳	22	一方平Ⅳ遺跡	旧石器・縄文・弥生
3	有田古墳	古墳	13	真堂石棺	古墳	23	九池遺跡	旧石器・弥生・古墳
4	猪野遺跡	弥生	14	清水遺跡	弥生	24	牧の内遺跡	旧石器・縄文
5	葛木遺跡	弥生	15	専想寺遺跡	中世	25	論出遺跡	縄文・弥生・古墳
6	米良草遺跡	弥生	16	新田遺跡	古墳	26	虫喰谷遺跡	旧石器・縄文・奈良
7	二目川遺跡	弥生	17	井ノ久保遺跡	平安	27	松岡古窯跡群	奈良
8	水分神社銅矛出土地	弥生	18	毛井遺跡	縄文～近世	28	上牧ノ内ノ遺跡	奈良・平安
9	岡原遺跡	弥生	19	一方平Ⅰ遺跡	旧石器・縄文	29	毛利空墓墓	
10	松岡遺跡	弥生	20	一方平Ⅱ遺跡	旧石器・縄文			

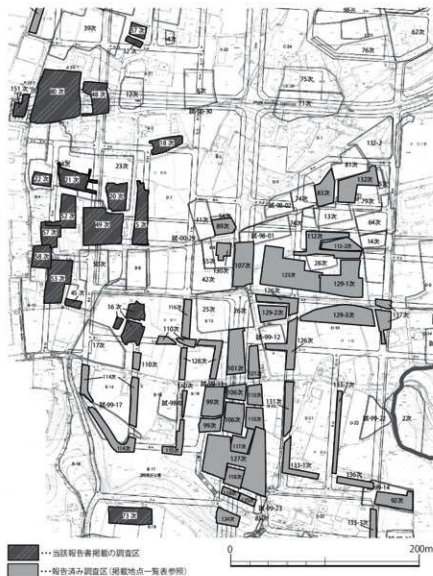
第4図 周辺遺跡位置図(1/40,000)

第三章 調査の成果

第1節 調査の概要

本書で報告の対象となる調査は、大分市大字横尾において平成4～12年度および平成25年度に実施された横尾土地区画整理事業に伴う発掘調査で、18調査地点に及び、すべて横尾遺跡群の西域内に所在している。当地は、古代の粘土探掘坑が数多く確認されており、遺構検出面から遺構を0.2～0.3m程度掘り下げると、遺構の壁面から良質の白色粘土層が確認できる地域である。

調査の結果、古代の粘土探掘坑群とともに、中世の掘立柱建物跡、近世の掘立柱建物跡や井戸跡・早桶を用いた土坑墓・溝跡、近世から近代にかけての酒造遺構群などが確認された。以下、調査区ごとに成果を報告する。



第5図 調査範囲図(1/4,000)

第2節 各地区の遺構と遺物

(1) 横尾遺跡第5次調査

1. 調査概要

横尾遺跡第5次調査地点は、大分市大字横尾字無田に所在する。調査区は南北に細長い長方形で、調査面積は1,000㎡を測る。調査前は水田として利用されていた。調査は平成4年5月27日に開始し、同年9月9日に終了した。遺構検出面の標高は、北端で31.40m前後、南端で31.80m前後を測り、南から北側にかけて緩やかに傾斜している。基本土層は、表土である水田耕作土層が0.3m厚であり、その下に0.2m厚の黒茶褐色土が堆積し、この層を除去すると黄色粘質土層が確認でき、この上面で遺構を検出することができる。さらに遺構内を0.1～0.2m程度掘り下げると、遺構壁面から良質の白色粘土層に変わっているのが確認できる。検出した遺構は、調査区中央部に集中しており、その大半が土坑で109基を確認している。土坑同士が複雑に切り合っており、また遺構内からの出土遺物が僅少であるため、新旧関係はほとんど不明である。時期が判別できる土坑に関しては、9基から9世紀代の土師器の坏や甕が出土している。SK108は、調査区中央よりやや北側で検出された土坑である。長軸0.88m、短軸0.68m、検出面からの深度は0.15mを測る。遺構内から9世紀前半の土師器坏dが出土している。坏dの調整については、内面ではナデ後に手持ちヘラケズリを行っている。また外面の調整については、体部の下半では手持ちヘラケズリを行っている。体部の上半については、器面剥落のため調整不明瞭ながらも手持ちヘラケズリを行ったような痕跡が認められる。また調査区の南側からは、近世の溝跡3条を確認している。

2. 遺構

土坑

SK001(第7図)

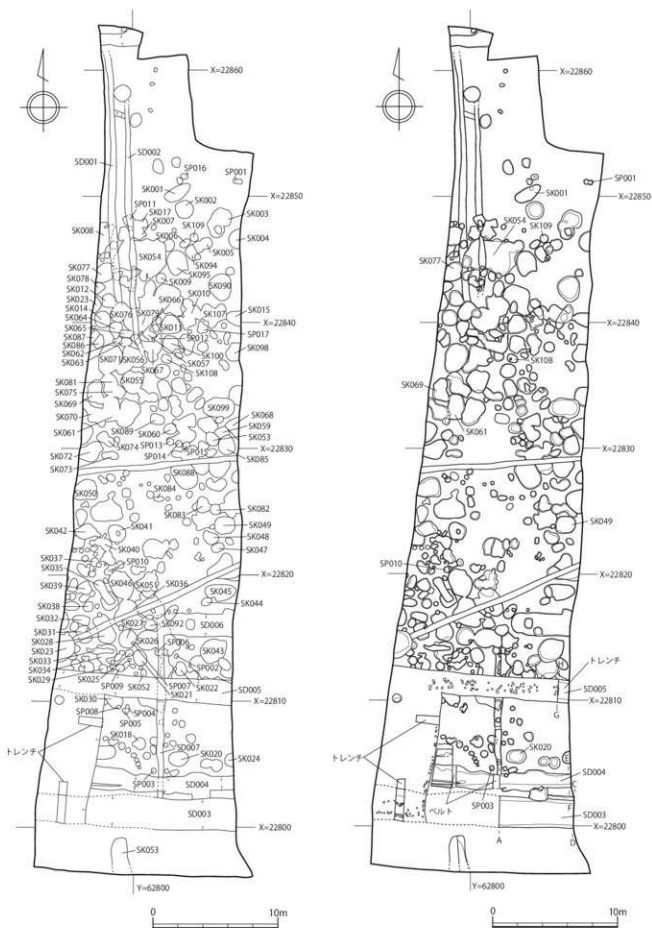
調査区北側で検出された大型土坑である。平面形状は長楕円形を呈し、長軸2.26m、短軸1.10m、検出面からの最大深は0.29mである。断面形状は、浅い舟底状になっており、床面は中心部が盛り上がり、多少の凸凹の起伏が認められる。埋土は、上層が淡黒色を基調とする硬質土で、下層は淡茶褐色を基調とする硬質土である。土層の観察により、遺構の埋没は自然堆積によると考えられる。遺構内から土師器坏a4が1点出土し、遺構時期は9世紀前半頃に位置づけられる。

SK020(第7図)

調査区の南側で検出された土坑である。平面形状は不整楕円形を呈し、長軸1.49m、短軸0.98m、検出面からの最大深は0.24mを測る。断面形状は、舟底状を呈している。埋土は、淡黒色を基調とする硬質土層であり、下層にはこの淡黒色土に明黄褐色土ブロックが混入する。遺構内から9世紀前半頃と考えられる土師器坏片が出土している。

SK049(第7図)

調査区の中央部で検出した土坑で、切り合い関係はSK049が北側にある大きな浅い溜まり状の土坑を切っている。平面形状は不整楕円形を呈し、長軸1.55m、短軸1.34m、検出面からの最大深は0.16mを測る。断面形状は、床面の中心部が盛り上がり、多少の凸凹の起伏が認められる。埋土は、上層が明茶褐色を基調とする軟質土層で、下層は黒色軟質土層である。遺構内から土師器坏a4が1点出土しており、時期は9世紀後半頃と考えられる。

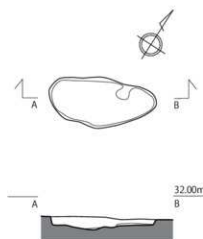


第6図 第5次調査区遺構配置図・全体遺構図(1/300)

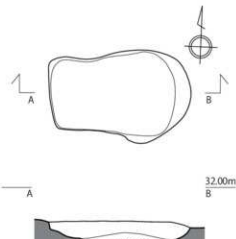
SK054(第8図)

調査区の北側で検出した大型の浅い溜まり状の遺構である。切り合い関係は、SK054が南北方向に走るSD001とSD002に切られている。平面形状は不整楕円形を呈し、長軸4.08m、短軸2.70m、検出面からの最大深度は0.24mを測る。遺構内から9世紀前半頃の土師器aや甕aが出土している。

SK001

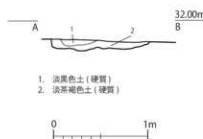


SK020



SK069(第8図)

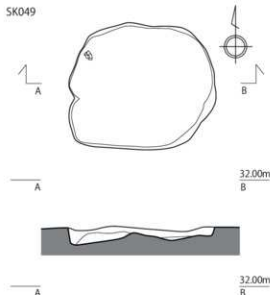
調査区の中央で検出した大型の浅い溜まり状の遺構である。SK061との切り合い関係は認められるが、新旧関係は不明である。平面形状は不整楕円形を呈し、長軸1.84m、短軸1.08m、検出面からの最大深度は0.12mを測る。断面形状は浅い皿状で、床面に多少の凸凹の起伏が認められる。埋土は、黒色軟質土層に茶色土と黄灰色土がブロック状に混入している。遺構内から弥生時代中期の甕底部破片が出土している。



SK077(第8図)

調査区北側、SK054の西隣りで検出した土坑で、SD001に切られている。一部調査区外にかかっているが、平面形状は不整楕円形を呈し、長軸1.78m、短軸1.44m、検出面からの最大深度は0.18mを測る。断面形状は、床面に明確な凸凹の起伏が認められる。下層の茶灰色土層から土師器甕aの破片が出土しており、SK054の破片と接合している。遺構の時期は、9世紀前半頃と考えられる。

SK049



溝跡

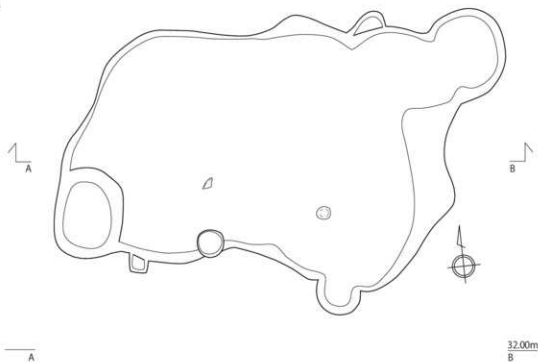
SD003(第9図)

調査区南端で検出した東西方向に走る溝でSD005の溝に切られている。両端は調査区外に延びており、西側部分は未掘である。溝の規模は、長さ16+am、最大幅2.52m、検出面からの最大深度は0.50mである。ほぼ直線状に走っており、主軸方向はN-89°-Wを指向している。断

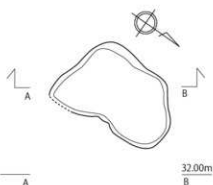


第7図 SK001・SK020・SK049 遺構実測図(1/40)

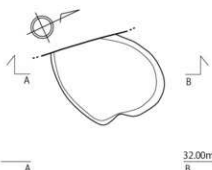
SK054



SK069



SK077



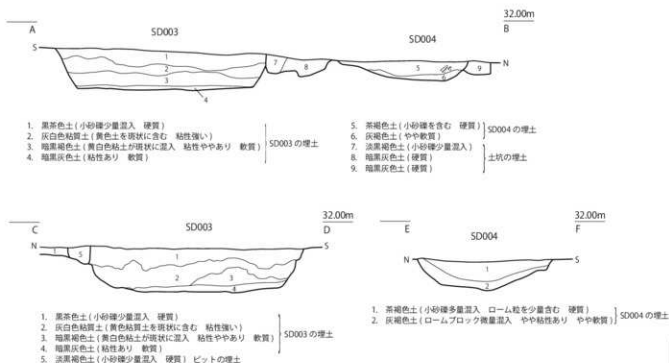
1. 黒色土 (軟質)
2. 黄灰色土ブロック
3. 赤色土 (軟質)



1. 黒色土 (軟質)
2. 茶灰色土 (やや軟質)
3. 灰褐色土 (硬質)



第8図 SK054・SK069・SK077 遺構実測図 (1/60)



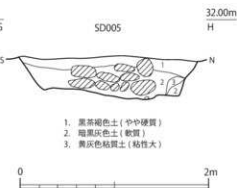
面形状は、緩い逆台形状である。土層の観察により、東側壁面土層の第4層では淡黒褐色土に小砂礫が少量混入していたことから、流水があったことが窺える。遺物は、肥前産の銅版印刷の染付碗や染付小坏、国産陶器碗や甕などが出土していることから、18世紀後半から19世紀にかけて廃絶したものと考えられる。

SD004(第9図)

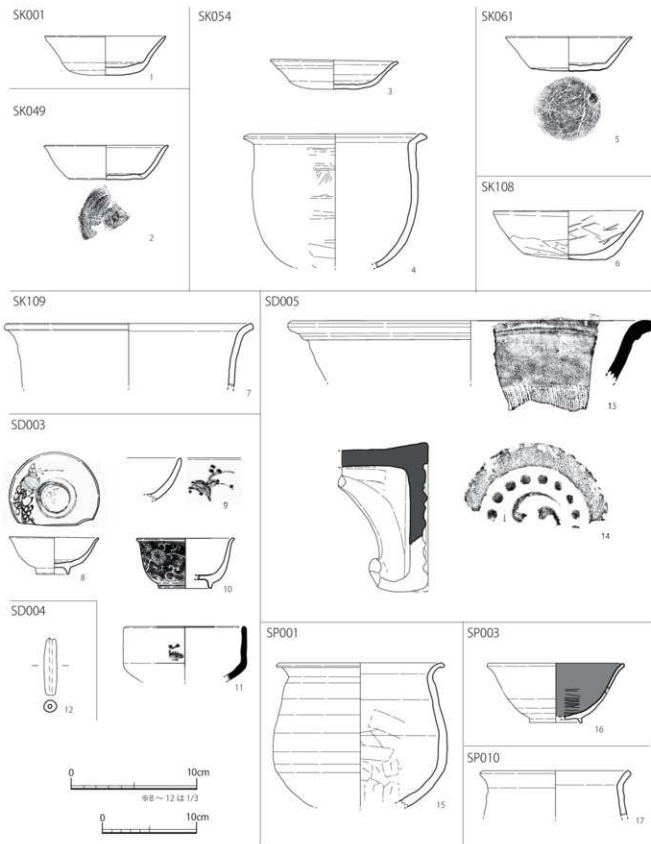
調査区南端で検出した東西方向に走る溝で、SD003と並行し、SD005に切られている。溝の規模は、長さ11+αm、最大幅1.80m、検出面からの最大深度は0.22mである。ほぼ直線状に走っており、主軸方向はN-87°-Wである。断面形状は、緩い丸底状である。埋土は、上層が小砂礫を多く含む茶褐色硬質土層で、下層はやや軟質の灰褐色土層である。遺物は、須恵器破片や土製品・土鍾1点が出土しており、遺構時期が判別できる遺物は出土していない。19世紀代のSD005に切られていることや、18世紀後半から19世紀にかけて遺構時期が想定されるSD003と並行していることなどから、SD003と同時期、もしくはそれに前後する時期が考えられる。

SD005(第9図)

調査区の南側で検出した溝で、平面形状は逆L字形の鉤の手状を呈している。SD003とSD004の溝を切っている。東側の一部を遺構掘削したのみで、他の部分は未掘である。東側部分の東西方向に走る溝に関しては、最大幅1.90m、検出面からの最大深度は0.44mである。ほぼ直線状に走り、主軸方向はN-85°-Wを指向している。断面形状は、逆台形状である。埋土は、上層が黒茶褐色軟質土層で、下層は暗黒灰色軟質土層である。土層の観察から、内部に径0.1～0.4m大の円礫を2～3段積み上げており、暗渠の機能を有していたものと考



第9図 SD003・SD004・SD005 土層図 (1/40)



第 10 図 第 5 次調査区出土遺物実測図 (1/3・1/4)

えられる。西側部分に関しては、平面形状は方形を呈しているが、未掘であり、また調査区外にかかっているため、どのように遺構が展開するのか不明である。また遺構検出時には、方形遺構の東端部分に南北方向の石列が認められる。埋土中から唐津産陶器の播鉢や軒丸瓦片が出土しており、19世紀代に位置づけられる。

3. 小結

今回の調査では、調査区の中央部を中心に、109基の土坑が広範囲で確認されている。土坑の形態については、平面形状が不整楕円形や隅丸長方形などを呈するものが多く、規模に関しては平面径1.5～2.0m前後のものが多く、大きいものではSK069のように長軸3.0m以上の大型の遺構も数基認められる。検出面からの深度に関しては、0.2～0.5mを測る浅い土坑が多い。遺構の時期が判別できる土坑は9基と数少なく、遺物は主に9世紀前半から中頃にかけての土師器環や甕が出土している。土坑群の特徴としては、遺物がほとんど出土していないことや、完掘時に表土から0.5m下部に厚く堆積する白色粘土層まで掘り込まれていること、遺構の断面形状で床面や壁面に関しては凹凸の起伏が認められるものが多いことなどから、今回確認した土坑の大半が粘土採掘坑跡であると考えられる。またSK001やSK049・SK061からは土師器環a4、SK108からは土師器環dが、それぞれ単体で1点ずつ出土している。これらの遺物が出土した土坑に関しては、遺構の規模で長軸が1.5～2.0mの範囲内で収まり、検出面からの深度については0.1～0.3mと浅いという点から、土坑群の中には土坑墓と考えられる遺構の可能性も考慮される。

また調査区南側で確認した近世の溝跡で、SD003・SD004・SD005の3本の溝が東西方向に並行して走っている。3条の溝跡の切り合い関係は、SD005がSD003とSD004を切っている。SD004からは時期の判別できる遺物が出土していないが、SD003からは18世紀後半の遺物、SD005からは19世紀代の遺物が出土していることから、SD004は両遺構に前後する遺構時期が考えられ、遺構の時期差はほとんどないようである。SD005は、ほとんどが未掘であるが、西側では平面形状が方形を呈する大型遺構を検出し、方形遺構の東側部分については整地を行った土の流出を防ぐために設けられたと考えられる石列が確認されている。

(2) 横尾遺跡第 16 次調査

1. 調査概要

横尾遺跡第 16 次調査地点は、大分市大字横尾字野中に所在し、現在の 2 号児童公園内に位置している。調査区は、北側調査区、南側調査区、西側調査区の 3 地点である。各調査区の面積は、北側調査区が 280 m²、南側調査区は 400 m²、西側調査区は 80 m²で、合計 760 m²である。遺構検出面の標高は、北側調査区の北端で 32.50 m 前後、南側調査区の南端で 32.00 m 前後を測り、北側から南側にかけて緩やかに傾斜している。発掘調査は、平成 5 年 5 月 27 日から同年 7 月 21 日の期間で実施した。3 つの調査地点で確認した遺構は、掘立柱建物跡 14 棟、柵状遺構 7 条、土坑 3 基、溝跡 5 条、ピット多数である。溝跡 5 条に関しては、近世の陶磁器片が多く出土していることから 17 世紀から 18 世紀にかけての遺構であると判断できるが、土坑や建物の柱穴・ピットからの出土遺物は少量であるため、時期を判別できる遺構は数少ない。

北側調査区で検出した SB005 は、桁行 3 ～ 4 間 × 梁行 2 間、身舎面積約 27 m²の南北棟建物である。桁行の主軸方向は N - 16° - E を指向している。柱穴から遺物は出土していない。

2. 遺構

掘立柱建物跡

SB001(第 13 図)

北側調査区で検出した、桁行 2 間 × 梁行 1 間、身舎面積 11.55 m²の掘立柱建物跡である。建物は南北棟で、桁行の主軸方向は N - 11° - E である。柱穴の平面形状は円形もしくは隅丸方形を呈し、径 0.30 ～ 0.44 m、検出面からの深度は 0.19 ～ 0.41 m を測る。柱穴柱間は、桁行が 2.08 ～ 2.52 m、梁行が 2.30 ～ 2.68 m である。柱穴から遺物が出土していないため、遺構の時期は不明である。

SB002(第 13 図)

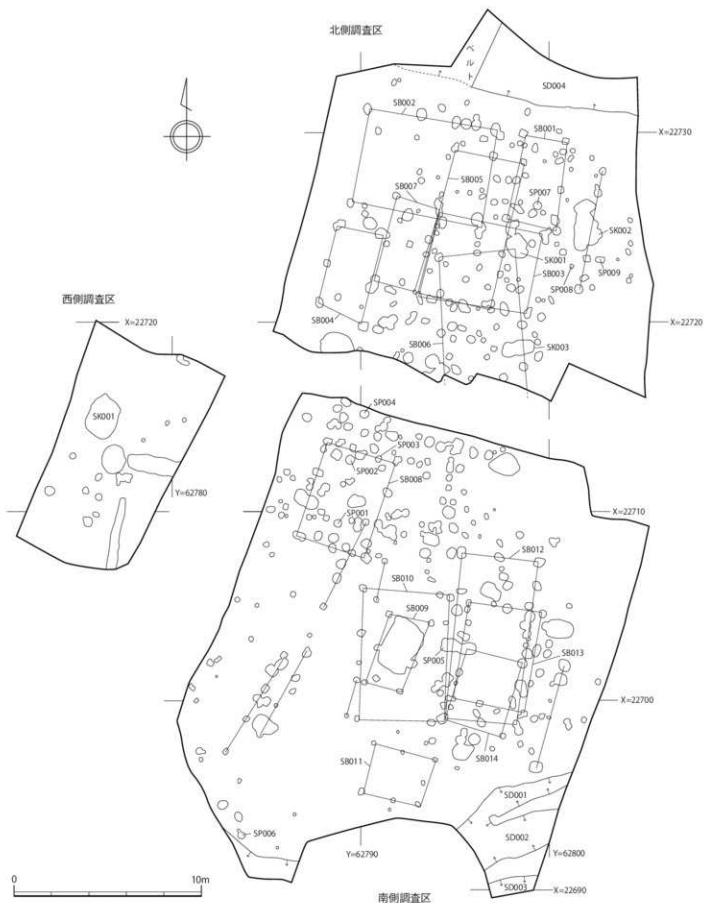
北側調査区で検出した、桁行 3 間 × 梁行 1 間、身舎面積 36.23 m²の掘立柱建物跡で、16 次調査地点の中では SB012 の次に平面規模が大きい。SB005 の柱穴との切り合い関係が認められるが、新旧関係は確認できなかった。建物は東西棟で、梁行の主軸方向は N - 10° - E を指向している。柱穴の平面形状は円形もしくは楕円形を呈し、径 0.36 ～ 0.68 m、検出面からの深度は 0.09 ～ 0.45 m を測る。柱穴柱間は、梁行が 5.20 m 前後であるが、桁行は 1.80 ～ 3.06 m で、間隔にばらつきが認められる。出土遺物がないため、遺構時期は不明であるが、東側に隣接する SB001 の桁行の主軸方向と、SB002 の梁行の主軸方向がほぼ同じであることから、両遺構は同時に造営された可能性が考えられる。

SB003(第 14 図)

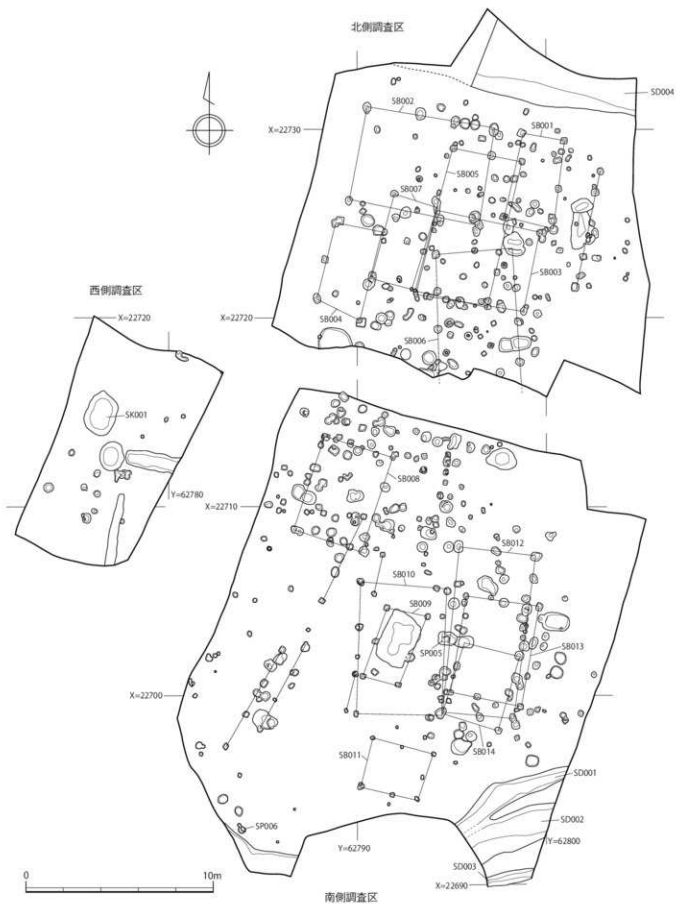
北側調査区で検出した、桁行 3 間 × 梁行 1 間、身舎面積 25.45 m²の掘立柱建物跡である。SB007 の柱穴との切り合い関係が認められるが、新旧関係は確認できなかった。建物は東西棟で、梁行の主軸方向は N - 13° - E である。柱穴の平面形状は楕円形もしくは不整楕円形を呈し、径 0.24 ～ 0.74 m、検出面からの深度は 0.26 ～ 0.44 m を測る。柱穴 2 基から根石と考えられる径 0.2 ～ 0.3 m 大の平石を各 1 点ずつ確認している。柱穴柱間は、桁行が 1.24 ～ 2.32 m、梁行が 4.30 ～ 4.60 m であり、桁行北側の間隔が均一であるのに対し、桁行南側では間隔にばらつきが認められる。柱穴からは遺物が出土していない。

SB004(第 14 図)

北側調査区の東南側で検出した、桁行 2 間 × 梁行 1 間、身舎面積 11.65 m²の掘立柱建物跡である。SB007 の柱穴と切り合うが、新旧関係は確認できなかった。建物は南北棟で、桁行の主軸方向は N - 15° - E である。

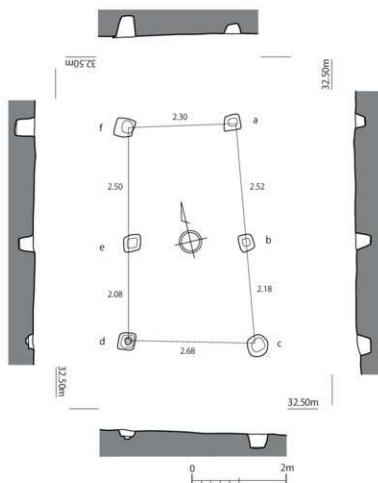


第 11 図 第 16 次調査区遺構配置図 (1/200)

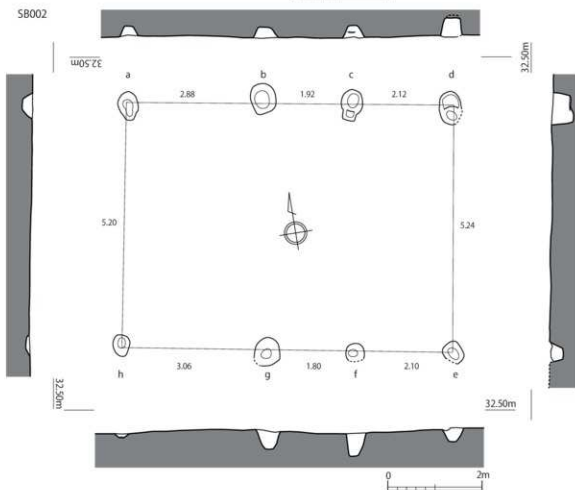


第 12 図 第 16 次調査区全体遺構図 (1/200)

SB001

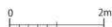
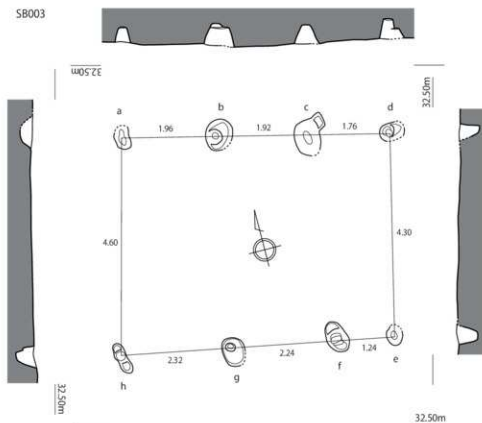


SB002

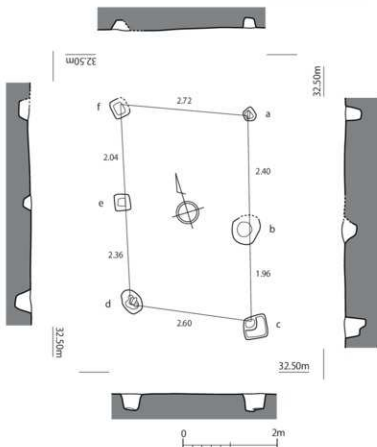


第 13 図 SB001・SB002 遺構実測図 (1/80)

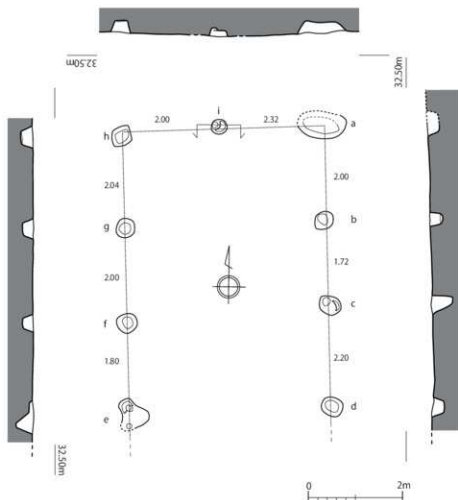
SB003



SB004



第 14 図 SB003・SB004 遺構実測図 (1/80)



第 15 図 SB006 遺構実測図 (1/80)

柱穴の平面形状は隅丸方形もしくは楕円形を呈し、径 0.24 ～ 0.52m、検出面からの深度は 0.20 ～ 0.44m を測る。柱穴 1 基から径 0.1 ～ 0.2m 大の根石 3 点を確認している。柱穴柱間は、桁行が 1.96 ～ 2.40m、梁行が 2.70m 前後である。柱穴からの出土遺物がないため、建物の築造時期については不明である。

SB006(第 15 図)

北側調査区の南側で検出した、桁行 3 間以上 × 梁行 2 間の掘立柱建物跡である。柱穴が調査区外に展開する可能性が考えられるため、身舎面積については不明であるが、柱穴の確認範囲から 25 m²以上の面積を有していると考えられ、SB003 と同規模の建物が想定される。桁行の主軸方向は N - 2° - W で、ほぼ真北を指向している。柱穴の平面形状は楕円形もしくは不整楕円形を呈し、径 0.32 ～ 1.02m、検出面からの深度は 0.16 ～ 0.44m を測る。柱穴 1 基から径 0.2 m 大の根石 2 点を確認している。柱穴柱間は、桁行が 1.72 ～ 2.20m、梁行が 2.00 ～ 2.32m である。柱穴からの遺物の出土はない。

SB007(第 16 図)

北側調査区で検出した、桁行 2 間 × 梁行 1 間、身舎面積 10.76 m²の掘立柱建物跡である。SB003 ・ SB004 ・ SB005 の柱穴との切り合い関係が認められるが、築造の新旧関係については確認できなかった。建物は南北棟で、桁行の主軸方向は N - 15° - E を指向している。柱穴の平面形状は円形を呈し、径 0.24 ～ 0.42m、検出面からの深度は 0.12 ～ 0.34m を測る。柱穴柱間は、桁行が 2.12m ～ 2.44m、梁行が 2.30 ～ 2.40m である。柱穴から遺物が出土していないため、建物の築造時期は不明である。

SB008(第 16 図)

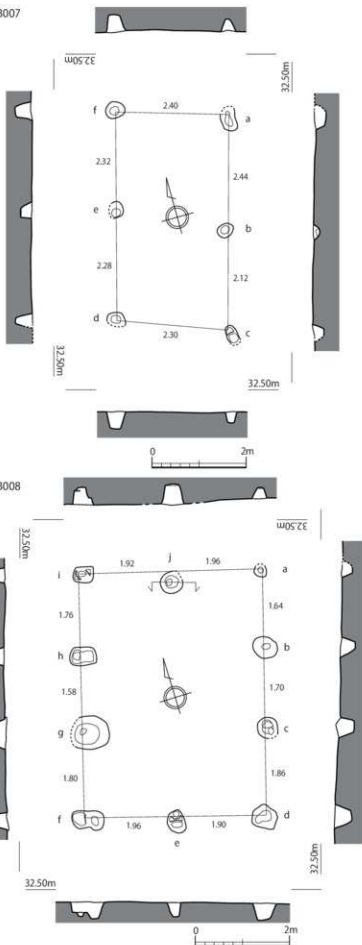
南側調査区の北西側で検出した、桁行 3 間 × 梁行 2 間、身舎面積 20.01 m² の掘立柱建物跡である。建物は南北棟で、桁行の主軸方向は N - 16° - E を指向している。柱穴の平面形状は楕円形もしくは隅丸方形を呈し、径 0.28 ~ 0.7 + α m、検出面からの深度は 0.25 ~ 0.43 m を測る。柱穴 4 基から径 0.1 ~ 0.2 m 大の根石を確認している。柱穴柱間は、桁行が 1.58 ~ 1.86 m、梁行が 1.90 m 前後である。柱穴から遺物が出土していないため、建物の築造時期は不明である。

SB009(第 17 図)

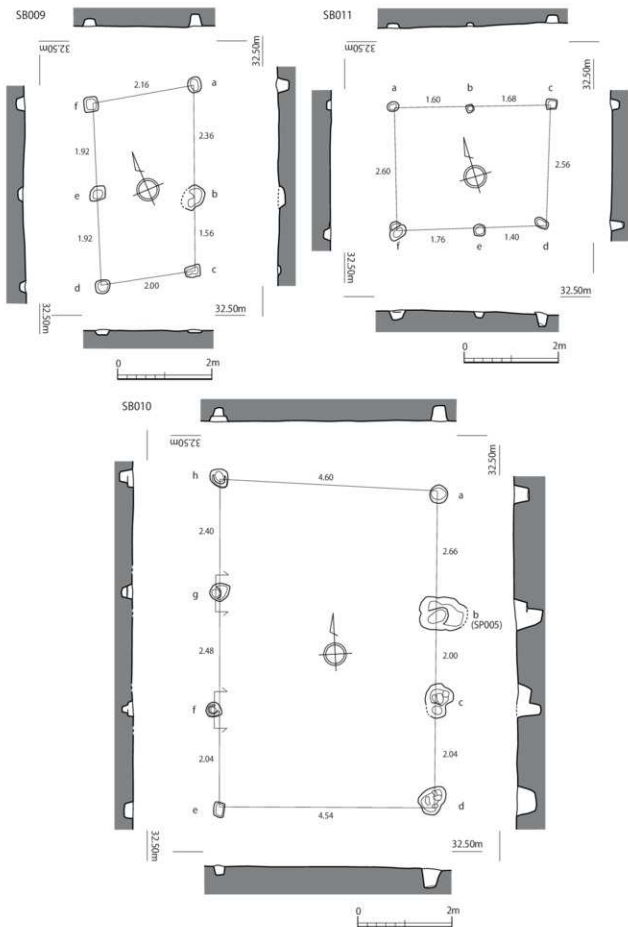
南側調査区の中央で検出した、桁行 2 間 × 梁行 1 間、身舎面積 8.07 m² の掘立柱建物跡である。建物は南北棟で、桁行の主軸方向は N - 22° - E を指向している。柱穴の平面形状は隅丸方形もしくは楕円形を呈し、径 0.24 ~ 0.52 m、検出面からの深度は 0.04 ~ 0.24 m を測る。柱穴柱間は、桁行が 1.56 ~ 2.36 m、梁行が 2.00 ~ 2.16 m である。他の掘立柱建物と同様に柱穴内からの出土遺物がなく、建物の築造時期は不明である。

SB010(第 17 図)

南側調査区の中央で検出した、桁行 3 間 × 梁行 1 間、身舎面積 31.12 m² で、第 16 次調査の中では SB002 と同規模の大型の掘立柱建物跡である。SB012 と SB014 の柱穴との切り合い関係が認められるが、築造の新旧関係については確認できなかった。建物は南北棟で、桁行の主軸方向は N - 2° - E を指向している。柱穴の平面形状は楕円形もしくは不整楕円形を呈し、径 0.22 ~ 0.9 + α m、検出面からの深度は 0.19 ~ 0.58 m を測る。柱穴 2 基から径 0.1 ~ 0.2 m 大の根石を各 3 ~ 4 点ずつ確認している。柱穴柱間は、桁行が 2.00 ~ 2.66 m、梁



第 16 図 SB007・SB008 遺構実測図 (1/80)



第 17 図 SB009・SB010・SB011 遺構実測図 (1/80)

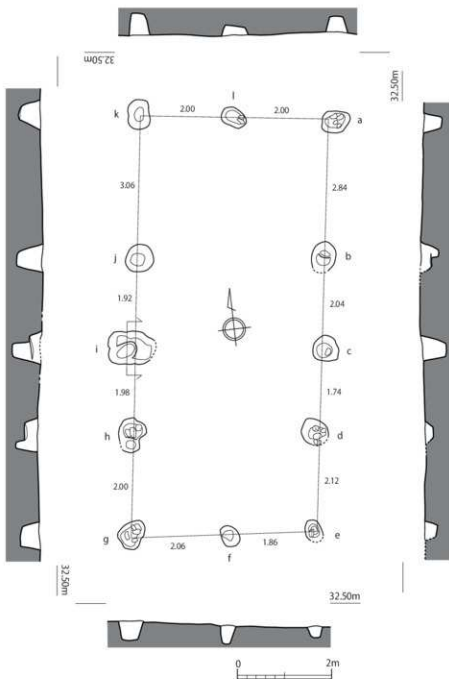
行が4.60m前後である。柱穴SP005については、SB012の柱穴になる可能性もあり、平面形状は不整楕円形を呈し、長軸約0.9mと他の柱穴に比べて大型のビットであり、2つの柱穴が切り合っている可能性が考えられるが、新旧関係は判断できなかった。このSP005から中世の瓦質土器播鉢や土師質土器破片が出土している。

SB011(第17図)

南側調査区の南側で検出した掘立柱建物跡で、北隣りに大型建物のSB010がある。建物の規模は、桁行2間×梁行1間、身舎面積8.31㎡である。建物は東西棟で、梁行の主軸方向はN-16°-Eを指向している。柱穴の平面形状は楕円形もしくは隅丸方形を呈し、径0.14~0.40m、検出面からの深度は0.05~0.25mを測る。柱穴柱間は、桁行が1.40~1.76m、梁行が2.60m前後である。柱穴から遺物は出土していない。

SB012(第18図)

南側調査区の中央で検出した、桁行4間×梁行2間、身舎面積35.05㎡で第16次調査の中ではSB002と、SB010と同様に大型の掘立柱建物跡である。SB010・SB013・SB014の柱穴との切り合い関係が認められるが、築造の新旧関係については確認できなかった。建物は南北棟で、桁行の主軸方向はN-6°-Eを指向している。柱穴の平面形状は楕円形もしくは不整楕円形を呈し、径0.36~0.9+a m、検出面からの深度は0.24~0.59mを測る。柱穴7基から径0.1~0.2m大の根石を各1~4点ずつ確認している。柱穴柱間は、桁行が1.74~3.06m、梁行が1.86~2.00mで、東西の両桁行については北側から1基目と2基目の柱穴柱間の幅が広がっている。柱穴SP005は、長軸約0.9mを測る大型のビットであるため、SB012とSB010の2つの柱穴が切り合っている可能性が考えられるビットであるが、新旧関係は判断が出来なかった。このSP005から中世の瓦質土器播鉢と土師質土器破片が出土している。



第18図 SB012遺構実測図(1/80)

SB013 (第 19 図)

南側調査区の中央で検出した、桁行 3 間 × 梁行 2 間、身舎面積 20.09 m² の掘立柱建物跡である。SB012 の柱穴との切り合い関係が認められるが、新旧関係については不明である。建物は南北棟で、桁行の主軸方向は N - 11° - E を指向している。柱穴の平面形状は平面楕円形もしくは隅丸方形を呈し、径 0.26 ~ 0.66m、検出面からの深度は 0.07 ~ 0.58m を測る。柱穴 4 基から径 0.1 ~ 0.2 m 大の根石を各 1 ~ 4 点ずつ確認している。柱穴柱間は、桁行が 1.40 ~ 1.96m、梁行は 1.32 ~ 2.44m である。柱穴から遺物は出土していない。

SB014 (第 19 図)

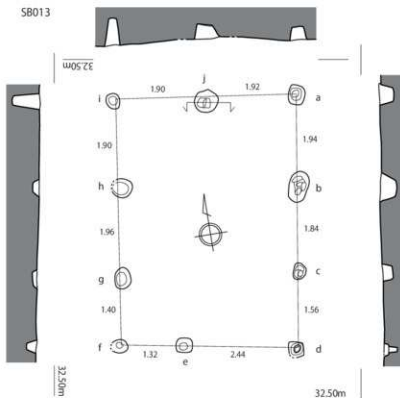
南側調査区の中央で検出した、桁行 2 間 × 梁行 1 間、身舎面積 12.21 m² の掘立柱建物跡である。SB010、SB012 の柱穴との切り合い関係が認められるが、新旧関係については確認できなかった。建物は南北棟で、桁行の主軸方向は N - 16° - E を指向している。柱穴の平面形状は不整楕円形もしくは楕円形を呈し、径 0.18 ~ 0.9 + αm、検出面からの深度は 0.18 ~ 0.41m を測る。柱穴 5 基から径 0.1 ~ 0.2 m 大の根石を各 1 ~ 4 点ずつ確認している。柱穴柱間は、桁行が 2.00m 前後、梁行は 3.00m 前後で、ほぼ均一である。柱穴から遺物が出土していないため、建物の築造時期は不明である。

土坑

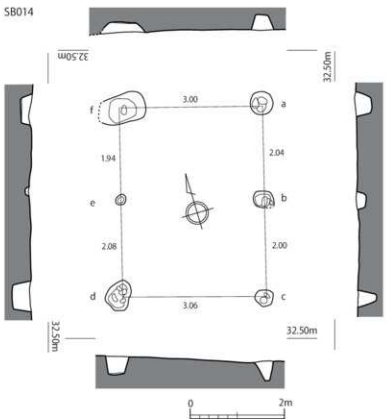
SK001 (第 20 図)

西側調査区で検出した土坑である。平面形状は不整楕円形を呈し、長軸 1.94m、短軸 1.51m、検出面からの最大深度は 0.28m を測る。断面形状は、

SB013



SB014



第 19 図 SB013・SB014 遺構実測図 (1/80)

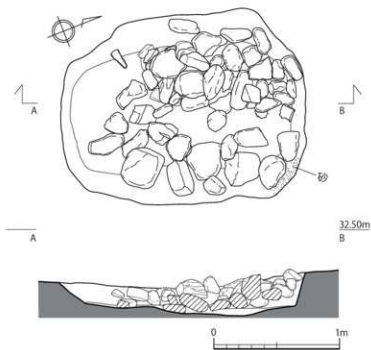
浅い舟底状になっている。土坑内から径 0.1～0.4 m 大の礫石 60 数点が乱雑に廃棄されたような状況で検出し、人為的に石積みされた痕跡は認められなかった。遺構内から焼土塊や炭化物の痕跡は確認できなかったが、北東隅で礫石の下に砂が入っているのを確認した。遺構内からは石臼片が出土したのみで、遺構の時期は不明である。

溝跡

SD001(第 21 図)

南側調査区の南東隅で確認した東西方向に走る溝状遺構である。溝の西側部分では、SD002 との切り合い関係が認められるが、新旧関係は不明である。溝の両端は調査区外に延びているため明確な規模は不明であるが、長さ $5.5 + a$ m、

最大幅 1.32 m、検出面からの最大深度は 0.34 m を測る。断面形状は、逆台形状になっている。ほぼ直線状に走り、主軸方向は $N - 66^{\circ} - E$ である。溝の東西両端床面の標高値はほぼ同じであるため、流水方向については不明である。溝の東側では径 0.1～0.3 m 大の多量の礫石が散在した状況で検出されたことから、廃棄されたものと考えられる。遺構内からは近世の国産陶器播鉢や瓦質土器火鉢などが出土している。また中世の土師器環 a や甕、黒色土器 A 類の椀 c など出土している。



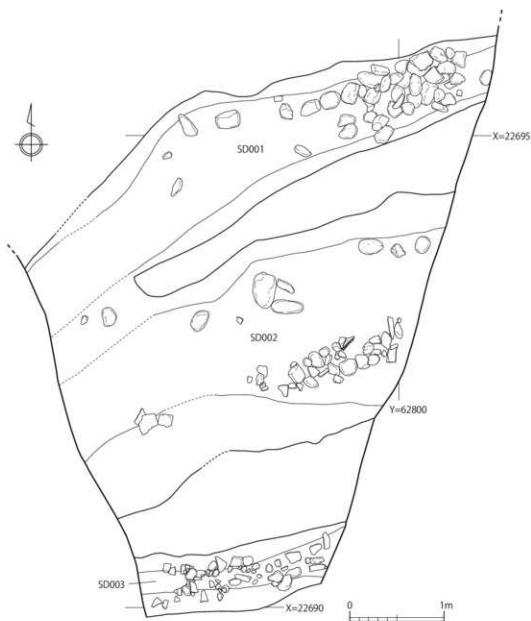
第 20 図 SK001 遺構実測図 (1/30)

SD002(第 21 図)

南側調査区の南東隅で確認した SD001 と並行する形で東西方向に走る溝状遺構である。溝の西側部分では SD001 との切り合い関係が認められるが、新旧関係は不明である。溝の両端は調査区外に延びているため明確な規模は不明であるが、長さ $4 + a$ m、最大幅 2.21 m、検出面からの最大深度は 0.26 m を測る。断面形状は、浅い皿状に窪んでいる。ほぼ直線状に走り、主軸方向は $N - 71^{\circ} - E$ である。溝の東西両端床面の標高値は、西端床面の方が東端床面より 0.1 m 程度高くなっている。溝の東側部分では、径 0.1～0.4 m 大の礫石群が溝下端ラインに並行する形で、東西方向 2 列に配石されている。遺構内から土師質土器甕、備前産陶器の播鉢などが出土していることから、遺構の時期は 17 世紀代と考えられる。

SD003(第 21 図)

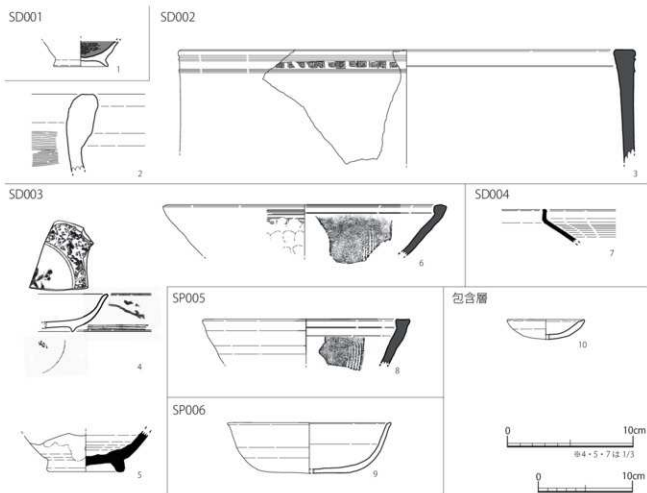
南側調査区の南東隅で確認した SD001・SD002 と並行する形で東西方向に走る溝状遺構である。溝の両端は調査区外に延びているため明確な規模は不明であるが、長さ $2.1 + a$ m、最大幅 0.69 m、検出面からの最大深度は 0.09 m を測る。断面形状は、浅い皿状に窪んでいる。ほぼ直線状に走り、主軸方向は $N - 81^{\circ} - E$ である。溝の東西両端床面の標高値は、ほぼ同じである。溝の東側部分では径 0.1～0.2 m 大の礫石群が出土し、その中に国産陶磁器などの破片が混入している。遺構内からは肥前産磁器の染付碗や染付皿、国産陶器碗、瓦質土器播鉢などが出土し、遺構の時期は 18 世紀代と考えられる。



第21図 SD001・SD002・SD003遺構実測図(1/40)

3. 小結

今回の調査では、14棟の掘立柱建物跡を確認したが、遺物はSB010とSB012の柱穴SP005から中世の瓦質土器插鉢と土師質土器破片が出土しているのみで、ほかの建物の柱穴からは遺物がほとんど出土していないため、建物時期を判別するのは困難である。ただし、各掘立柱建物の規模・主軸方向・身舎面積などから、大きく4つのグループに分類することができる。AグループはSB001・SB002・SB003・SB004・SB007で、桁行および梁行の主軸方向がN-10°~15°-Eの範囲内で収まるものである。さらに身舎面積の規模から、10~12㎡の小型規模のSB001・SB004・SB007と25㎡以上のやや大型規模のSB002・SB003に再分類することができる。Bグループは、南北棟建物のSB006・SB010・SB012である。身舎面積30㎡以上の大型規模で、桁行の主軸方向がほぼ真北から6°以内の範囲で指向している建物である。Cグループは、SB009・SB011・SB014である。身舎面積8~13㎡以内の小型規模で、桁行および梁行の主軸方向がN-16°~22°-Eの範囲内で収まるものである。Dグループは、南北棟建物のSB005・SB008・SB013である。身舎面積が20~27㎡の規模で、桁行の主軸方向がN-11°~16°-Eの範囲内で収まるものである。今回4つのグループに分類したが、今回



第22図 第16次調査区出土遺物実測図 (1/3・1/4)

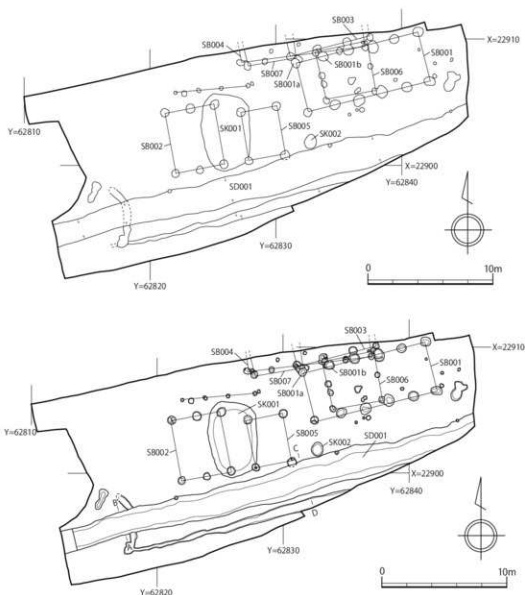
調査した掘立柱建物跡以外の遺構時期が判別できる遺構を見てみると、南側調査区の南東隅で確認した3条の溝跡で、SD001が近世、SD002が17世紀代、SD003が18世紀代である。また南側調査区の南西隅で確認したSP006からは8世紀後半の土師器環a、SD002から15世紀代の瓦質土器火鉢、包含層からは16世紀代の土師器小皿Cが出土している。このことから8世紀代、15～16世紀代、17～18世紀代の3つの築造時期が推定できる。建物群の分布が密集している状況から、継続的に建物が建て替えられたものと推定できる。今回建物群を4つのグループに分類したが、SB010とSB012の柱穴SP005から中世後期の遺物が出土した状況から、おそらく15～16世紀の間に4～5期に渡って継続的に建て替えが行われたと考えられる。

(3) 横尾遺跡第 18 次調査

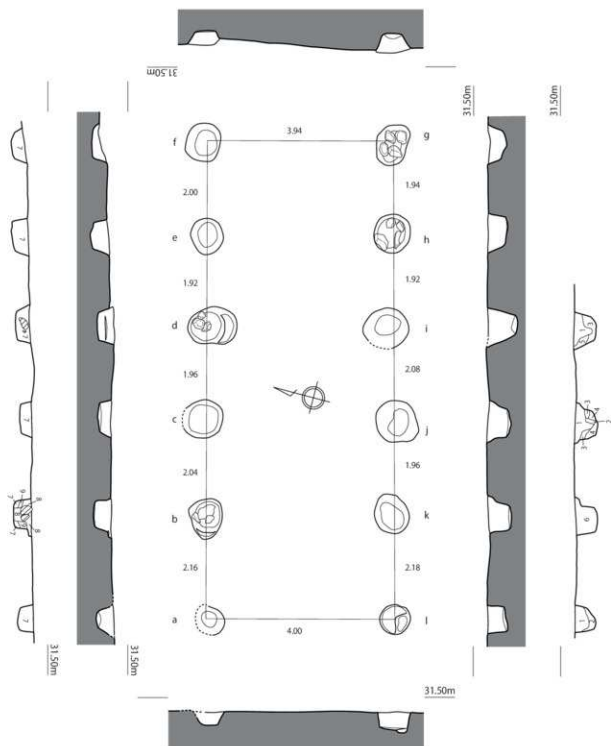
1. 調査概要

本調査地点は、大分市大字横尾字無田に所在する。横尾土地区画整理事業の B 地区北側の B-2 の区画街路南北線と東西線が交差する場所に位置する。調査面積は 400 m²で、遺構検出面の標高は調査区の東西両端ともに 32.20 m 前後を測る平坦地である。発掘調査は、平成 5 年 9 月 27 日～同年 10 月 22 日の期間で実施した。検出した遺構は、掘立柱建物跡 7 棟、柵状遺構 1 条、溝跡 2 条、土坑 2 基などであり、これらの遺構から主に 16 世紀代の遺物が出土している。

SB007 は個別図を掲載していないが、調査区北側で確認された、桁行 1 間以上 × 梁行 1 間の掘立柱建物跡で、一部調査区外に展開していると考えられる。SB007 の柱穴は、SB003 と SB004 の柱穴に切られているが、柱穴から出土遺物がないため、遺構の時期は不明である。



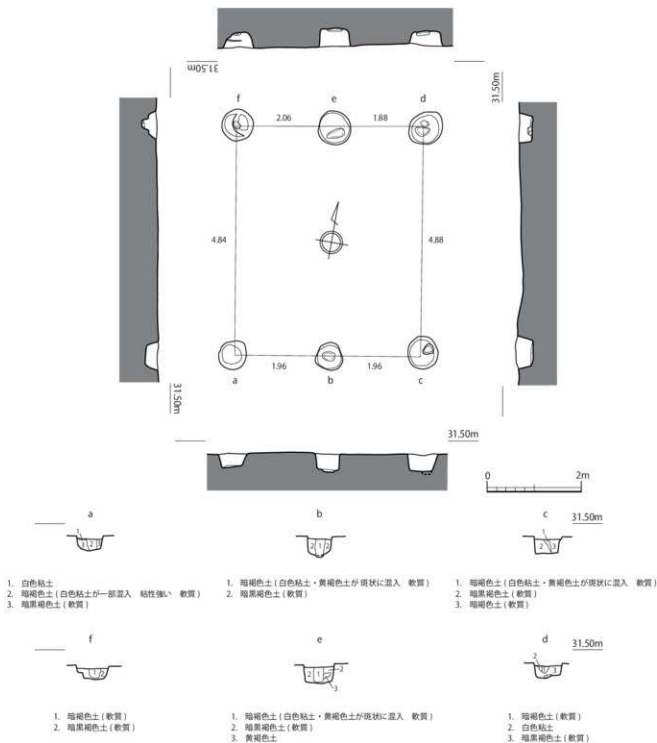
第 23 図 第 18 次調査区遺構配置図・全体遺構図 (1/300)



1. 暗褐色土（白色粘土が一部混入）（軟質）
2. 白色粘土と暗褐色土と黄褐色土が混在（比率はほぼ同じ）（軟質）
3. 黄褐色土と白色粘土の混土層（粘性大）（軟質）
4. 暗褐色土（黄褐色土粒が混入）
5. 暗褐色土（白色粘土が一部混入）（軟質）
6. 暗褐色土（焼土粒が大量に混入）（軟質）
7. 暗褐色土（黄褐色土粒が少量混入）
8. 暗褐色土（白色粘土が一部混入）（軟質）
9. 白色粘土と暗褐色土の混土層（軟質）

0 2m

第 24 図 SB001 遺構実測図 (1/80)



第 25 図 SB002 遺構実測図 (1/80)

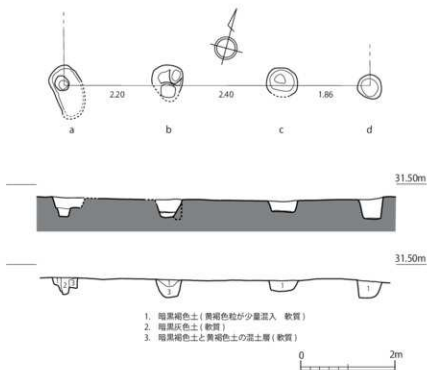
2. 遺構

掘立柱建物跡

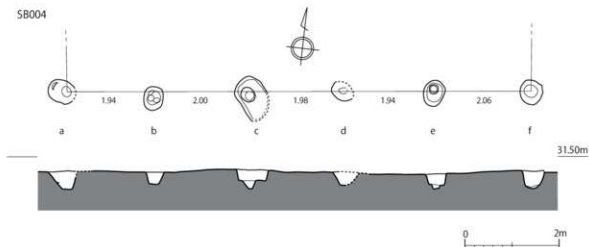
SB001(第 24 図)

調査区東側で確認された、桁行 5 間 × 梁行 1 間、身舎面積 40.02 m² を測る大型の掘立柱建物跡である。建物は東西棟で、梁行の主軸方向は N - 13° - W を指向している。切り合い関係は、SB001 の柱穴が SB004 の柱穴に切られ、SB006 の柱穴を切っている。柱穴の平面形状は円形もしくは隅丸方形を呈し、径 0.62 ~ 1.04m、検出面からの深度は 0.26 ~ 0.65m を測る。柱穴 b・d・g・h から径 0.1 ~ 0.4 m 大の根石を各 3 ~ 4 点ずつ確

SB003



SB004



第 26 図 SB003・SB004 遺構実測図 (1/80)

認した。土層の観察により、柱の抜き取り痕を柱穴 b・i・j より確認した。柱穴柱間は、桁行が 1.92 ～ 2.18m、梁行が 3.94 ～ 4.00m である。柱穴から景德鎮窯系青花碗や龍泉窯系青磁碗、土師質土器碗が出土しており、16 世紀後半頃に位置づけられる。

SB002(第 25 図)

調査区西側で確認された、桁行 1 間 × 梁行 2 間、身舎面積 19.10㎡を測る掘立柱建物跡である。建物は南北棟で、桁行の主軸方向は $N-10^{\circ}-W$ を指向している。切り合い関係は、SB002 の柱穴が SK001 を切っている。柱穴の平面形状は円形を呈し、径 0.52 ～ 0.82m、検出面からの深度は 0.26 ～ 0.37m を測る。柱穴 d・e・f から径 0.2 ～ 0.4 m 大の根石を各 1 ～ 3 点ずつ確認した。土層の観察により、柱痕が柱穴 a ～ f より確認でき、柱の径は 0.15 ～ 0.20m 前後である。柱穴柱間は、桁行が 2.00m 前後、梁行が 4.80m 前後である。柱穴からの出土遺物がなく、時期は不明である。

SB003(第26図)

調査区北東側で確認された、桁行3間×梁行1間以上の掘立柱建物跡で、一部調査区外に展開すると考えられる。この遺跡から梁行3間以上の掘立柱建物跡が確認されていないため、この建物は東西棟であると考えられ、梁行の主軸方向はN-15°-Wを指向している。切り合い関係は、SB001・SB004・SB006の柱穴との切り合い関係が認められ、SB001の柱穴との切り合い関係は不明であるが、SB006の柱穴を切り、SB004の柱穴に切られている。柱穴の平面形状は円形もしくは隅丸方形を呈し、径0.48~0.8+αm、検出面からの深度は0.19~0.41mを測る。柱穴cから径0.3m大の根石1点が確認された。土層の観察により、柱穴aから柱痕が確認できた。柱穴柱間は、桁行で1.86~2.40mである。柱穴から遺物は出土していない。

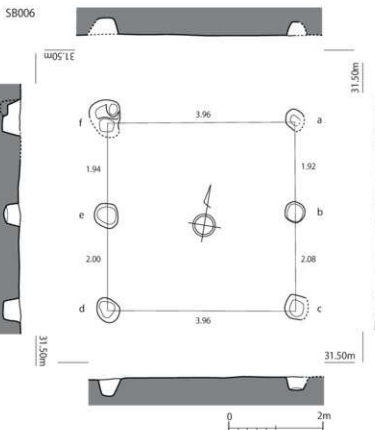
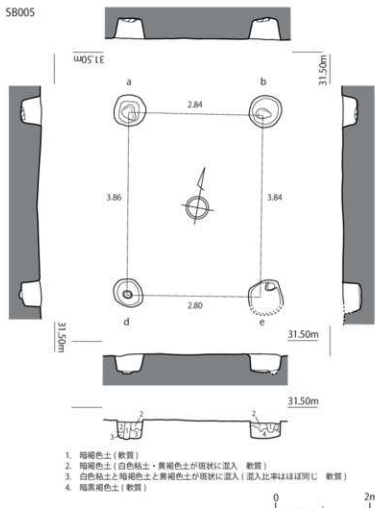
SB006

SB004(第26図)

調査区北東側で確認された、桁行5間×梁行1間以上の掘立柱建物跡で、一部調査区外に展開すると考えられる。建物は南北棟で、梁行の主軸方向はN-7°-Wを指向している。切り合い関係は、SB004の柱穴がSB001・SB003・SB006の柱穴を切っている。柱穴の平面形状は円形もしくは隅丸方形を呈し、径0.40~0.8+αm、検出面からの深度は0.22~0.37mを測る。1基の柱穴から径0.1~0.2m大の根石3点を確認した。柱穴柱間は、桁行で1.84~2.06mで、間隔は均一である。柱穴からの出土遺物がなく、時期は不明である。

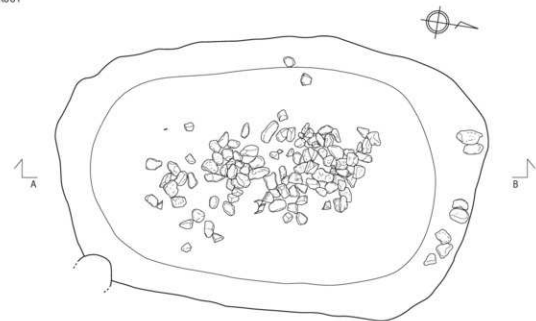
SB005(第27図)

調査区中央で確認されSB002の東



第27図 SB005・SB006 遺構実測図 (1/80)

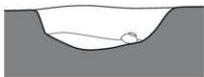
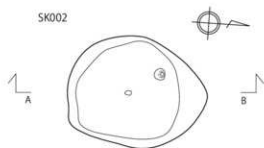
SK001



1. 暗黒褐色土 (軟質)



SK002



第 28 図 SK001・SK002 遺構実測図 (1/30・1/60)

側で検出された掘立柱建物跡である。建物の規模は、桁行 1 間 × 梁行 1 間、身舎面積 10.86 m² を測る。建物は南北棟で、桁行の主軸方向は、N - 10° - W を指向している。切り合い関係は、SB005 の柱穴が SD001 に切られ、SK001 を切っている。柱穴は、平面円形もしくは隅丸方形プランを呈し、径 0.56 ~ 0.68m、検出面からの深度は 0.33 ~ 0.41m を測る。柱穴 2 基から径 0.3 m 前後の根石を各 1 点ずつ確認した。柱穴柱間は、桁行が 3.80m 前後で、梁行 2.80m 前後である。SB005 は、SB002 と南側梁行の方向軸を合わせている。柱穴から遺物は出土していない。

SB006(第 27 図)

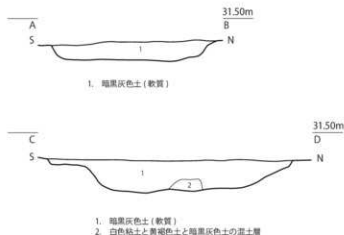
調査区東側で確認された、桁行 2 間 × 梁行 1 間、身舎面積 15.72 m² を測る掘立柱建物である。建物は南北棟で、桁行の主軸方向は、N - 10° - W を指向している。

切り合い関係は、SB003の柱穴が、SB001とSB003の柱穴に切られている。柱穴の平面形状は円形もしくは隅丸方形を呈し、径0.40～0.7 + α m、検出面からの深度は0.21～0.36 mを測る。柱穴柱間は、桁行が2.00 m前後、梁行が3.96 mである。柱穴から遺物は出土していない。

土坑

SK001(第28図)

調査区中央で検出した大型土坑である。切り合い関係は、SB002とSB005の柱穴に切られている。平面形状は長楕円形を呈し、長軸5.92 m、短軸3.84 m、検出面からの最大深度は0.25 mを測る。断面形状は、浅い皿状に窪んでいる。埋土は、暗黒褐色を基調とする軟質土層である。遺構内には、径0.1～0.4 m大の川原石が100個ほど散乱した状態で確認され、これに混じって龍泉窯系青磁碗、土師質土器甕、土製品土錘などが出土している。遺構の時期は、出土遺物から16世紀代と考えられる。



第29図 SK001土層図(1/40)

SK002(第28図)

調査区中央で検出した土坑である。平面形状は楕円形を呈し、長軸1.10 m、短軸0.88 m、検出面からの最大深度は0.34 mを測る。断面形状は、舟底状に窪んでいる。遺構の床面からやや浮いた地点で、土師質土器碗cの完形品1点が逆さまになって伏せた状態で出土した。また国産陶器の裏片なども出土していることから、遺構の時期は16世紀代と考えられる。

溝跡

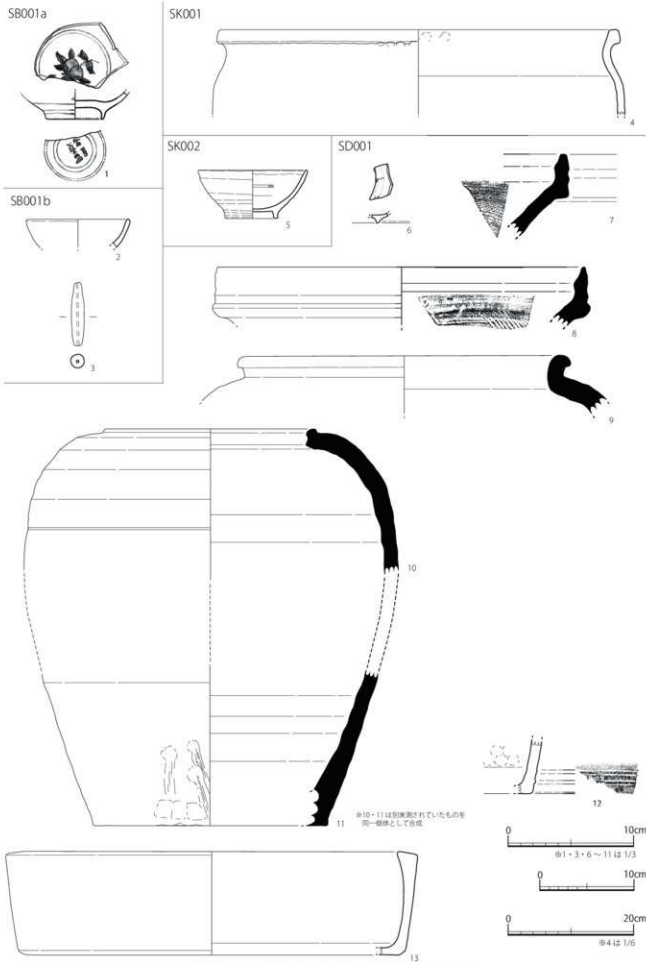
SD001(第29図)

調査区南部で検出した、東西方向に走る溝状遺構で、両端は調査区外に延びている。切り合い関係は、SB005の柱穴を切っている。長さ34 + α m、最大幅約2.70 m、検出面からの最大深度は0.43 mである。ほぼ直線状に走っており、主軸方向はN-75°-Eを指向している。断面形状は、舟底状である。東端底面の標高が30.90 m、西端底面の標高が31.10 mであるが、埋土は暗黒褐色を基調とする軟質土層で、流水などの痕跡は認められなかった。出土遺物には中国産磁器の赤絵皿・青花皿、国産陶器備前産の壺や搦鉢、土師質土器火鉢などが出土しており、16世紀後半頃に廃絶したものと考えられる。

3. 小結

今回検出した掘立柱建物跡7棟の柱穴から出土した遺物は僅少であるため、遺構の時期は不明なものが多い。SB001からは、16世紀代の青磁碗や青花碗が出土していることや、土坑や溝跡からも16世紀代の遺物が出土していることから、他の6棟の建物についてもSB001と同時期、もしくはそれに前後する時期に造営されたものと考えられる。また掘立柱建物の柱穴同士の切り合い関係や、建物の主軸方向などから、それらを分類するとⅠ～Ⅲ期までの3時期に分けられる。

Ⅰ期はSK001を切って造営されたSB002・SB005と、その東側で造営されたSB006・SB007である。SB007については、調査区外に延びており、建物の主軸方向や規模は不明であるが、他の3棟の桁行の主軸方向につ



第30図 第18次調査区出土遺物実測図(1/3・1/4・1/6)

いてはどれもN-10°-Wを指向している。規模については、SB002とSB006は2間×1間、SB005は1間×1間で、身舎面積が20㎡未満であることから、建物の性格は倉庫などが想定される。

Ⅱ期は、Ⅰ期に建てられたSB005の柱穴を切ってSD001が東西方向に掘削されると共に、これに併設してSB001とSB003の東西棟建物が造営されている。SD001の主軸方向とSB001・SB003の桁行の主軸方向は、ほぼ同じである。SD001は、土層の観察から流水の痕跡は確認できなかったが、東西両端の床面の標高差から、西から東に向かって緩やかに傾斜しており、仮に流水していたと考慮すれば、調査区から東側約100m地点にある谷間へ流れ込んでいたものと考えられる。SB001は5間×1間、身舎面積が40.02㎡の建物、SB003は3間×1間以上の東西棟と考えられる建物で、建物の規模がⅠ期と比べて大きくなる。SB001の柱穴やSD001から16世紀後半の遺物が出土していることから、Ⅱ期はこの時期に該当する。

Ⅲ期は、SB003の柱穴を切って建てられたSB004である。桁行5間×梁行1間以上の東西棟建物であると考えられ、桁行5間からSB001と同等の規模の建物が想定される。柱穴から遺物が出土していないため、造営時期は不明であるが、周辺に建物が密集している状況やⅡ期のSB001やSB003の建物の主軸方向が比較的近似していることから、Ⅱ期の建物群廃絶後、継続して建物が建て替えられた可能性が高いと考えられる。

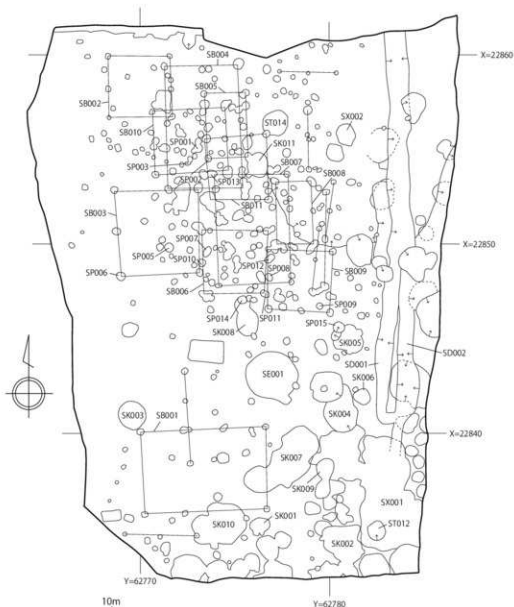
あと特異な遺構としては、SK002があげられる。遺構の規模や、遺物の出土状況、建物配置を避けた場所に遺構が位置していることから、周りの建物造営に伴う地鎮祭祀遺構や土壌幕の可能性が想定される。その中でもSK002の遺構配置が、Ⅰ期に建てられたSB005やSB002の南側桁行建物ラインの東延長上に位置していることや、Ⅱ期に建てられたSB001の東側梁行建物ラインの南延長上に位置しているから、Ⅰ期もしくはⅡ期の建物造営に伴うものではないかと考えられる。

周辺の近世後期の遺構については、本調査地点から東方200m地点に所在する第83次・第112-2次調査地点などから、16世紀後半段階の一辺約60m規模の方形館跡が確認され、遺構の規模や朝鮮王朝産白磁碗・京都系土師器皿などの出土遺物の内容などから、大友氏の家臣などの屋敷地とも考えられている^(注20)。本調査地点では景德鎮窯系青花碗や龍泉窯系青磁碗などの輸入陶磁器が出土し、一般集落で消費されるものとはやや異なっていることから、今回検出した建物跡については方形館跡に関連する遺構であると考えられる。

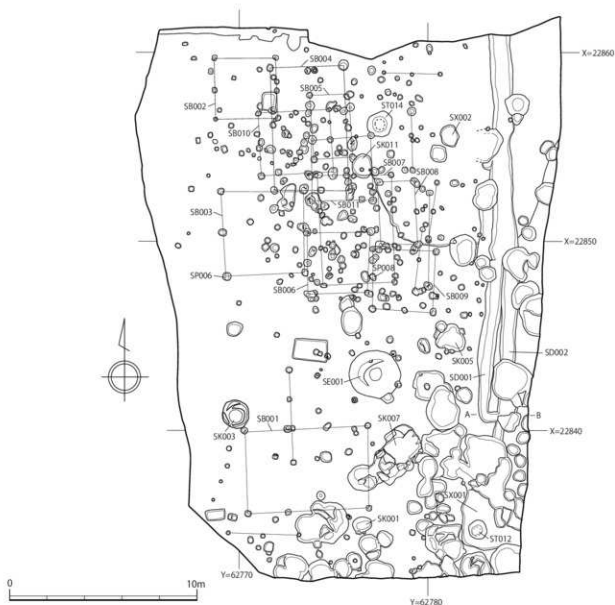
(4) 横尾遺跡第20次調査

1. 調査概要

本調査地点は、大分市大字横尾字無田に所在する。本調査地点の東隣りには、数多くの平安時代前期の粘土採掘坑が検出された第5次調査地点があり、西隣りには第21次・第22次調査地点がある。発掘調査は、平成5年12月13日～平成6年6月17日の期間で実施した。調査面積は616㎡で、遺構検出面の標高は、西端が31.90m、東端が31.60m前後で西から東側にかけて僅かに傾斜している。検出した遺構は、掘立柱建物跡11棟、土坑約50基、溝跡2条、柵状遺構7条、土壌墓2基などである。調査区の南側には壁面や床面に凸凹の起伏が目立つ粘土採掘坑跡と考えられる古代の土坑群が密集し、北側に中世の掘立柱建物跡群が集中している。柵状遺構は7条確認したが、柱穴から遺物が出土していない。柵列群の主軸方向と掘立柱建物群の建物の主軸方向が類似しているため、中世の遺構であると考えられる。



第31図 第20次調査区遺構配置図(1/200)



第 32 図 第 20 次調査区全体遺構図 (1/200)

2. 遺構

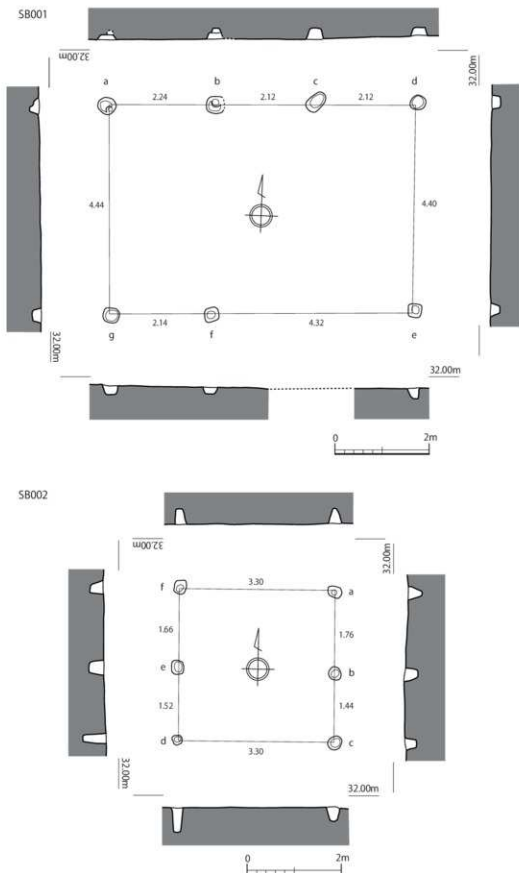
掘立柱建物跡

SB001(第 33 図)

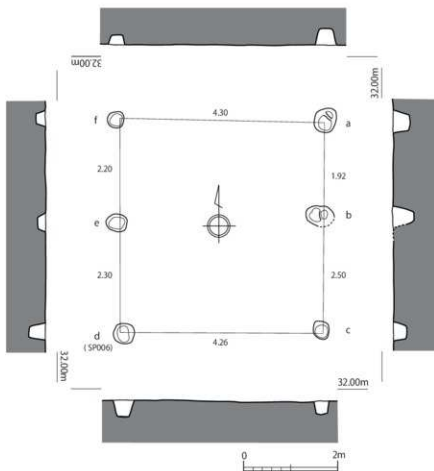
調査区南側で確認された、桁行 3 間 × 梁行 1 間、身舎面積 28.60 m²を測る掘立柱建物跡である。SB001 の柱穴と SK010 との切り合い関係が認められるが、新旧関係については不明である。建物は東西棟で、梁行の主軸方向は、N - 1° - W を指向している。柱穴の平面形状は楕円形もしくは隅丸方形を呈し、径 0.28 ~ 0.46m、検出面からの深度は 0.13 ~ 0.24m を測る。柱穴柱間は、桁行が 2.12 ~ 2.24m、梁行は 4.40m 前後である。柱穴から遺物は出土していない。

SB002(第 33 図)

調査区の北西側で確認された、桁行 1 間 × 梁行 2 間、身舎面積 10.53 m²を測る掘立柱建物跡である。建物は東西棟で、梁行の主軸方向は N - 1° - W で、ほぼ真北を指向している。柱穴の平面形状は楕円形を呈し、径 0.18 ~ 0.30m、検出面からの深度は 0.28 ~ 0.50m を測る。柱穴柱間は、桁行が 3.30m、梁行は 1.44 ~ 1.76m である。柱穴からの出土遺物がなく、築造時期は不明である。



第 33 図 SB001・SB002 遺構実測図 (1/80)



第 34 図 SB003 遺構実測図 (1/80)

SB003(第 34 図)

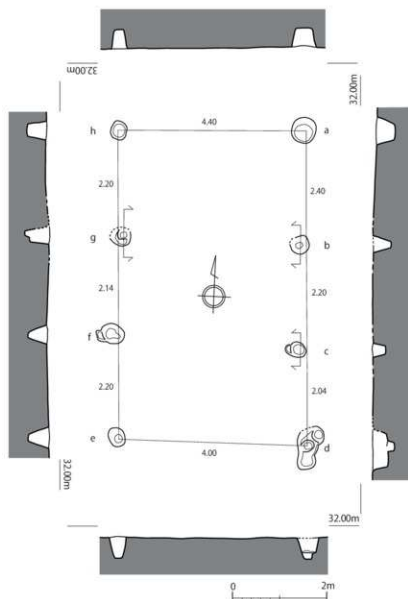
調査区西側で確認された、桁行 2 間 × 梁行 1 間、身舎面積 19.09 m²を測る掘立柱建物跡である。建物は南北棟で、梁行の主軸方向は、N - 2° - W でほぼ真北を指向している。SB006 の柱穴と切り合い関係が認められるが、新旧関係は確認できなかった。柱穴の平面形状は楕円形を呈し、径 0.32 ~ 0.60m、検出面からの深度は 0.21 ~ 0.44m を測る。柱穴柱間は、桁行が 1.92 ~ 2.50m、梁行は 4.30m 前後である。柱穴 SP006 からの土師器坏 B が出土しており、建物の時期は 15 世紀末から 16 世紀前半頃と考えられる。

SB004(第 35 図)

調査区北側で検出した、桁行 3 間 × 梁行 1 間、身舎面積 26.36 m²を測る掘立柱建物跡である。建物は南北棟で、建物の主軸方向は、N - 2° - W を指向している。SB005 の柱穴との切り合い関係が認められるが、新旧関係は不明である。柱穴の平面形状は不整楕円形もしくは楕円形を呈し、径 0.40 ~ 0.88m、検出面からの深度は 0.26 ~ 0.48m を測る。柱穴柱間は、桁行が 2.04 ~ 2.40m、梁行 4.00 ~ 4.40m である。柱穴からの出土遺物がなく、遺構の時期は不明である。

SB005(第 36 図)

調査区北側で確認された、桁行 2 間 × 梁行 1 間、身舎面積 6.66 m²を測る小型の掘立柱建物跡である。建物は南北棟で、桁行の主軸方向は、N - 5° - W を指向している。SB004 の柱穴と SK011 との切り合い関係が認められるが、新旧関係については不明である。柱穴の平面形状は円形もしくは楕円形を呈し、径 0.32 ~ 0.52m、検出面からの深度は 0.13 ~ 0.26m を測る。柱穴柱間は、桁行が 1.56 ~ 1.76m、梁行は 2.00m である。柱穴から遺物は出土していない。



第 35 図 SB004 遺構実測図 (1/80)

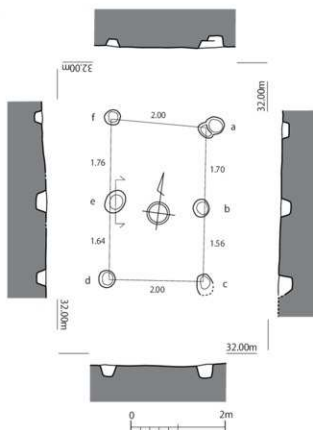
SB006(第 36 図)

調査区中央で確認された、桁行 1 間 × 梁行 2 間、身舎面積 11.15 m² を測る掘立柱建物跡である。建物は東西棟で、梁行の主軸方向は N - 1° - W となり、ほぼ真北を指向している。SB003 の柱穴と切り合い関係が認められるが、新旧関係は不明である。柱穴の平面形状は円形もしくは楕円形を呈し、径 0.28 ~ 0.60m、検出面からの深度は 0.38 ~ 0.67m を測る。柱穴柱間は、桁行が 3.40m 前後、梁行は 1.56 ~ 1.74m である。柱穴 SP011 から柱材と考えられる木片が出土しているが、遺構の時期が判別できる遺物は出土していない。

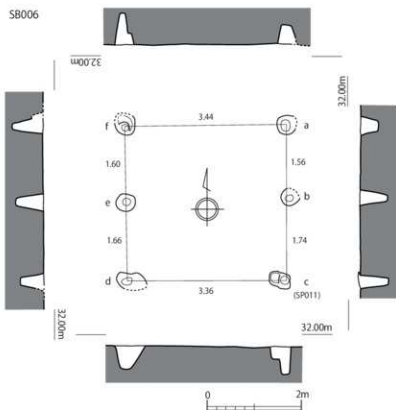
SB007(第 37 図)

調査区中央で確認された、桁行 3 間 × 梁行 2 間、身舎面積 22.81 m² の掘立柱建物跡である。建物は南北棟で、桁行の主軸方向は N - 3° - W を指向している。SK011 と切り合い関係が認められるが、新旧関係は不明である。柱穴の平面形状は楕円形を呈し、径 0.20 ~ 0.52m、検出面からの深度は 0.07 ~ 0.42m を測る。柱穴柱間は、桁行が 1.90 m 前後、梁行は 2.00m 前後を測る。柱穴から遺物は出土していない。

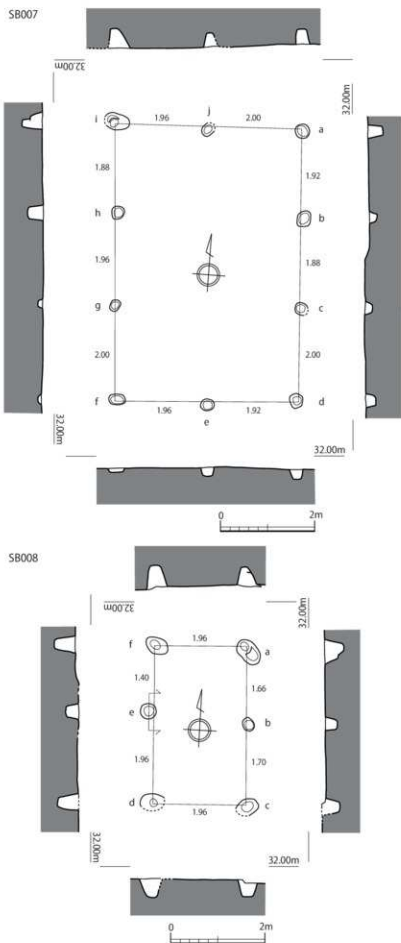
SB005



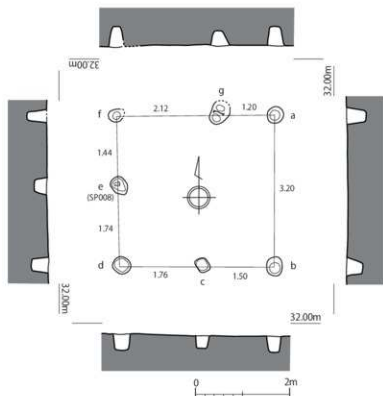
SB006



第 36 図 SB005・SB006 遺構実測図 (1/80)



第 37 図 SB007・SB008 遺構実測図 (1/80)



第 38 図 SB009 遺構実測図 (1/80)

SB008(第 37 図)

調査区中央で確認された、桁行 2 間 × 梁行 1 間、身舎面積が 6.59 m² を測る掘立柱建物跡である。建物は南北棟で、桁行の主軸方向は N - 2° - W を指向している。SB006 と SB009 の柱穴との切り合い関係が認められるが、新旧関係は不明である。柱穴の平面形状は楕円形を呈し、径 0.32 ~ 0.58m、検出面からの深度は 0.26 ~ 0.43m を測る。柱穴柱間は、桁行が 1.40 ~ 1.96 m、梁行は 1.96m である。柱穴から遺物は出土していない。

SB009(第 38 図)

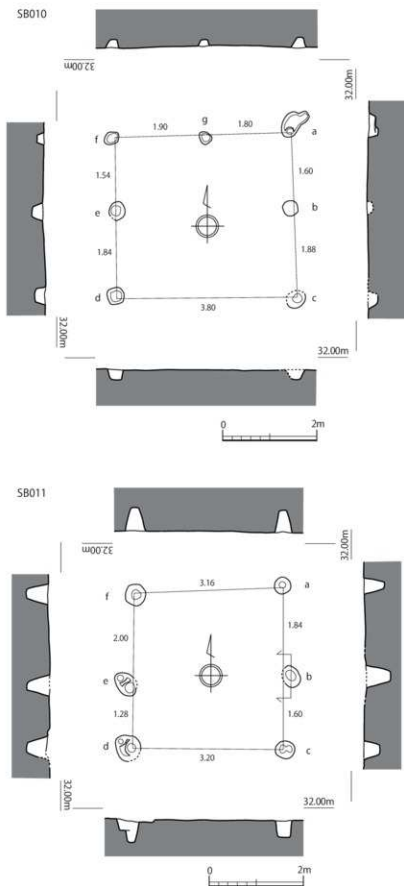
調査区中央で確認された、桁行 2 間 × 梁行 2 間、身舎面積 10.50 m² の掘立柱建物跡である。建物は東西棟で、梁行の主軸方向は N - 3° - E である。SB008 との切り合い関係が認められるが、新旧関係は不明である。柱穴の平面形状は楕円形を呈し、径 0.24 ~ 0.5 + α m、検出面からの深度は 0.3 ~ 0.4m を測る。柱穴 1 基から径 0.1m 大の根石 1 点を確認した。柱穴柱間は、桁行が 1.20 ~ 2.12 m、東側の梁行で 1.44 ~ 1.74m を測る。柱穴 SP008 から中世の龍泉窯系青磁碗が出土している。

SB010(第 39 図)

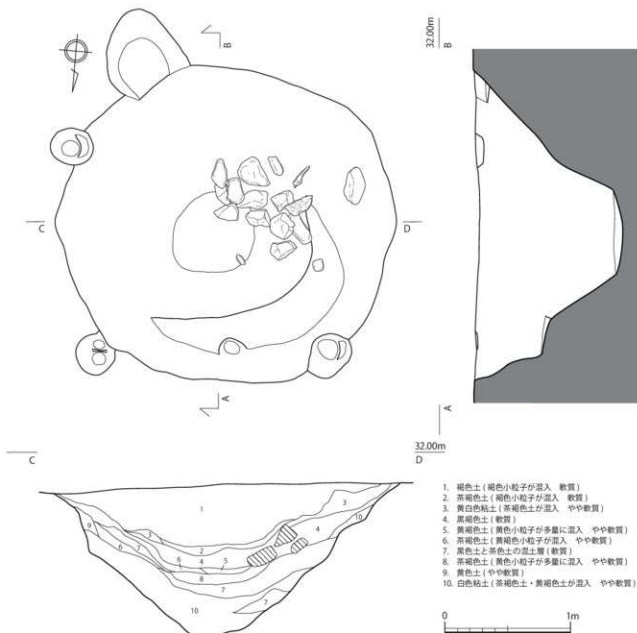
調査区北側で確認された、桁行 2 間 × 梁行 2 間、身舎面積 12.86 m² の掘立柱建物跡である。建物は東西棟で、梁行の主軸方向は、N - 3° - W を指向している。柱穴の平面形状は楕円形もしくは不整楕円形を呈し、規模は径 0.24 ~ 0.68m、検出面からの深度は 0.10 ~ 0.20m を測る。柱穴柱間は、北側の桁行において 1.80 ~ 1.90 m を計り、梁行は 1.54 ~ 1.88m を測る。柱穴内から遺物が出土していないため、築造時期は不明である。

SB011(第 39 図)

調査区中央で確認された、桁行 2 間 × 梁行 1 間、身舎面積 10.68 m² の掘立柱建物跡である。建物は南北棟で、桁行の主軸方向は N - 0° - E で、真北を指向している。SB011 の柱穴との切り合い関係は、SK014 を切っているが、SK011 との新旧関係は不明である。柱穴の平面形状は楕円形もしくは不整楕円形を呈し、直径 0.32 ~ 0.56m 前後、検出面からの深度は 0.36 ~ 0.51m を測る。柱穴柱間は、桁行が 1.28 ~ 2.00 m で、梁行は 3.20m 前後である。柱穴から遺物は出土していない。



第 39 図 SB010・SB011 遺構実測図 (1/80)



第 40 図 SE001 遺構実測図 (1/30)

井戸跡

SE001(第 40 図)

調査区中央で検出した素掘りの井戸跡である。平面形状は円形を呈し、長軸 2.72m、短軸 2.47 m、検出面からの最大深度は 1.15 m を測る。断面形状は、揺鉢状になっている。遺構検出面から深度 0.6m 程度掘り下げた地点で、径 0.1 ～ 0.3m 大の礫石 15 点が散在した状態で検出しており、井戸埋没時に流入されたものと考えられる。また土層の観察から、遺構の埋没は自然堆積によるものである。遺構内から黒色土器 A 類の碗や国産陶器揺鉢、土師器破片などが出土しており、遺構の時期は中世段階であると考えられる。

土坑

SK001(第 41 図)

調査区南側で検出した土坑である。平面形状は不整形円形を呈し、長軸 1.02 m、短軸 0.92 m、検出面からの最大深度は 0.44 m ある。断面形状は、逆台形状になっており、壁面や床面から凸凹の起伏が認められる。周辺

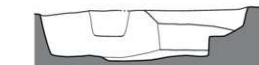
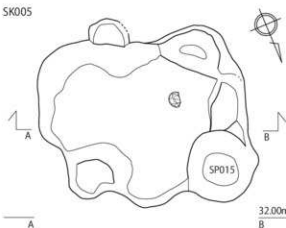
SK001



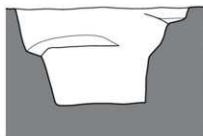
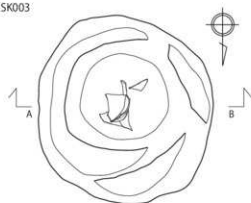
1. 黒褐色土 (軟質)
2. 黄茶色土 (やや硬質)
3. 褐色土と黄褐色土の混土层 (軟質)



SK005



SK003

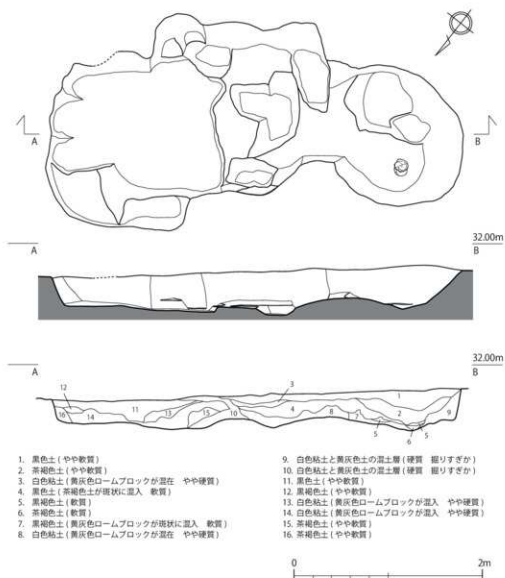


1. 黒色土 (白色粘土ブロック・黄褐色土ブロックが混入 軟質)
2. 黄白色粘土 (黒色土が珪状に混入 粘質)



1. 黒褐色土 (白色粘土ブロックが混入 やや軟質)
2. 黒褐色土 (黄灰色ロームブロックが珪状に混入 やや硬質)
3. 黒色土 (軟質)
4. 黄灰色土 (黒色土がやや混入 やや硬質)
5. 黒色土 (茶褐色土が珪状に混入 軟質)
6. 茶褐色土 (軟質)
7. 白色粘土 (黄灰色ロームブロックが珪状に混入)

第 41 図 SK001・SK003・SK005 遺構実測図 (1/30)



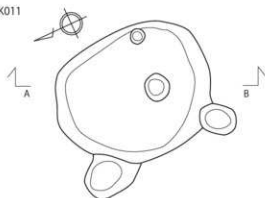
第 42 図 SK007 遺構実測図 (1/40)

でも同じような断面形状の土坑群が密集している状況から、粘土探掘坑と考えられる。埋土は、黒褐色軟質土を基調としているが、床面や東壁面に黄褐色土や黄茶色土がブロック状に堆積した状態で認められる。遺構内からは土師器片 e が出土しており、9 世紀中頃から 10 世紀代の時期が考えられる。

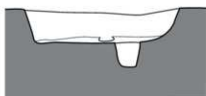
SK003(第 41 図)

調査区南西側で検出した土坑である。平面形状は円形を呈し、長軸 1.51m、短軸 1.38 m、検出面からの最大深度は 0.76 m を測る。遺構検出面から深度 0.1 ~ 0.4m の地点には 2 ~ 3 段のテラスがあり、中央部に関しては平面方形の径 0.8m 大の掘り込みが認められる。床面から 0.4m 程度掘り下げた地点で、瓦質土器火鉢が破碎された状態で出土している。土層の観察から、第 1 層がロームブロックを含む黒色土主体層で、第 2 層の黒色土が混入する黄白色粘土層に分層できる。第 1 層と第 2 層との境が不自然であり、一部土層ラインが垂直気味に立ち上がっている部分も認められることや、遺構の形態・規模・断面形状が早稲を確認した ST012 や ST014 と類似していることなどから、遺構内に早稲が据えられていた可能性が考えられる。遺構内からは、遺構内からは、他に土製品土鍾 2 点が出土している。遺構の時期は、瓦質土器火鉢から中世段階に位置づけられる。

SK011

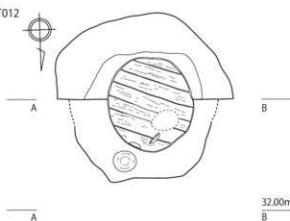


A B 32.00m

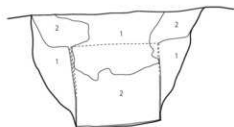


0 1m

ST012



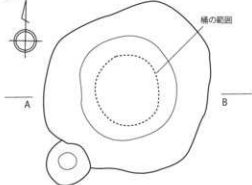
32.00m
B



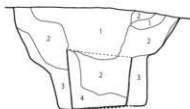
1. 黒褐色土 (やや軟質)
2. 灰白色粘土 (粘性大)

0 1m

ST014



A B 32.00m



1. 黒褐色土 (白色粘土・黒褐色ロームブロックが少量混入 やや軟質)
2. 灰白色粘土 (黒褐色土が斑状に混入 やや粘質)
3. 灰白色粘土 (黒褐色土が混入 やや粘質)
4. 黒褐色土 (黒褐色土が斑状に混入 やや軟質)

0 1m

SX002



32.00m
B

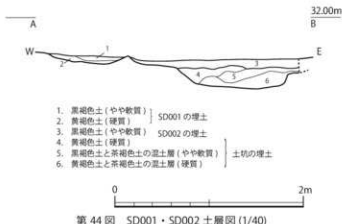


0 1m

第43図 SK011・ST012・ST014・SX002 遺構実測図 (1/20・1/30)

SK005(第 41 図)

調査区の中央で検出した土坑で、SP015に切られている。平面形状は不整楕円形を呈し、長軸 1.88 m、短軸 1.23 m、検出面からの最大深度は 0.52 m を測る。床面や壁面の凸凹の起伏が目立ち、部分的に床面を掘り込んでいる箇所が認められることから、粘土採掘坑であると考えられる。土層の観察により、先に東側の方から径約 1.2m、深度約 0.5m 規模の土坑を掘って粘土採掘を行い、採掘終了後に人為的に埋め戻しを行っている。その後粘土採掘目的で掘削を行ったかは不明であるが、西側に径約 0.6m、深度約 0.3m 規模の小規模の土坑を掘っている。遺構内の東側からは土師器環 a4 が出土していることから、9 世紀中頃から後半の時期に粘土採掘が行われたと考えられる。



SK007(第 42 図)

調査区の南側で検出した大型土坑で、SK001 の北側に位置している。平面形状は不整楕円形を呈し、長軸 4.35 m、短軸 1.06 m、検出面からの最大深度は 0.50 m を測る。床面や壁面の凸凹の起伏が目立つ状況から、粘土採掘坑であると考えられる。遺構内の西側の床面直上で、土師器甕 a が直立からやや斜めに傾いた状態で出土している。土層の観察により、先に西側から径約 2.5m 規模の土坑を掘って粘土採掘を行い、採掘終了後に人為的に埋め戻しを行い、その後東側に同規模の土坑を掘って粘土採掘を行っているようである。最終段階で掘削した東側部分の土坑床面から出土した土師器甕 a は、8 世紀後半から 9 世紀初頭の遺物である。

SK011(第 43 図)

調査区北側で検出した土坑で、SB005 と SB007 の柱穴との切り合い関係が認められるが、新旧関係は不明である。平面形状は楕円形を呈し、長軸 1.28 m、短軸 1.05 m、検出面からの最大深度は 0.42 m を測る。床面に径 0.2m、深度 0.15m 規模のビットが 2 箇所認められる。埋土中から同安窯系と考えられる青磁碗が出土しており、中世段階のものであると考えられる。

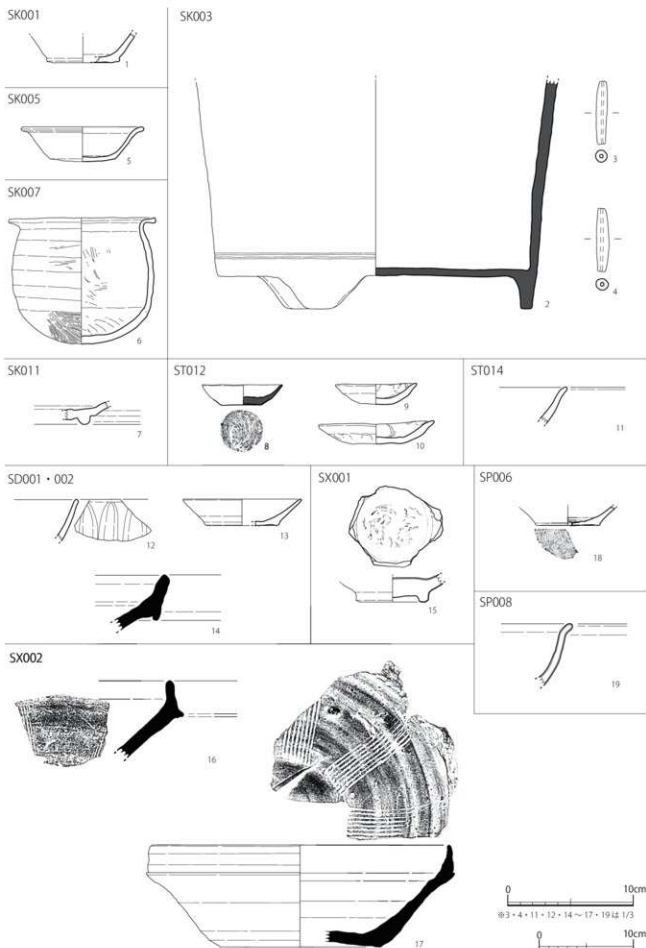
土墳墓

ST012(第 43 図)

調査区南東隅で検出した墓で、SX001 を切っている。平面形状は不整楕円形を呈し、長軸 0.93 m、短軸 0.87 m、検出面からの最大深度は 0.60 m を測る。断面形状は、逆台形状になっている。床面から円形の木製早桶の底板と側板の一部を確認した。桶の底板径は 0.48 m である。土層の観察により、早桶の側面には黒褐色軟質土を入れて桶を固定させ、桶蓋板を埋める際には灰白色粘土を用いており、埋納の各段階によって異なる土を使用している。また後世には桶蓋板の腐食や土圧に伴い、桶蓋板が壊れ、桶内に崩落土が堆積している。棺内から人骨は確認できなかった。検出面から 0.2m 地点で、土師器小皿 C が内面を上に向けた状態で出土しており、おそらく灰白色粘質土を用いて桶蓋板を埋める直前に置かれたものと考えられる。また桶内の底板の直上から土師器皿 C と瓦質土器小皿が 1 点ずつ出土し、横倒れになった状態で出土している。土師器皿 C の年代から 16 世紀後半から末頃にかけの埋葬時期が想定される。

ST014(第 43 図)

調査区北側で検出した墓で、SB001 の柱穴に切られている。平面形状は楕円形を呈し、長軸 1.40 m、短軸 1.28 m、



第45図 第20次調査区出土遺物実測図 (1/3・1/4)

検出面からの最大深度は 0.80 m を測る。断面形状は、逆台形状になっている。検出面から 0.3m 掘り下げた段階で木製早桶の側板が円形状に残存しているのを確認し、床面からは桶の底板も出土している。早桶の法量は、復元口径 0.52m、器高 0.48m、底径 0.44m である。土層の観察により、後世には早桶の天蓋板の腐食や土圧に伴い、天蓋板が壊れ、桶内に崩落土が堆積しているのを確認した。桶内から人骨は確認できなかった。埋土中から同安窯系と考えられる 14 世紀代の青磁碗が出土している。

溝跡

SD001・SD002(第 44 図)

調査区の東部で確認した、南北方向に走る溝状遺構である。調査区の北側では 1 条の溝であるが、中央部になると SD001 と SD002 の 2 条の溝に分岐している。南側になるとまた合流するが、SX001 に大きく切られているため、詳細は不明である。SD001 と SD002 の切り合い関係は、確認できなかった。SD001 は最大幅 0.91 m、検出面からの最大深度は 0.15m で、断面形状が浅い皿状に窪む溝である。それに対し、SD002 は、最大幅 2.12 m、検出面からの最大深度は 0.39m、西側に 1 段のテラスを持つ規模がやや大きな溝である。両溝ともほぼ直線状に走っており、両溝が分岐する前の北側部分での主軸方向は、N-2°-W である。土層の観察により、SD001 と SD002 の下層から、砂質土層が認められないことや、北端床面と南側床面の標高差がないことなど、流水の痕跡は認められなかった。溝内から土師器環 A や国産陶器備前産の播鉢などが出土しており、16 世紀代の時期が考えられる。

性格不明遺構

SX002(第 43 図)

調査区北側で確認した土坑である。平面形状は楕円形を呈し、長軸 1.21 m、短軸 0.92 m、検出面からの最大深度は 0.28 m を測る。遺構を検出した段階で、径 0.1 ～ 0.3m の人頭大の礫石群が遺構の上面や周辺に散在しており、それに混じって石塔の基礎の台座が出土している。遺構内からは礫石群は検出していない。遺構内から備前産陶器の播鉢が 2 点出土しており、遺構の時期は 15 世紀中から 16 世紀代と考えられる。

3. 小結

今回検出した主な遺構は、古代の粘土探掘坑約 50 基、中世の掘立柱建物跡 11 棟、溝跡 2 条、柵状遺構 7 条、早桶を用いた土壇墓 2 基などである。

調査区の南側には壁面や床面に凸凹の起伏が目立つ粘土探掘坑跡と考えられる土坑群が密集している。遺構の時期が判断できる遺物が出土している粘土探掘坑は少なく、SK001 から 9 世紀中頃から 10 世紀代の土師器環 e、SK007 から 8 世紀後半から 9 世紀初頭頃の土師器環 a が出土している。出土遺物からやや時期差が認められ、この地では継続して粘土探掘がおこなわれたものと考えられる。

掘立柱建物跡は 11 棟を検出したが、柱穴から遺物がほとんど出土していないため、各建物の明確な築造時期の判断が困難な状況である。時期が分かる出土遺物は、SB003 の柱穴から土師器環 B と SB009 の柱穴から龍泉窯系青磁碗が出土していることから、およそ 15 ～ 16 世紀代を中心とする時期が考えられる。掘立柱建物跡は、SB001 以外は調査区の北側に 10 棟が密集していて、建物の桁行および梁行の南北主軸方向は、どれもほぼ真北方向を向いていることから、3 ～ 4 時期に分かれて継続的に建て替えられたものと考えられる。しかし柱穴同士に切り合い関係がいくつか認められるが、新旧関係が判断できなかったものが多いため、建物の築造順に関しても不明である。建物群と同時期の遺構として注目されるのは、建物群の東側で検出した SD001 や SD002 である。建物と溝の南北主軸方向がほぼ一致していること、溝の下層から砂質土層が検出されず流水の痕跡が確認できなかったことなどから、流路というよりは建物群に伴う区画溝の可能性が考えられる。

(5) 横尾遺跡第 21 次調査

1. 調査概要

本調査地点は、大分市大字横尾字大寿寺に所在する。東隣りには 9 ～ 10 世紀代の粘土採掘坑群と 15 ～ 16 世紀代と考えられる掘立柱建物群を検出した第 20 次調査地点、西隣りには 10 世紀代の粘土採掘坑群を検出した第 22 次調査地点があり、両調査地点に挟まれている。平成 6 年 1 月 18 日～同年 5 月 20 日の期間で調査を実施した。調査面積は 450 m²で、遺構検出面の標高は、32.00 m前後の平坦地である。主な検出遺構は、中世から近世にかけての掘立柱建物跡 8 棟、土坑 10 基と近世の溝跡 3 条である。

土坑については、調査区西側に集中して分布している。SK003 の土坑から肥前産染付碗や染付小环が出土しており、近世の土坑であると考えられるが、他の土坑からは遺物が出土していないため、遺構の時期は不明である。SK003 以外の土坑群の特徴であるが、遺構の形態については平面形状が不整楕円形を呈するものが多く、平面規模については径 1.2 ～ 2.8m と大小が認められる。遺構検出面からの深度については 0.5 ～ 0.6 m の土坑が多く、白色粘土層まで掘り込まれている。また壁面や床面に凹凸の起伏が目立つものが多い。このことから土坑の多くが、粘土採掘坑であると考えられる。

2. 遺構

掘立柱建物跡

SB001(第 47 図)

調査区西側で確認された、桁行 2 間 × 梁行 1 間、身舎面積 10.12 m²を測る掘立柱建物跡である。建物は東西棟で、梁行の主軸方向は N - 10° - E を指向している。柱穴の平面形状は楕円形もしくは隅丸方形を呈し、径 0.24 ～ 0.56m、検出面からの深度は 0.08 ～ 0.40m を測る。柱穴柱間は、桁行が 1.98 ～ 2.50m、梁行は 2.32m である。柱穴からの出土遺物はなく、遺構の時期は不明である。

SB002(第 47 図)

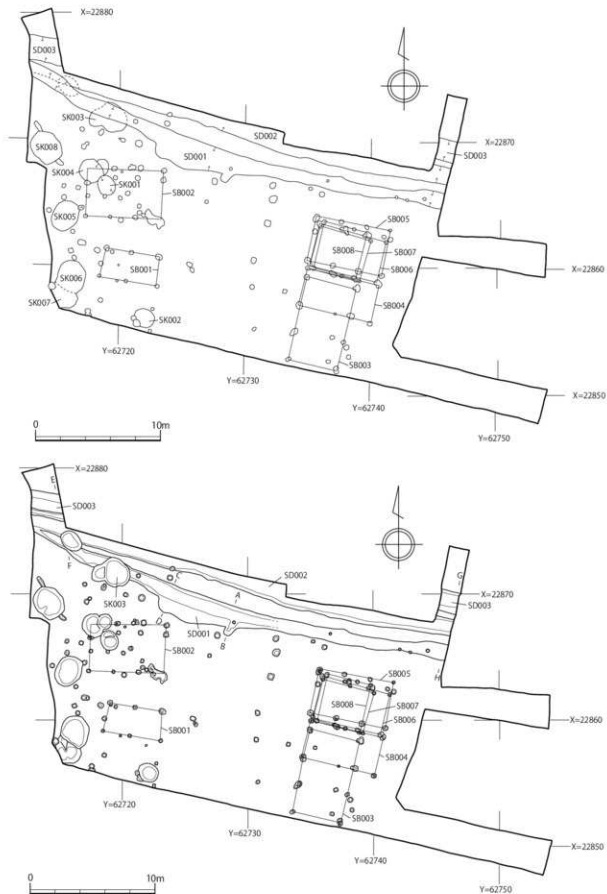
調査区の西側で確認された、桁行 3 間 × 梁行 1 間の掘立柱建物跡である。SB002 の柱穴 2 基と土坑 2 基との切り合い関係が認められるが、新旧関係は確認できなかった。身舎面積は推定で 23.31 m²を測り、建物は東西棟である。建物の桁行の主軸方向は N - 2° - E で、ほぼ真北方向を指向している。柱穴の平面形状は隅丸方形を呈し、径 0.20 ～ 0.44m、検出面からの深度は 0.10 ～ 0.47m を測る。柱穴柱間は、桁行が 1.78 ～ 2.16m、梁行は推定で 3.86m である。柱穴から遺物は出土していない。

SB003(第 48 図)

調査区東側で確認された、桁行 3 間 × 梁行 1 間、身舎面積 26.92 m²を測り、本調査地点では最大規模の掘立柱建物跡である。建物は南北棟で、桁行の主軸方向は N - 13° - E を指向している。SB004 の柱穴との切り合い関係が認められるが、新旧関係は不明である。柱穴の平面形状は楕円形もしくは不整楕円形を呈し、径 0.30 ～ 0.76m、検出面からの深度は 0.20 ～ 0.50m を測る。柱穴柱間は、桁行が 2.16 ～ 2.36m で、梁行は 3.92 ～ 4.08m である。柱穴から遺物は出土していない。

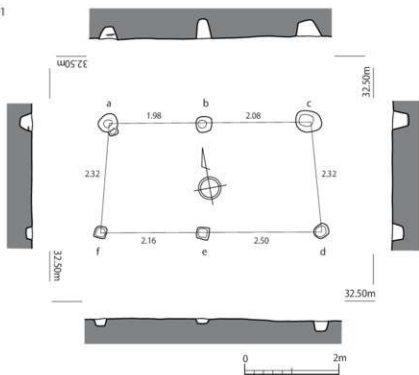
SB004(第 49 図)

調査区東側で検出した、桁行 2 間 × 梁行 1 間、身舎面積 18.03 m²を測る掘立柱建物跡である。建物は東西棟で、梁行の主軸方向は N - 13° - E を指向している。SB004 の柱穴との切り合い関係が認められるが、新旧関係は不明である。柱穴の平面形状は楕円形を呈し、径 0.16 ～ 0.52m、検出面からの深度は 0.07 ～ 0.41m を測る。柱穴柱間は、桁行が 2.84 ～ 3.16m、梁行は 2.84 ～ 3.16m である。柱穴からの出土遺物がなく、建物の築造時

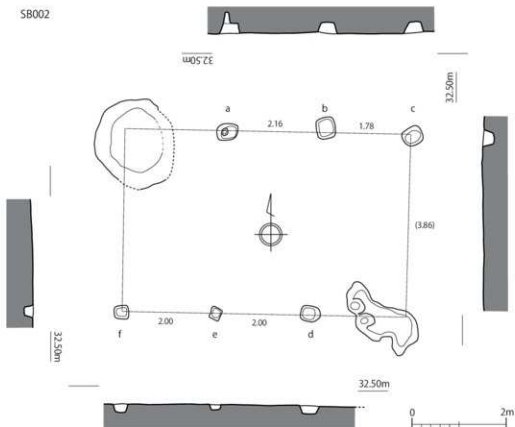


第 46 図 第 21 次調査区遺構配置図・全体遺構図 (1/300)

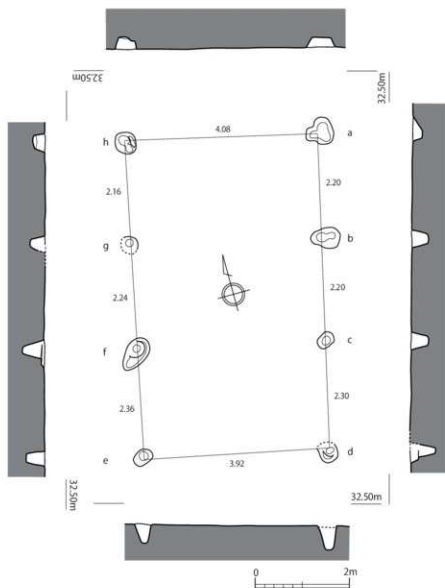
SB001



SB002



第 47 図 SB001・SB002 遺構実測図 (1/80)



第48図 SB003 遺構実測図 (1/80)

期は不明である。

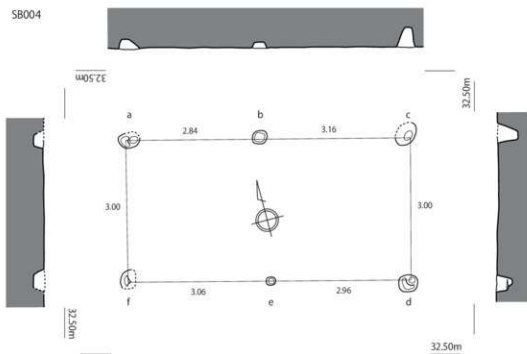
SB005(第 49 図)

調査区東側で確認された、桁行3間×梁行1間、身舎面積22.09㎡を測る掘立柱建物跡である。調査区西側で検出したSB002と規模が類似している。建物は東西棟で、梁行の主軸方向は、 $N-10^{\circ}-E$ を指向している。SB006の柱穴との切り合い関係が認められるが、新旧関係については不明である。柱穴の平面形状は楕円形もしくは隅丸方形を呈し、径0.24～0.64m、検出面からの深度は0.08～0.43mを測る。柱穴柱間は、桁行が1.88～2.12m、梁行は3.60m前後である。柱穴からの出土遺物がなく、建物の築造時期は不明である。

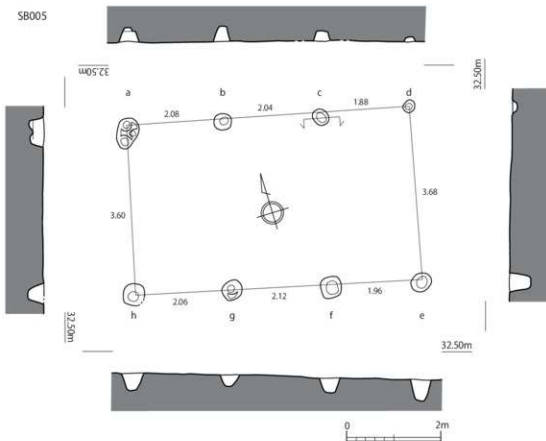
SB006(第 50 図)

調査区東側で確認された、桁行3間×梁行1間、身舎面積18.85㎡を測る掘立柱建物跡である。建物は東西棟で、梁行の主軸方向は、 $N-13^{\circ}-E$ を指向している。SB005・SB007・SB008の柱穴との切り合い関係が認められるが、新旧関係は確認できなかった。柱穴の平面形状は楕円形を呈し、径0.24～0.60m、検出面からの深度は0.14～0.46mを測る。柱穴柱間は、桁行が1.74～1.94m、梁行は3.40m前後である。柱穴からの出土遺物がなく、遺構の時期は不明である。

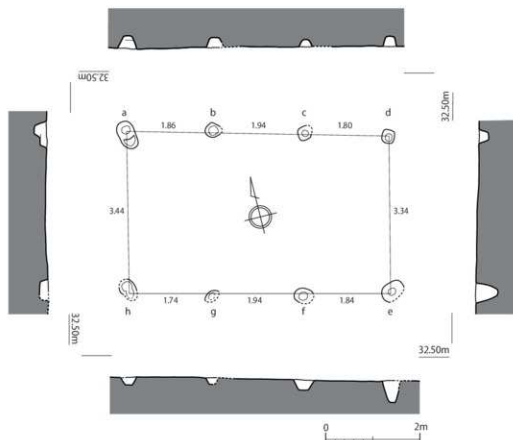
SB004



SB005



第 49 図 SB004・SB005 遺構実測図 (1/80)



第 50 図 SB006 遺構実測図 (1/80)

SB007(第 51 図)

調査区東側で確認された、桁行 2 間 × 梁行 1 間、身舎面積 14.29 m² の掘立柱建物跡である。建物は東西棟で、梁行の主軸方向は N - 14° - E を指向している。SB006 と SB008 の柱穴との切り合い関係が認められるが、新旧関係は不明である。柱穴の平面形状は楕円形もしくは隅丸方形を呈し、規模は径 0.24 ~ 0.38m、検出面からの深度は 0.14 ~ 0.33m を測る。柱穴柱間は、桁行が 1.96 ~ 2.24 m、梁行は 3.40m 前後を測る。柱穴から遺物は出土していない。

SB008(第 51 図)

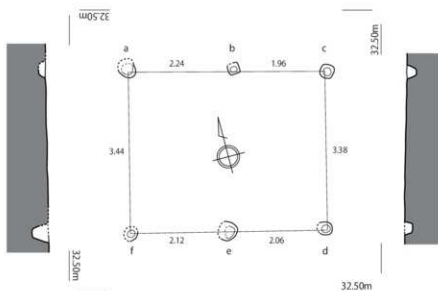
調査区東側で確認された、桁行 1 間 × 梁行 2 間、身舎面積 13.86 m² の掘立柱建物跡である。建物は南北棟で、桁行の主軸方向は、N - 13° - E を指向している。SB006・SB007 の柱穴との切り合い関係が認められるが、新旧関係は不明である。柱穴の平面形状は楕円形を呈し、径 0.28 ~ 0.46m、検出面からの深度は 0.11 ~ 0.26m を測る。柱穴柱間は、桁行が 1.60 ~ 2.00 m、梁行は 3.80m 前後を測る。柱穴から遺物は出土していない。

溝跡

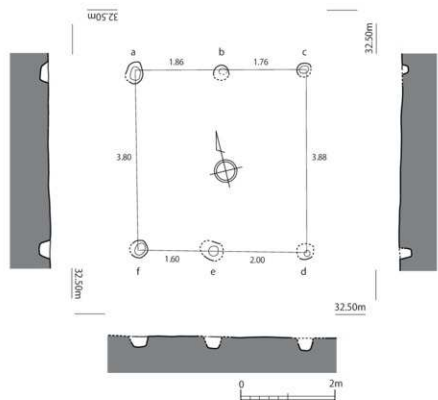
SD001(第 52 図)

調査区北側で、SD002 と SD003 と並行する形で、SD002 の南側を東西方向に走る溝状遺構である。東西両端ともに調査区外に延び、東側部分については未掘である。調査区の西側で SD002 との切り合い関係が認められ、SD002 を切っている。溝の規模は、長さ 36 + a m、最大幅は 2.64m、検出面からの最大深度は 0.22m を測る。断面形状は、浅い皿状に窪んでいる。溝は直線状に走り、主軸方向は N - 68° - W を指向している。土層の観察により、暗茶褐色土を主体とする単一層で、埋土中から流水などの痕跡は認められなかった。溝内から国産陶器の土瓶蓋や備前産播鉢などが出土しており、18 世紀後半から 19 世紀前半の時期が考えられる。

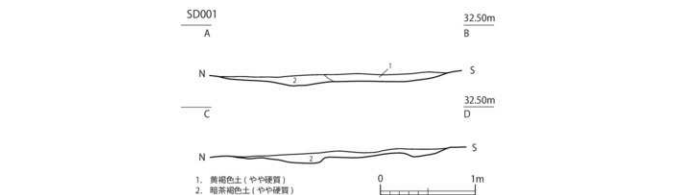
SB007



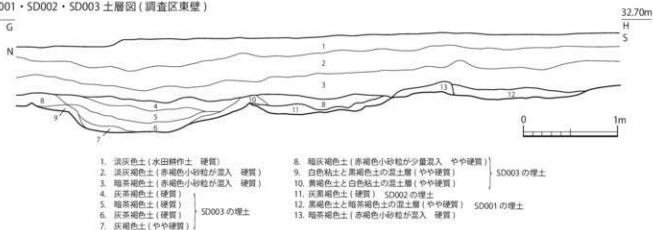
SB008



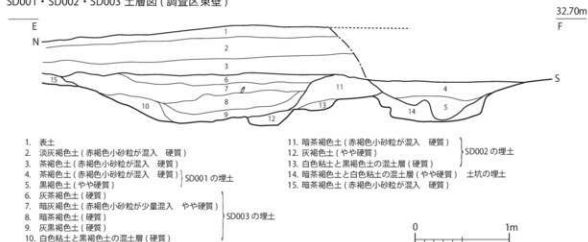
第 51 図 SB007・SB008 遺構実測図 (1/80)



SD001・SD002・SD003 土層図 (調査区東壁)



SD001・SD002・SD003 土層図 (調査区東壁)

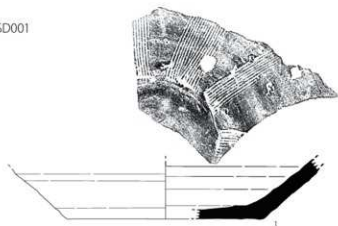


第 52 図 SD001・SD001～SD003(調査区東壁) 土層図 (1/40)

SD002(第 52 図)

調査区北側で、SD001 と SD003 と並行する形で、SD001 と SD003 の間を東西方向に走る溝状遺構である。東西両端ともに調査区外に延びている。調査区の西側で SD001・SD003 との切り合い関係が認められ、SD002 が両者に切られている。溝の規模は、長さ $36 \pm \alpha$ m、最大幅は 1.38m、検出面からの最大深度は 0.48m を測る。断面形状は、東端では浅い皿状に窪んでいるが、西端では段塀りのテラスが認められ、東端より西端の床面のほうが 0.15m 程度低くなっている。溝は直線状に走り、主軸方向は $N - 75^\circ - W$ を指向している。土層は調査区の東西両端 2 地点で観察しているが、埋土中から流水の痕跡は確認できなかった。溝内から肥前産の染付碗や染付小杯・仏飯器、国産陶器の片口鉢などが出土しており、17 世紀末から 18 世紀後半の時期に位置づけられる。

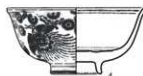
SD001



SD002



SD003



0 10cm

第53図 第21次調査区出土遺物実測図(1/3)

SD003(第52図)

調査区北側で、SD001とSD002と並行する形で、SD002の北側を東西方向に走る溝状遺構で、東西両端ともに調査区外に延びている。調査区の西側でSD002との切り合い関係が認められ、SD003が切られている。溝の規模は、長さ36+αm、幅は3.00m前後、検出面からの最大深度は0.44mを測る。断面形状は、緩やかな逆台形状に窪んでいる。床面の標高値は、東端の方が西端の床面より0.1m程度低くなっている。溝は直線状に走り、主軸方向はN-73°-Wを指向している。土層は調査区の東西両端2地点で観察していて、堆積状況から複数回の掘り返しが認められるが、流水の痕跡については確認できなかった。溝内から肥前産の型紙刷りの染付碗や染付小杯、瓦質土器の捏ね鉢などが出土しており、19世紀以降の時期が考えられる。

3. 小結

今回検出した主な遺構は、掘立柱建物跡8棟、土坑10基と溝跡3条である。このうち遺構の時期が判別できるのは、溝跡3条である。

調査区の北側に東西方向に走る3条の溝が並んでいる。各溝から出土した遺物内容や土層の観察により、18世紀後半に廃絶されたSD002が最初に掘られ、その次に18世紀後半から19世紀前半に廃絶されたSD001が掘られ、最後に近代に入って廃絶されたSD003が掘削されている。各溝の東西両端の床面の高低差があまりないことや、土層の観察により各溝の最下層から、流水の痕跡として砂質土や粘土質土が混入した層を確認できなかったことから、水路として利用されたというよりは、区画を目的とした溝として掘削されたものと考えられ、継続的に使用されたものと想定される。

掘立柱建物跡については、調査区東側での建物の検出状況から数期にわたって、継続的に建て替えられたことが推測できる。建物の規模については、2間×1間で身舎面積10.1～14.3㎡の建物が3棟、3間×1間で身舎面積18.03～26.92㎡の建物が5棟である。建物の築造時期については、今回柱穴から年代を示唆するような遺物が出土していないため、不明である。ただし、調査区の北側で確認された近世の溝跡3条の主軸方向と建物群の桁行や梁行の東西主軸方向がほぼ同じであるため、近世に造営された建物であると考えられる。規模が小さい建物が多いことから、主に倉庫などの建物が数期にわたって建て替えられたと考えられる。

(6) 横尾遺跡第 22 次調査

1. 調査概要

横尾遺跡第 22 次調査地点は、大分市大字横尾字大寿寺に所在し、東隣りには第 21 次調査地点がある。調査面積は 300 m²で、遺構検出面の標高は、調査区の西側が 32.50 m 前後、東側が 32.30 m 前後となり、西から東側にかけて僅かに傾斜し、東端になると大きく落ち込んでいる。発掘調査は、平成 6 年 1 月 18 日～同年 5 月 18 日の期間で実施した。今回の調査で確認した遺構は、10 世紀代を中心とした土坑 20 基、溝跡 1 条、ビット少数である。遺構検出面は黄色粘質土層であるが、遺構内を 0.1～0.2m 程度掘り下げると、遺構の壁面に白色粘土層が確認できる。

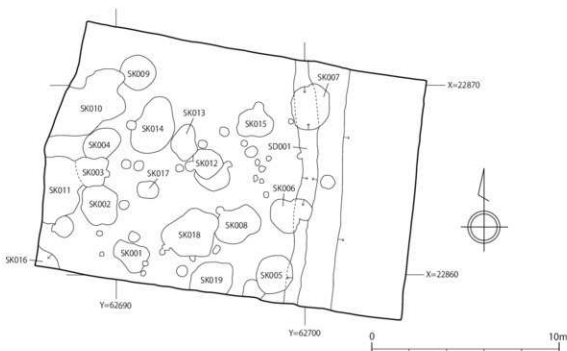
SD001 は調査区の東側で検出した南北方向に走る溝跡で、最大幅は 0.88m、検出面からの最大深は 0.12 m を測る。遺構内からは黒色土器 A 類の椀 a や土師器破片などが出土しており、遺構の時期は 10 世紀中頃と考えられる。

2. 遺構

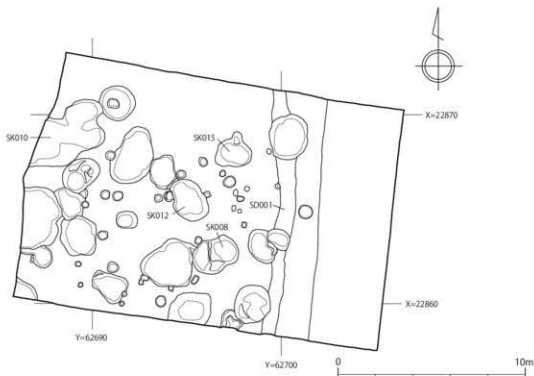
土坑

SK008(第 56 図)

調査区の中央で確認された土坑で、SK018 に切られている。平面形状は不整楕円形を呈し、長軸 2.48m、短軸 1.76m、検出面からの最大深度は 0.56m を測る。断面形状は、床面中央の南北方向のテラスを境として、東西をさらに大きく掘り込んでいる。土層の観察から掘り返しの痕跡が認められ、先に東側部分を掘削して粘土採掘を行い、採掘終了後に埋戻しを行っている。その後、西側部分を掘削し、粘土採掘を行っている。また第 5 層には多量の焼土粒が混入していた。土器などの遺構の時期が判断できる遺物は出土していないが、姫島産黒曜石製のサイドスクレーパーが出土している。



第 54 図 第 22 次調査区遺構配置図 (1/200)



第 55 図 第 22 次調査区全体遺構図 (1/200)

SK010(第 56 図)

調査区西側で確認された粘土採掘を行った大型土坑で、SK009 を切っている。一部調査区外にかかっているが、平面形状は不整楕円形を呈し、長軸 $3.8 + \alpha$ m、短軸 2.48m、検出面からの最大深度は 0.62m である。断面形状は、床面に多少の凹凸の起伏が認められる。土層の観察から、上層がやや軟質の茶褐色土層で、下層は黒褐色土や黄褐色土がブロック状に堆積している。下層については、粘土採掘終了後に人為的に埋め戻されたようである。遺構内から 10 世紀中頃の土師器碗 c が出土している。

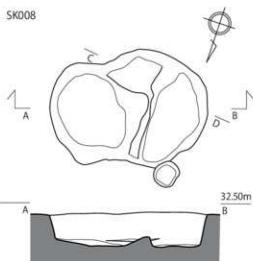
SK012(第 56 図)

調査区中央部で確認された土坑で、SK013 に切られている。平面形状は不整楕円形を呈し、長軸 2.44m、短軸 1.76m、検出面からの最大深度は 0.52m を測る。床面や壁面には凸凹の起伏が認められる。土層の観察から、SK008 と同様に下層には黄褐色土ブロックを多く含む埋土層が認められることから、採掘終了後に人為的に埋め戻されたと考えられる。遺構内から須恵器甕破片、土製の紡錘車などが出土しているが、遺構の時期が判断できる遺物は出土していない。

SK015(第 56 図)

調査区中央部で、SK012 の北東側に位置している土坑である。形態に関しては、平面形状は不整楕円形を呈し、長軸 1.84m、短軸 1.80m、検出面からの最大深度は 0.59m である。断面形状は緩やかな逆台形状になっている。遺構内から 10 世紀中頃と考えられる土師器碗が出土している。

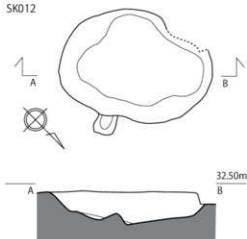
SK008



1. 黒色土 (軟質)
2. 黄褐色土と白色粘土の混土層 (やや硬質)
3. 黒色土 (黄褐色土ブロック混入 やや軟質)
4. 黄褐色土と白色粘土の混土層 (やや硬質)
5. 黒色土 (粘土粒が多量混入 軟質)
6. 黄褐色土 (やや硬質)
7. 黒褐色土 (黄褐色土・白色粘土が混入 やや軟質)
8. 黄褐色土と白色粘土の混土層 (やや硬質)



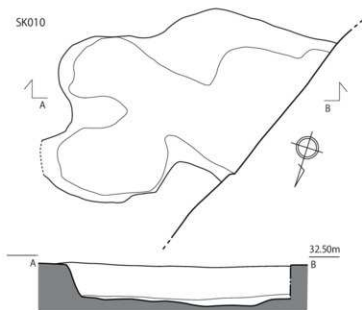
SK012



1. 黒色土 (軟質)
2. 灰黄色土 (軟質)
3. 黄褐色土 (黄褐色土・白色粘土が混入 やや軟質)
4. 黒色土 (軟質)
5. 黒色土 (黄褐色土ブロック混入 やや軟質)



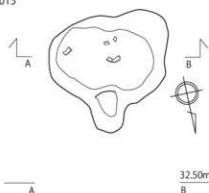
SK010



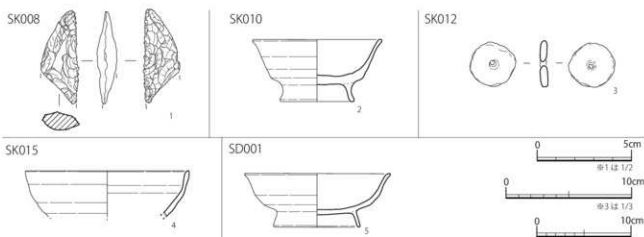
1. 茶褐色土 (明茶褐色の小粒子混入 やや軟質)
2. 黒色土 (黄褐色土ブロック混入 やや軟質)
3. 黄褐色土 (黄褐色土・白色粘土が混入 やや軟質)
4. 黄褐色土ブロック (やや硬質)
5. 黄褐色土ブロックと白色粘土の混土層 (やや硬質)



SK015



第 56 図 SK008・SK010・SK012・SK015 遺構実測図 (1/40・1/60)



第 57 図 第 22 次調査区出土遺物実測図 (1/2・1/3・1/4)

3. 小結

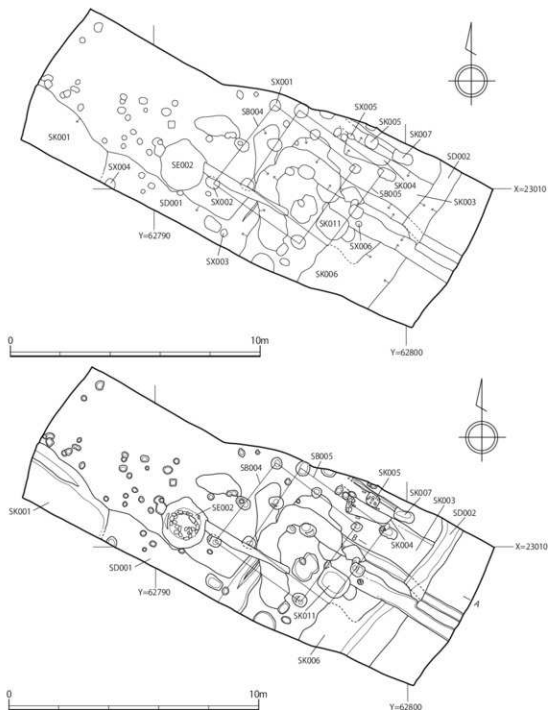
今回の調査では、20 基の土坑を確認し、調査区全体に分布している。これらの土坑群の特徴であるが、まず平面形状については不整楕円形を呈し、平面径は 2.0 ～ 4.0m を測るものが多い。検出面からの深度については 0.5 ～ 0.6m を測るものも多く、断面形状については床面や壁面に凹凸の起伏が認められるものが多い。遺構内からの遺物出土量については僅少であり、遺構時期を判断できる遺物が出土したのは SK010 と SK015 で、ともに 10 世紀中頃と考えられる土師器碗が出土している。これらの特徴から、ほとんどの土坑が粘土採掘坑であると考えられる。さらに土層の観察によると、遺構の下層の方には、黄褐色の地山ブロックが多量に混入し、上層にはこの地山ブロックを含まないもの土坑が多く認められることから、下層について人為的に埋め戻しを行い、上層については自然堆積により埋没していったと考えられる。

(7) 横尾遺跡第 32 次調査

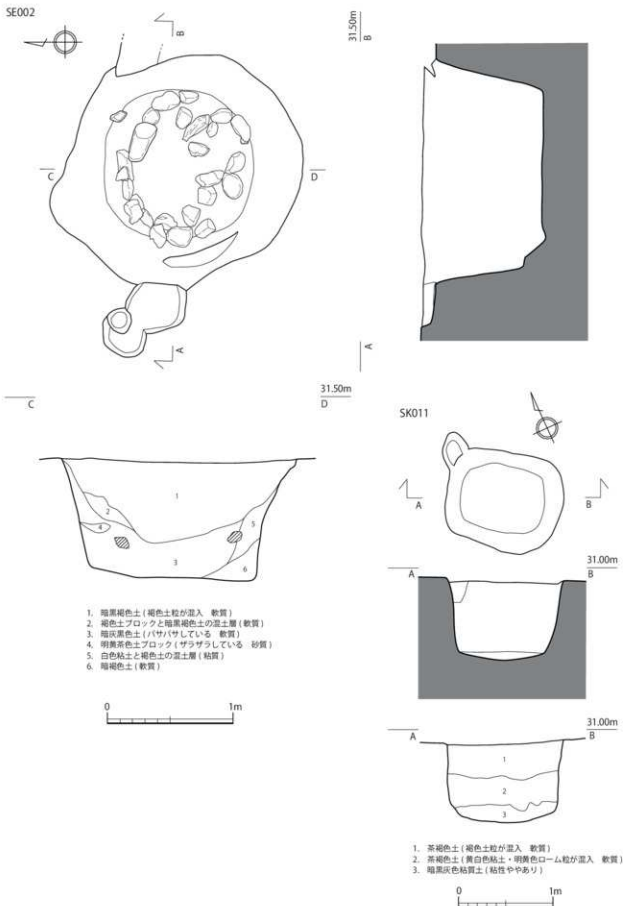
1. 調査概要

本調査地点は、大分市大字横尾字下横尾に所在し、北隣りには第 37 次調査地点がある。調査区の形状は東西方向の長方形で、調査面積は 110 m²である。発掘調査は平成 6 年 6 月 15 日～同年 7 月 5 日の期間で実施した。遺構検出面の標高は、東西両端ともに 31.00 m 前後で、平坦地である。検出した遺構は、18 世紀前半から 19 世紀代にかけての掘立柱建物跡 2 棟、井戸跡 1 基、土坑 10 基、溝跡 2 条などである。

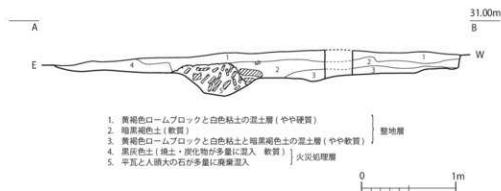
掘立柱建物跡 2 棟については、2 間×2 間、2 間×1 間の建物で、ともに身舎面積は 16 m²前後である。各建物の柱穴から遺物が出土していないため、築造時期については不明である。



第 58 図 第 32 次調査区遺構配置図・全体遺構図 (1/150)



第 59 図 SE002・SK011 遺構実測図 (1/30・1/40)



第 60 図 SD002 土層図 (1/40)

2. 遺構

井戸跡

SE002(第 59 図)

調査区の中央で確認された石組みの井戸である。切り合い関係は、砂利が混入した近代の溝に切られている。平面形状は不整楕円形を呈し、長軸 2.05 m、短軸 1.68 m、検出面からの最大深度は 0.95 m である。遺構の断面形状は、逆台形状になっている。石組みは、平面円形状で配石されており、北半分については径 0.1 ~ 0.3 m 大の礫石が 2 ~ 3 段程度の高さで積まれた状態で残存し、南半分については、積石が崩落している状況を確認した。土層の観察から、南側の第 5・6 層に関しては、土層ラインの立ち上がりや良質の白色粘土が混入している層が認められることなどから、石組みを行う際の裏込め土であると考えられる。遺構内から国産磁器の碗が出土しており、18 世紀中頃の時期が考えられる。

土坑

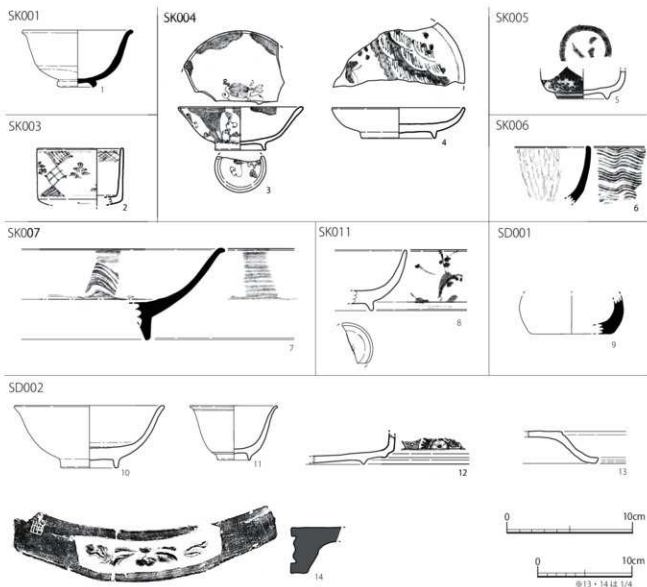
SK011(第 59 図)

調査区中央よりやや東側で検出した土坑である。切り合い関係は、砂利が混入した近代の溝に切られている。平面形状は楕円形を呈し、長軸 1.26 m、短軸 1.04 m、検出面からの最大深度は 0.82 m を測る。断面形状は、壁面が垂直気味に立ち上がり、床面は丸底状に窪んでいる。土層の観察から、上層が茶褐色土を主体とする軟質土層であり、下層は暗黒灰色粘質土層で、遺構の埋没は自然堆積によるものである。遺構内からは、肥前産染付碗や染付皿、土師質土器破片などが出土している。これらの出土遺物から、18 世紀前半から中頃にかけての遺構時期が考えられる。

溝跡

SD002(第 60 図)

調査区の東側で検出した、北東から南西方向に走る溝跡で、両端は調査区外に延び、北端の延長部分については第 37 次調査地点の SD001 につながる。溝の規模は、長さ 6.8 + α m、最大幅 1.44 m、検出面からの最大深度は 0.21 m である。溝の断面形状は、逆台形状である。ほぼ直線状に走っており、主軸方向は N - 41° - E である。北東端と南西端の床面の標高差は、ほぼ同じである。溝の中からは、多量の平瓦・丸瓦・軒丸瓦破片や人頭大の礫石群を検出している。瓦破片は二次焼成を受けているものが多く、その中には瓦当に『神』の刻印が施されている軒平瓦も出土している。また遺構内からは肥前産の色絵鉢や土師質土器蓋、石臼などが出土している。土層の観察から、第 4 層の黒灰色軟質土層の中に大量の焼土粒や柱など加工木材の炭化材が混入していた。第 1 ~ 3 層については黒色土層や褐色土層に黄褐色ロームブロックや白色粘土が混入し、水平に堆積している状況から、整地層であると考えられる。溝内の出土遺物から、18 世紀後半頃に埋没したものと考えられる。SK003 や SK006 との切り合い関係があるものの、同じ時期の遺物が出土しており、新旧関係は不明である。



第61図 第32次調査区出土遺物実測図(1/3・1/4)

3. 小結

掘立柱建物跡2棟の身舎面積は、ともに16㎡前後であることから倉庫などの小規模建物が想定される。各建物の柱穴から遺物が出土していないため、造営時期については不明であるが、2棟の建物の主軸方向が東側にある18世紀後半代のSD002の主軸方向と同じであることから、建物も同時期の遺構の可能性が高い。SD002については、溝の中から二次焼成を受けた瓦破片が多量に出土し、またその中に日常雑器である肥前産の色絵鉢や土師質土器蓋、石臼などが出土していたことや、土層の観察から溝の東側に多量の焼土粒や家屋に使用されたと考えられる加工木材の炭化材を含む土層を確認した状況から、次の事が想定できる。今回の調査では確認できていないが、溝の東側、おそらく調査区外の東側に瓦葺きの建物があり、この建物が火災によって焼失し、片付けを行う上で、先に溝の中に瓦や礫石などを廃棄し、その後に、焼土粒や炭化材をSD002の東側に集積し、火災処理を行ったものと考えられる。また溝内から瓦当に『神』の刻印が施されている軒平瓦が出土している。大分市東部の神崎・細・佐賀関一帯は、江戸時代から現在に至るまで瓦の生産地として知られており^(注20)、生産地を示した刻印を行ったものと考えられる。SD002の火災処理終了後には、黒色土層や褐色土層に黄褐色ロームブロックや白色粘土が混入している整地層が認められ、地盤改良が行われたことが窺われる。

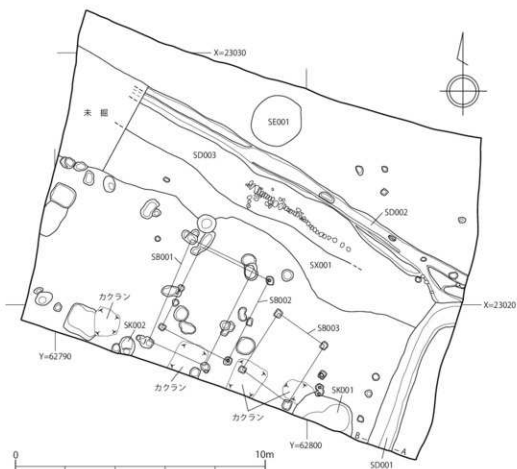
(8) 横尾遺跡第 37 次調査

1. 調査概要

本調査地点は、大分市大字横尾字下横尾に所在する。今回報告する調査地点の中では最北端に位置し、南側に隣接して第 32 次調査地点がある。調査区の形状は、東西方向の長方形で、調査面積は 220 m²である。発掘調査は、平成 6 年 10 月 31 日～同年 11 月 22 日の期間で実施した。遺構検出面の標高は、西端が 31.10 m 前後、東端が 30.70 m 前後で、西から東側に向けて緩やかに傾斜している。検出した遺構は、近世の掘立柱建物跡 3 棟、井戸跡 1 基、土坑 1 基、溝跡 3 条、性格不明遺構 1 基である。

掘立柱建物跡は、2 間×1 間の建物 2 棟、1 間×1 間の建物 1 棟を検出しており、小規模であることから倉庫などの建物が想定される。SB002 の柱穴からは国産陶器の灰落としが出土しており、18 世紀後半から 19 世紀頃の建物であると考えられる。また SB001 については、SB002 の建物主軸方向がほとんど同じであることや、SB002 の柱穴との切り合い関係が認められるが新旧関係が不明なことから、どちらの建物が先に築造されたのかは分からないが、継続的に建て替えられたようである。

SE001 は、調査区の北側で確認された石組みの井戸跡である。平面形状は円形を呈し、直径 2.0 m 前後を測る。埋土中から肥前産の染付皿や陶胎染付の火入などが出土しており、19 世紀代の時期が考えられる。



第 62 図 第 37 次調査区全体遺構図 (1/150)

SD002 は北西から南東方向に走る溝で、両端は調査区外に延びている。幅は 0.8m 前後で、検出面からの深さは 0.3m 前後程度であるが、灰白色粘土の溝床の 0.3m 下部には、溝に沿って竹を利用し、地中に埋設された伏樋が確認された。さらに等間隔で垂直に溝底からこの樋につながる掘り込みがあり、これは溝に流れ込んだ下水が、等間隔に開けられた垂直の穴から地下に埋設する樋の中を通して水が流れる仕組みになっている。溝の中は、隙間なく多種多様の陶磁器（陶器と磁器が 1:9 の割合）が廃棄されていた。遺物は、19 世紀前半から中頃の肥前産磁器の染付碗・鉢の他に、土師質土器甕、瓦質土器火鉢など日常雑器や土人形が出土している。SD003 は、SD002 の南側に位置し、同じ方向に走る溝である。検出面からの深度は 0.2m 前後で、床面に径 0.1 ~ 0.3m 大の石が 5m 程度並ぶ石列を確認した。出土遺物の内容は、肥前産の白磁紅皿や国産陶器鉢鉢、土人形、砥石などが出土しており、19 世紀前半から中頃の遺物が出土している。SD002 と溝の主軸方向が同じであり、出土遺物の内容や遺構の時期が同じであることなどから、SD003 は SD002 に伴うテラス跡と考えられ、同時期に存在した遺構の可能性も想定される。

2. 遺構

溝跡

SD001(第 63 図)

調査区の東南で検出した、南北方向に走る溝跡で、北側については東方向へ 70° 程度屈曲している。SD002 と切り合い関係が認められ、SD002 が SD001 を切っている。溝の規模は、長さ 7 + a m、最大幅 0.96 m、検出面からの最大深度は 0.35m である。断面形状は、丸底状に窪んでいる。南北方向に走っている部分の溝の主軸方向は、N - 22° - E である。遺構内から、多量の平瓦片や人頭大の礫石が出土し、その中に肥前産の染付碗や染付猪口、国産陶器の灰落としや瓦質土器火鉢などが少量出土している。土層の観察から、上層の黒褐色軟質土層の中に大量の焼土粒や炭化材が混入しており、下層の黒灰色軟質土層の中には大量の瓦片が混入している。出土遺物から 18 世紀後半頃に埋没したものと考えられる。また溝の南北両端は調査区外に延びており、南側の延長部分については、第 32 次調査で確認した 18 世紀後半の SD002 の北端に向かっており、遺構時期も同じことから同一遺構であると考えられる。



1. 黒茶褐色土（炭化物・褐色小粒子が混入 軟質）
2. 黒灰色土（炭化物・褐色小粒子が混入 軟質）



第 63 図 SD001 土層図 (1/40)

3. 小結

今回の調査では、18 世紀後半から 19 世紀中頃にかけての遺構群であり、第 32 次調査点で確認した遺構群と同時期の集落遺構であると考えられる。溝跡 3 条からは、多量多種にわたる陶磁器製品の他に、瓦質土器火鉢、土師質土器甕、石製品の石臼・砥石、土人形などの遺物が一括廃棄された状況で出土している。横尾地区には江戸時代を通じて白杵藩領の村集落があり、江戸時代後期から幕末期の記録では、棧瓦を用いた屋敷が建てていたことが確認されている。溝からの豊富な出土遺物については、幕末期に使用された日常雑器の種類、また当時の生活を知る上で良好な一括資料になると考えられる。



第64図 第37次調査区出土遺物実測図(1/3・1/4)

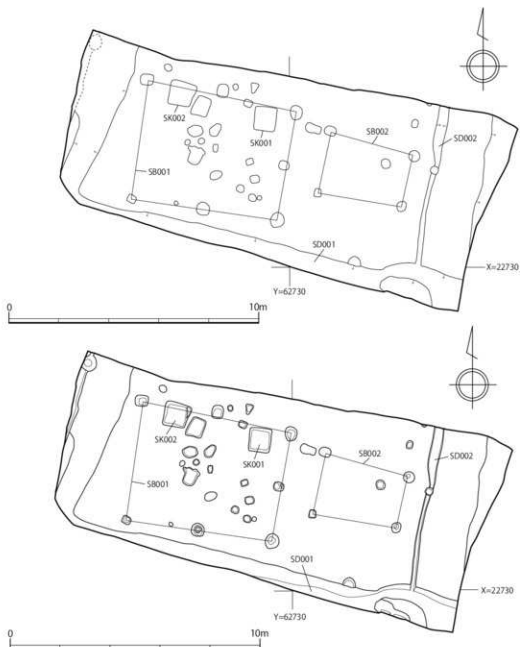
(9) 横尾遺跡第45次調査

1. 調査概要

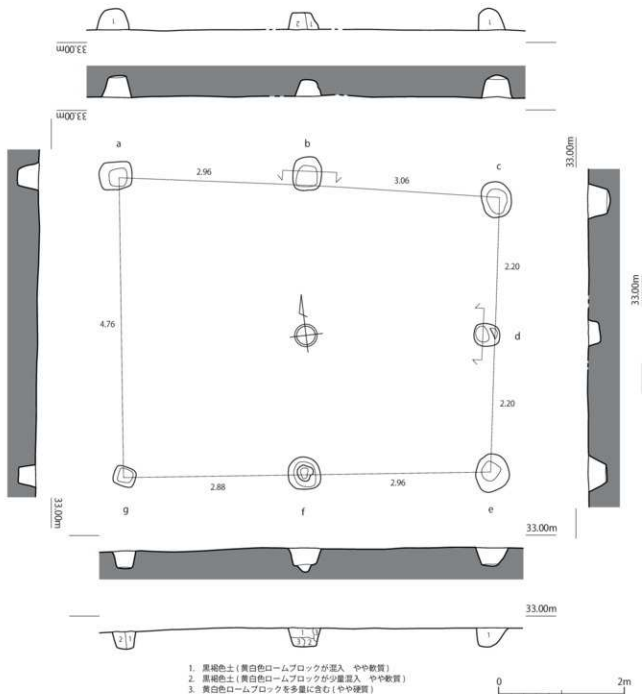
横尾遺跡第45次調査地点は、大分市大字横尾字寺ノ下に所在し、西隣りには第53次調査地点がある。発掘調査は、平成7年10月26日に開始し、同年11月8日の期間で終了した。調査区は東西方向に長い長方形で、調査面積は148㎡である。遺構検出面の標高は、32.80m前後である。検出した遺構は、中世以降の掘立柱建物跡2棟、L字状の溝跡1条と細長い溝跡1条、土坑2基などである。

SB002はSB001の東隣りで検出した、1間×1間、身舎面積7.65㎡の掘立柱建物跡である。建物は東西棟で、桁行の主軸方向は、 $N-75^{\circ}-W$ を指向している。柱穴から遺物は出土していない。

SD001は、調査区の西端と南端で検出したL字状に走る溝である。さらに東端で確認した落ち部分と同一遺構である可能性も考えられ、その場合SB001とSB002を囲む形で平面「コ」字状に展開する。調査区外に展開するため、長さや最大幅は不明であるが、検出面からの最大深は0.22mである。ほぼ直線状に南北方向に延び



第65図 第45次調査区遺構配置図・全体遺構図(1/150)



第 66 図 SB001 遺構実測図 (1/60)

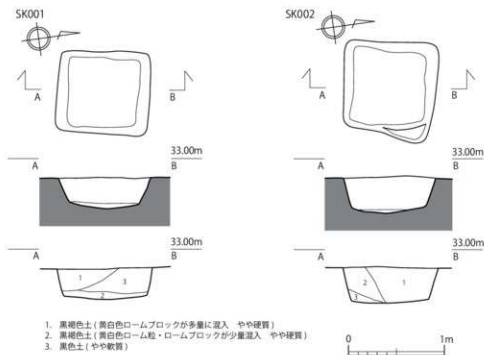
ており、南側の上端ラインの主軸方向で $N-77^{\circ}-W$ を指向している。断面形状は、緩い丸底状である。遺構内からは土師器や国産陶器揃鉢の小破片が出土したのみで、遺構の時期は中世以降であると考えられる。SD002 は調査区東側で検出した細長い溝で、南北方向に向かって直線状に走っている。南側で SD001 との切り合い関係が認められるが、新旧関係は不明である。長さは $6.4 \pm a$ m、最大幅は 0.42m、検出面からの最大深度は 0.07m である。主軸方向は $N-9^{\circ}-E$ を指向している。溝内から遺物が出土していないため、時期は不明である。

2. 遺構

掘立柱建物跡

SB001(第 66 図)

SB002 の東側で検出した、桁行 2 間 × 梁行 2 間、身舎面積 27.16 m² を測る掘立柱建物跡である。建物は東西



第 67 図 SK001・SK002 遺構実測図 (1/40)

棟で、桁行の主軸方向は、 $N-80^{\circ}-W$ を指向している。柱穴の平面形状は円形もしくは隅丸方形を呈し、径 $0.32 \sim 0.64\text{m}$ 、検出面からの深度は $0.17 \sim 0.37\text{m}$ を測る。土層の観察により、柱痕が柱穴 b・g から確認した。柱穴柱間は、桁行が $2.88 \sim 3.06\text{m}$ 、梁行は 2.20m 前後である。柱穴から青磁の小破片が出土しており、中世以降の建物であると考えられる。

土坑

SK001(第 67 図)

調査区中央で検出された土坑である。平面形状は隅丸方形を呈し、長軸 0.96m 、短軸 0.88m 、検出面からの最大深度は 0.32m を測る。断面形状は、逆台形状である。埋土は、第 1・3 層が黄白色粘土をブロック状に多く含む黒褐色土層で、第 2 層はやや軟質の黒色土層である。埋土中から磁器の小破片が出土しているのみで、遺構の時期は中世以降であると考えられる。

SK002(第 67 図)

調査区の北西で検出された土坑である。平面形状は隅丸方形を呈し、長軸 1.08m 、短軸 0.96m 、検出面からの最大深度は 0.36m で、断面は逆台形状である。埋土は、第 1 層は黄白色粘土をブロック状に多く含む黒褐色土層で、堆積状況から再度掘り返したような痕跡が見受けられる。SK001 と遺構の形態や規模、埋土の状況が類似している。遺構内から遺物は出土していない。

3. 小結

今回検出した掘立柱建物跡 2 棟の身舎面積は、SB001 が 27.16m^2 、SB002 が 7.65m^2 と規模が小さいことから、ともに倉庫として使用されていたものと考えられる。SK001 と SK002 の関係については、遺構の形態や規模が類似していることや、SK001 と SK002 の中点を結んだラインと SB001 の北側桁行ラインがほぼ平行していることから、これらが SB001 と一連の遺構であると考えられる。調査区が 515m^2 と狭小であることや、各遺構から出土した遺物が土器や陶磁器の小破片が数点のみである状況などから、遺跡の全容を掴むのは困難であるが、今回確認した掘立柱建物跡の桁行や梁行の主軸方向と溝の主軸方向がほぼ一致している点などから、ほぼ中世以降の同一時期に機能した遺構群であり、これらが SD001 等の溝に囲まれた施設であると考えられる。

(10) 横尾遺跡第 48 次調査

1. 調査概要

横尾遺跡第 48 次調査地点は、大分市大字横尾下横尾に所在し、西隣りには第 80 次調査地点がある。街区道路部分の建設に伴う発掘調査で、調査面積は 500 m²である。発掘調査は調査区の南と北でそれぞれ、平成 7 年 12 月 22 日～平成 8 年 1 月 18 日と平成 8 年 8 月 2 日～同年 8 月 20 日の期間で実施した。遺構検出面の標高は、西側が 31.50 m 前後で、東側が 31.10 m 前後で、西側から東側にかけて緩やかに傾斜している。検出した遺構は、中世の掘立柱建物跡 4 棟、溝跡 4 条、近世の掘立柱建物跡 1 棟、土坑約 20 基、早稲墓 2 基を確認した。掘立柱建物や櫓列群は、調査区北側に分布が集中し、近世の墓や土坑群は、調査区東側に多く見られる。

SB003 は、調査区の北側で検出した桁行 1 間以上 × 梁行 1 間の掘立柱建物跡で、建物の北側部分は調査区外に展開するものと考えられる。桁行の主軸方向は N - 20° - E 前後を測る。柱穴から 17 世紀代の唐津産陶器の播鉢が出土している。SB004 は、SB003 の南東側で検出された桁行 3 間 × 梁行 1 間、身舎面積約 25 m²の掘立柱建物跡である。建物は東西棟で、梁行の主軸方向は N - 11° - E を測る。柱穴から遺物は出土していない。

土坑については、調査区東南隅で確認された SK002 や調査区東側で検出された SK025・SK026 から土師質土器の埋裏が出土している。裏は口縁部から胴部中位にかけては欠損していたが、胴部下位から底部にかけては直立した状態で出土している。SK002 の遺構内からは埴産陶器播鉢が出土し、遺構の時期は 18 世紀中頃と考えられる。

2. 遺構

掘立柱建物跡

SB001(第 70 図)

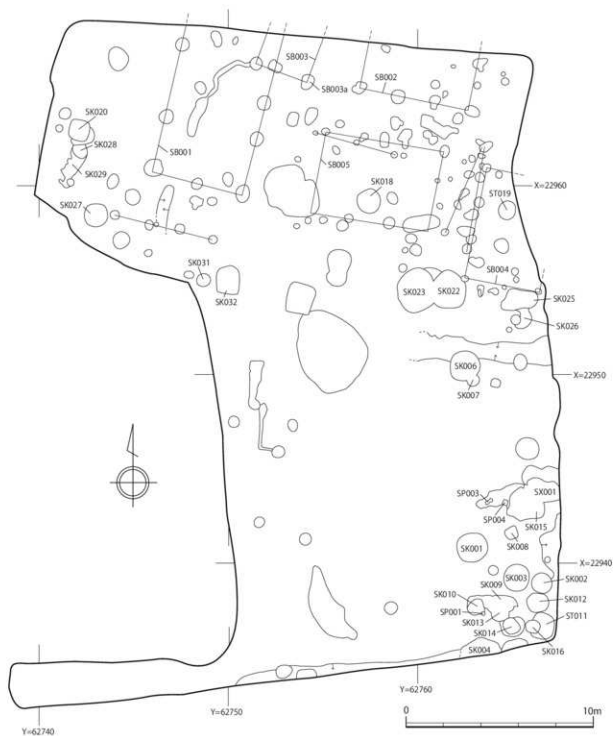
調査区北側で確認された、桁行 3 間以上 × 梁行 2 間の掘立柱建物跡である。建物の北側部分は調査区外に展開し、身舎面積は 30 m²以上あるものと考えられる。建物は南北棟で、桁行の主軸方向は、N - 14° - E を指向している。柱穴の平面形状は円形もしくは楕円形を呈し、径 0.50 ～ 0.96 m、検出面からの深度は 0.16 ～ 0.46 m を測る。土層の観察により、柱痕を柱穴 a・b・d ～ h で確認し、柱の抜き取り痕を柱穴 c から確認できた。柱穴柱間は、東の桁行が 2 間で 2.92 ～ 3.98 m、西の桁行が 3 間で 2.00 ～ 2.94 m である。また梁行間は 2.38 ～ 2.53 m である。柱穴から土師器や須恵器の小破片が出土しているが、明確な造営時期は不明である。

SB002(第 71 図)

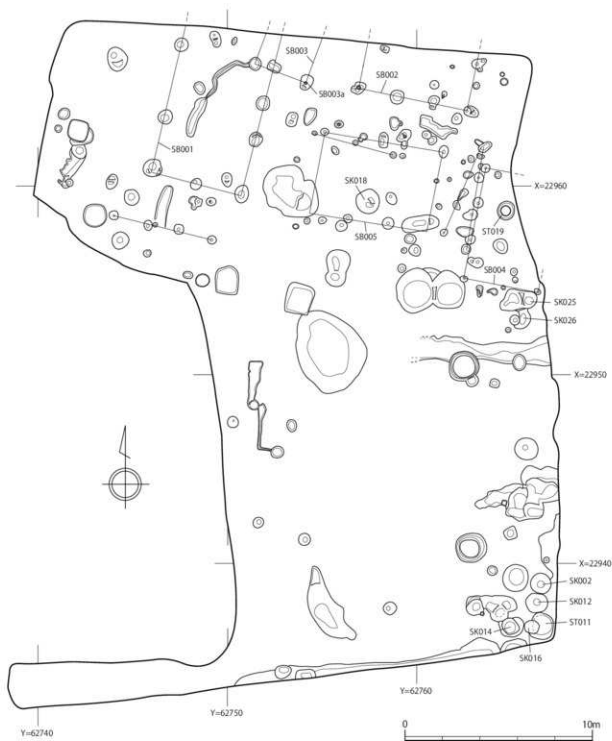
調査区北側の SB001 の東隣りで確認した、桁行 3 間 × 梁行 1 間以上の掘立柱建物跡である。建物の北側部分は調査区外にかかっているため建物の全容は不明であるが、おそらく東西棟であると考えられ、梁行の主軸方向は、N - 11° - E を指向している。柱穴の平面形状は楕円形もしくは不整楕円形を呈し、径 0.48 ～ 0.88 m、検出面からの深度は 0.31 ～ 0.48 m を測る。柱穴柱間は、桁行が 1.82 ～ 2.10 m、梁行は 2.54 m である。土層の観察により、柱穴 b・c から柱痕を確認した。柱穴 b・c から 15 世紀末から 16 世紀前半頃の土師器環 B が出土している。

SB004(第 72 図)

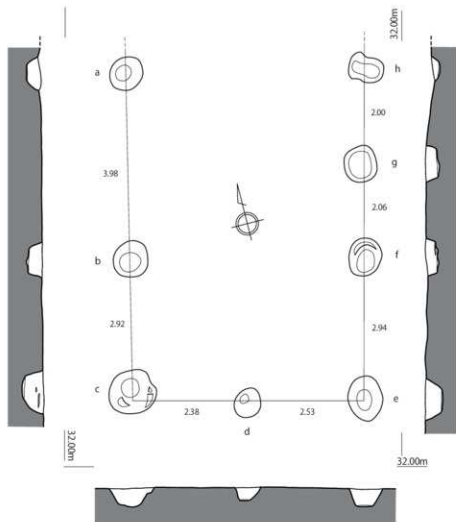
調査区北東側で確認された、桁行 3 間 × 梁行 2 間、身舎面積約 20 m²の掘立柱建物跡である。建物の東側部分は調査区外に展開している。SK022 との切り合い関係が認められるが、新旧関係については不明である。建物は南北棟で、桁行の主軸方向は、N - 11° - E を指向している。柱穴の平面形状は円形もしくは楕円形を呈し、径 0.22 ～ 0.56 m、検出面からの深度は 0.17 ～ 0.33 m を測る。柱穴柱間は、桁行が 1.90 ～ 2.08 m、梁行は 1.88 ～ 2.10 m である。柱穴から遺物は出土していない。



第 68 図 第 48 次調査区遺構配置図 (1/200)



第 69 図 第 48 次調査区全体遺構図 (1/200)



1. 淡黒灰色土 (白色粘土を含む やや軟質)
2. 黒褐色土 (黄褐色土をブロック状に含む やや硬質)



1. 淡黒褐色土 (茶褐色土粒をわずかに含む 軟質)
2. 明黒褐色土 (白色粘土を少量含む やや軟質)
3. 明黒褐色土 (白色粘土・黄白色土をブロック状に含む やや軟質)
4. 黒褐色土 (白色粘土を少量含む 硬質)
5. 黒灰色土 (軟質)



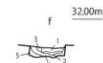
1. 淡黒褐色土 (軟質)
2. 明黒褐色土 (白色粘土・黄白色土をブロック状に含む やや軟質)
3. 黒褐色土 (黄白色土を少量含む やや軟質)



1. 淡黒褐色土 (軟質)
2. 黒褐色土 (白色粘土をわずかに含む やや硬質)



1. 淡黒灰色土 (白色粘土を少量含む やや軟質)
2. 明黒褐色土 (白色粘土・黄白色土を含む やや硬質)



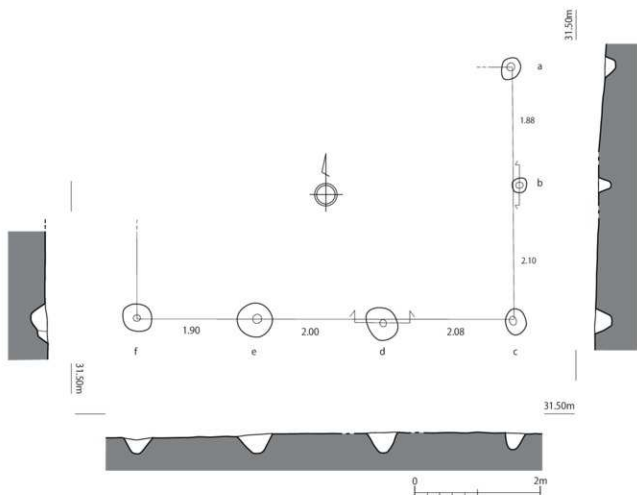
1. 褐色土 (黄褐色粒を含む 硬質)
2. 黒褐色土 (白色粘土をわずかに含む 硬質)
3. 灰褐色土 (硬質)
4. 黒褐色土 (白色粘土をブロック状に含む やや硬質)
5. 暗黒褐色土 (白色粘土・黄白色土を少量含む 硬質)



1. 淡黒灰色土 (白色粘土を少量含む やや軟質)
2. 明黒褐色土 (白色粘土・黄白色土を含む やや硬質)



第 70 図 SB001 遺構実測図 (1/80)



第 72 図 SB004 遺構実測図 (1/60)

短軸 1.01 m、検出面からの最大深度は 0.62 m を測る。断面形状は、逆台形状である。埋土中からの肥前産の染付碗や染付香炉、国産陶器の陶胎染付火入などが出土していることから、遺構の時期は 18 世紀後半から 19 世紀中頃と考えられる。

SK016(第 73 図)

調査区南西隅で検出され、ST011 を切っている土坑である。平面形状は楕円形を呈し、長軸 0.76 m、短軸 0.68 m、検出面からの最大深度は 0.19 m を測る。断面形状は、搦鉢状になっている。埋土は単層で、やや硬質の淡黄茶色土層である。遺構内から 19 世紀前半から中頃の肥前産染付猪口が出土している。

SK018(第 74 図)

調査区中央よりやや北側で検出された土坑である。平面形状は円形を呈し、長軸 1.32 m、短軸 1.29 m、検出面からの最大深度は 0.48 m を測る。断面形状は、搦鉢状になっている。土層の観察により、西側の方を大きく掘り返している痕跡が認められる。遺構内から 19 世紀代の瀬戸産磁器の小環が出土している。

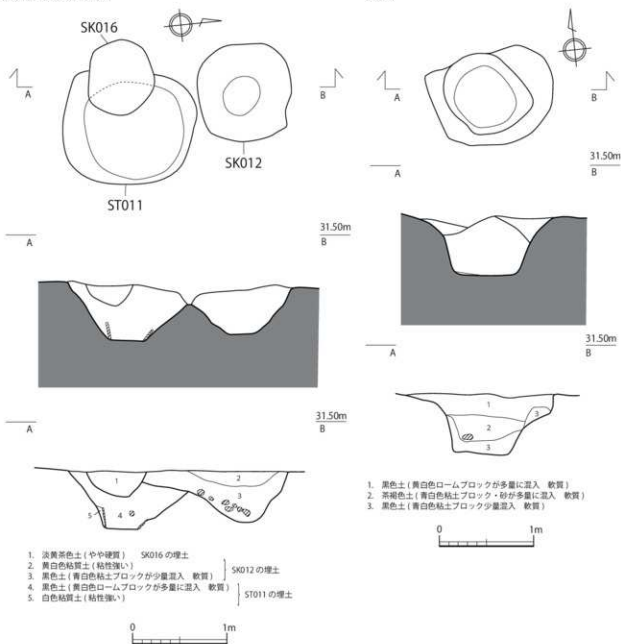
近世墓

ST011(第 73 図)

調査区南東隅で検出した早稲墓で、SK012 と SK016 に切られている。平面形状は隅丸方形を呈し、長軸 1.44 m、短軸 1.28m、検出面からの最大深度は 0.58 m を測る。断面形状は、搦鉢状になっている。下位から平面図

SK012・SK016・ST011

SK014

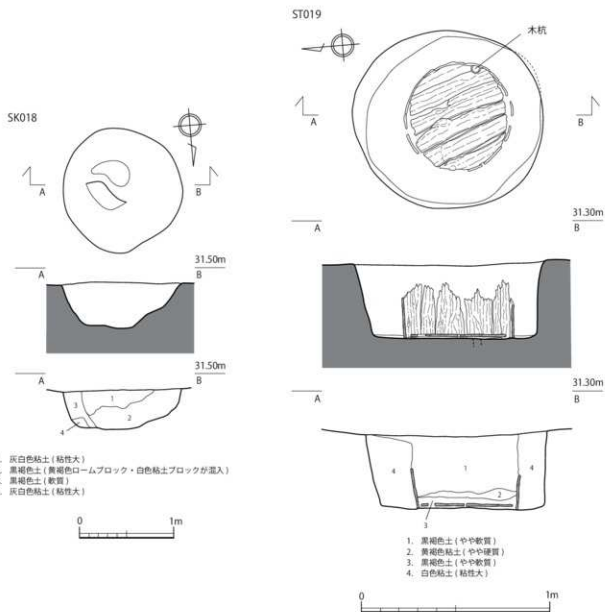


第 73 図 SK012・SK016・ST011・SK014 遺構実測図 (1/40)

形状に展開する木製桶の薄い側板を確認したが、底部部分は確認できなかった。検出した段階での早桶の平面径は 1.02m である。土層の観察により、第 5 層は白色粘土層で、早桶を安置固定する目的で、早桶の側面に裏込め土として用いられたものであると考えられる。棺内から人骨は出土していない。遺構内から唐津産陶器の描鉢や鉢が出土しており、17 世紀末から 18 世紀中頃の埋葬時期が想定される。

ST019(第 74 図)

調査区北東側で検出した早桶墓である。平面形状は楕円形を呈し、長軸 1.01 m、短軸 0.93m、検出面からの最大深度は 0.39 m を測る。断面形状は、逆台形状になっている。遺構の中央に円形の木製早桶の側板と底板の一部を確認した。早桶の底板径は 0.55 m で、底板の東側には、径 0.05m 程度の刳り抜き箇所があり、そこに木杭が土中に刺さっていたのを確認した。土層の観察により、早桶の側面に認められる第 4 層の白色粘土層は、



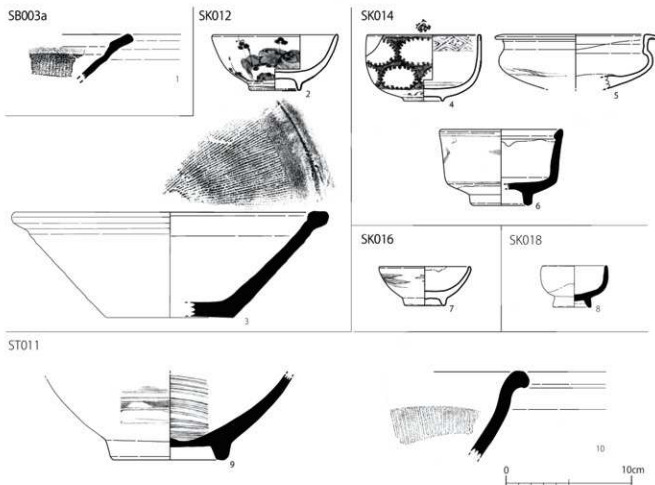
第 74 図 SK018・ST019 遺構実測図 (1/20・1/40)

早桶を安置固定する目的で裏込め土として用いられている。第 1 層のやや軟質の黒褐色土層は、後世の桶蓋板の腐食や土圧に伴い、桶蓋板が壊れ、桶内に崩落した層である。桶内から人骨や副葬品などの遺物は確認できなかった。

3. 小結

調査区北側で掘立柱建物跡 5 棟を検出したが、その中で柱穴から出土した遺物から築造時期が判別できる建物は、15 世紀末から 16 世紀前半頃の SB002 と、17 世紀代の SB003 である。他の 3 棟については、遺構時期が不明であるが、建物の桁行および梁行の南北主軸方向を比較してみると、SB001・SB002・SB004・SB005 は、 $N-11^{\circ} \sim 14^{\circ}-E$ の範囲内で指向していて、SB003 については $N-20^{\circ}-E$ 前後傾いている。このことから、SB003 以外の建物は、SB002 と同じ中世後期の建物であると考えられる。

早桶を用いた近世墓については、調査区南東側からは ST011、また調査区北東側では ST019 が確認され、ST011 から 17 世紀末から 18 世紀中頃の唐津産陶器の播鉢や鉢が出土している。この近世墓 2 基の周辺の土坑



第 75 図 第 48 次調査区出土遺物実測図 (1/3)

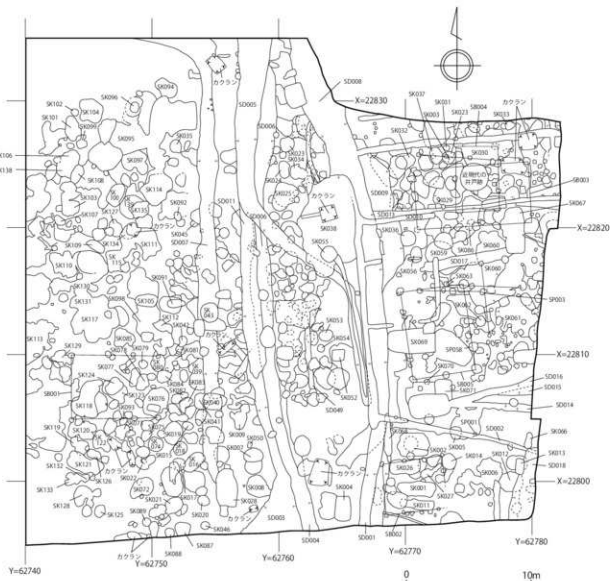
群については、早桶などの棺体や人骨は確認されていないが、平面形状が円形を呈し、径 1.0～1.5m 前後、検出面からの深度が 0.5m 程度の ST011 や ST019 と同じような形態や規模の土坑が数基認められ、土坑内からは 18 世紀中頃から 19 世紀中頃にかけての陶磁器が出土している。これら土坑についても遺構の形態・規模・遺構の時期など早桶墓との類似点が認められることから、近世墓である可能性が考えられる。48 次調査地点の東側では、18 世紀に入ると本格的に埋葬が始まり、それが幕末期まで続き、その間に徐々に墓群を形成していったものと考えられる。

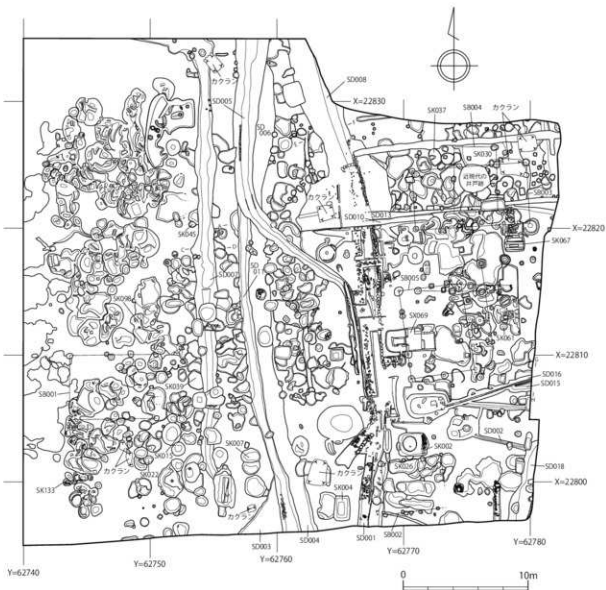
(11) 横尾遺跡第49次調査

1. 調査概要

横尾遺跡第49次調査地点は、大分市大字横尾字寺ノ下に所在し、東側には平安時代前期の粘土採掘坑が数多く確認された5次調査地点が隣接している。街区道路部分の調査面積は1,200㎡、調査期間は平成8年1月30日に開始し、同年8月10日に終了した。遺構検出面の標高は、西側が31.50m前後であり、東側が31.10m前後となり、西側から東側にかけて緩やかに傾斜している。検出した主要遺構は、古代の粘土採掘坑約60基、近世から近代にかけての酒造所に関する竈の施設1基、板敷き跡や石組跡から作業場と考えられる土坑3基、酒造遺構群の周囲に巡っている溝跡10数条、掘立柱建物跡5棟を確認した。

粘土採掘坑については、分布が調査区全体に認められ、特に西側の方では、密になっており、土坑同士が複雑に切り合っている状況が認められる。遺物の出土量は僅少であることから、新旧関係については不明なものが多い。土坑の特徴としては、平面形状は不整形を呈するものが多く、壁面や床面の断面形状は凸凹の起伏が目立つものが多い。また規模に関しては、大きいものは径5m以上、小さいものは径0.5m前後で、大小に格差があるが、検出面からの深度のついては0.3～0.4m前後のものが多い。土坑群から、8世紀後半から10世紀代の土師器環や鉢、黒色土器A類の桶cなどが数点出土している。



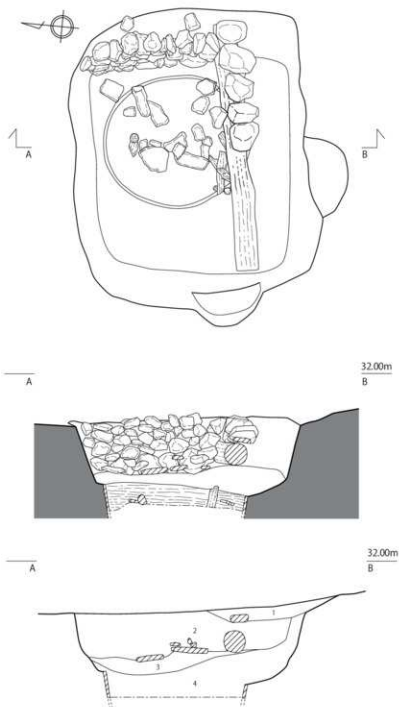


第77図 第49次調査区全体遺構図(1/300)

溝跡については、調査区の中央を南北方向に縦断する溝幅 1.5m 以上の溝跡 6 条を検出し、複線に切り合っている。各溝の埋土中から 18 世紀中頃から 19 世紀後半の遺物が出土している。調査区の東側で確認した区画の溝跡 SD002・SD010・SD013 については、幅約 0.5 m、検出面からの深度は 0.1m 前後と浅く、各溝から近代以降の国産陶磁器類が出土し、SD010 からは 0.1～0.2m 大の礫石が多量に検出している。

掘立柱建物跡は、5棟が確認されている。SB002とSB003が3間×2間の東西棟建物、SB005が3間×2間の南北棟建物、SB001が3間以上×1間以上の東西棟建物、SB004が2間×1間の南北棟建物である。SB005の柱穴SP058から、近世以降の時期の碗や皿片が出土している。他の建物については、柱穴から遺物が出土していないが、柱穴が古代の粘土探掘坑を切っている状況や、建物の桁行および梁行の南北主軸方向がSB005の南北主軸方向とほぼ同じ状況であることから、近世以降の建物跡であると考えられる。

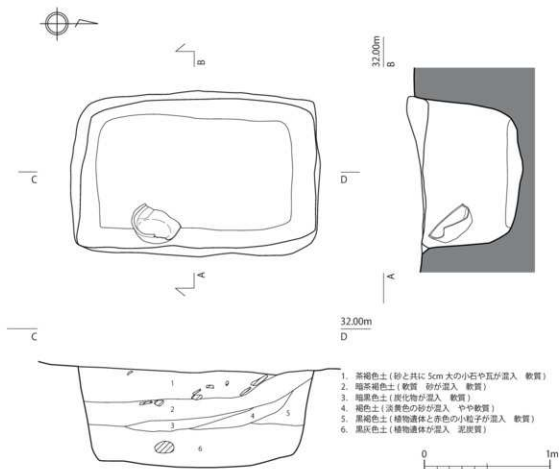
調査区北東側で確認されたSK067は、長軸 3.95 m、短軸 1.55 m の大型土坑である。検出面からの 0.2 m 程度掘り下げた段階で、土坑の中央から南側にかけ、長さ 0.55 ~ 1.45 m、厚さと幅が 0.15 m 大の角材が、上面の高さと向きを揃えて、敷き並べられた状態で確認した。また北側は 0.1 ~ 0.4 m 大の礫石 20 数点が散在した状況で出土し、何らかの石組遺構があったものと考えられる。この大型土坑の東側には土管が埋設された排水溝が接続されており、床面は西側から東側にかけて傾斜している。同じような形態をした土坑と排水溝が調査区南東側でも確認されており、SD016 が床面に土管が埋設されている排水溝で、この排水溝の西側には SK067 と同



1. 淡茶色土 (硬質)
2. 黒褐色土 (やや硬質)
3. 黄茶色土 (砂を含む 軟質)
4. 淡黄白粘土と青白色粘土の混土層



第78図 SK002 遺構実測図 (1/30)



第 79 図 SK004 遺構実測図 (1/30)

規模の大型土坑が確認され、0.1～0.5m 大の礫石 10 点ほど散在した状況で確認されている。

2. 遺構

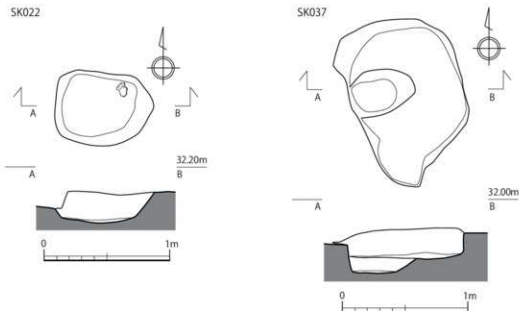
土坑

SK002(第 78 図)

調査区南東側で検出された石組土坑である。平面形状は隅丸方形を呈し、長軸 2.52 m、短軸 1.81 m を測る。検出面から 0.70m 掘り下げた地点で、木製の桶状のものを検出し、その地点で掘削を中止している。遺構は、上部構造が石組みで、遺構の東側と南側の壁面に径 0.1～0.3m 大の礫石が 4～5 段積まれているのを確認した。また南側の石組部分の直下から、長さ 1.96m、直径 0.18m の丸太が、南北方向に水平に置かれているのを確認した。下部構造で確認された桶の径は 0.55m である。桶内からは、用途不明の加工木製品が数点出土している。土層の観察により、遺構の堆積は、人為的に埋没したものと考えられる。遺構内から肥前産の口罫染付碗や染付皿、国産陶器鉢鉢、青銅製品のかんざしなどが出土し、遺構の時期は 19 世紀前半から中頃と考えられる。

SK004(第 79 図)

調査区南側で、SD001 と SD004 の間に挟まれた地点で検出した土坑である。平面形状は長方形を呈し、長軸 1.97 m、短軸 1.31 m、検出面からの最大深度は 0.86 m である。断面形状は、緩い逆台形状になっている。検出面から 0.1m 程度掘り下げた段階で、東側から瓦質土器の浅鉢火鉢が口縁部を上にしてやや傾いた状態で出土した。底面や壁面の一部は、赤く焼け締まっている。土層の観察により、第 1～5 層は、茶褐色や黒褐色を呈する泥炭質土層で、炭化物や砂や焼土粒などが混入している。最下層の第 6 層は、黒灰色を基調とする軟質泥炭層である。埋土の堆積状況から、北側から人為的に土を入れて埋め戻したものと考えられる。遺構内から肥前産の染付皿や



第 80 図 SK022・SK037 遺構実測図 (1/30)

色絵小环、唐津産陶器の描鉢、関西系陶器甕などが出土し、遺構の時期は 19 世紀前半から中頃と考えられる。

SK022(第 80 図)

調査区南西側で確認された土坑である。平面形状は不整楕円形を呈し、長軸 0.78 m、短軸 0.58m、検出面からの最大深度は 0.25 m である。断面形状は、舟底状になっている。遺構内からの出土遺物量は少ないが、土師器の坏 a4 が 1 点出土しており、遺構の時期は 9 世紀前半頃と考えられる。

SK037(第 80 図)

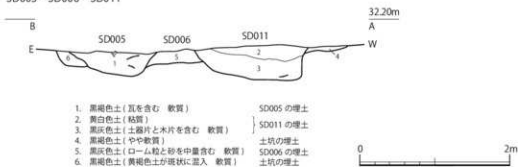
調査区北東側で確認された土坑である。SK023 との切り合い関係が認められるが、新旧関係は不明である。平面形状は不整楕円形を呈し、長軸 1.34 m、短軸 0.91 m、検出面からの最大深度は 0.34 m である。床面には径 0.5m、深度 0.1m 程度の掘り込みが認められる。SK037 の周辺にも、同じ形態や同規模の土坑が多く認められることから、粘土採掘坑であると考えられる。遺構内からは土師器坏の小破片が出土したのみで、明確な遺構の時期は不明である。

溝跡

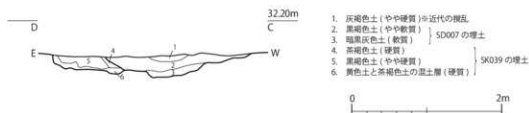
SD005(第 81 図)

調査区の中央で確認された溝である。北端は調査区外に展開しているが、北側から南に向かって走り、途中で南東方向に蛇行している。他の南北溝との切り合い関係が認められ、SD004 や SD006・SD011 を切り、SD010 や SD013 に切られている。溝は、検出した長さ $32 + \alpha$ m、最大幅 2.51m、検出面からの最大深度 0.53m を測る。溝は、北側の幅が広く、南方になるにつれて幅が狭くなっている。溝の断面形状は、船底状になっている。溝の北側では、溝の東西両側面に径 0.1 ～ 0.3 m 大の石を用いて、2 ～ 3 段程度の高さで石積みを行っているのを確認した。溝内からの遺物の出土量は著しく多く、肥前産磁器の染付碗・染付皿・染付猪口・紅皿・小坏、織部焼陶器の土瓶、土師質土器の甕・火鉢・埴轮、軒丸瓦や平瓦片、銅製品杓子、ガラス製の薬瓶、土管片など多種多様の遺物が散在するような状況で出土し、廃棄された状態であったと考えられる。これらの遺物から、溝の埋没時期は 19 世紀中頃から後半頃と考えられる。

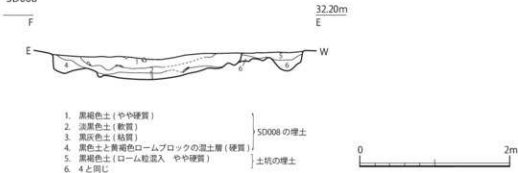
SD005・SD006・SD011



SD007



SD008



SD015・SD016



第 81 図 SD005・SD006・SD007・SD008・SD011・SD015・SD016 土層図 (1/50)

SD006(第81図)

調査区の中央で確認された南北方向に走る溝で、SD005に切られている。溝は緩やかに蛇行しながら走っており、SD004につながる。SD004を含めた溝の規模は、長さ39 + a m、幅1.1 + a m、検出面からの最大深度は0.39mである。埋土は、上層がやや硬質の黄褐色土層、下層がやや軟質の黒褐色土層である。溝内からの出土遺物は、肥前産の染付碗・染付皿・小坏、国産陶器播鉢、土師質土器や瓦質土器の破片などが出土しており、溝の埋没時期は19世紀中頃と考えられる。

SD007(第81図)

調査区の中央で確認されたSD005やSD011の西側を並行するように南北方向に走る溝である。溝の北端部分で西側に大きく屈曲して、調査区外に延びている。溝の規模は、長さ36 + a m、幅1.85m、検出面からの最大深度は0.42mを測る。溝の断面形状は浅い皿状になっており、南北両端の床面の標高値はほぼ同じであるが、南では次第に溝が消失している。南北方向に走る溝の主軸方向はN - 1° - Wで、ほぼ真北方向を向いている。溝からは国産磁器の肥前産の染付碗・小坏、瀬戸美濃産の白磁皿、唐津産陶器の播鉢、土人形などが出土し、溝の埋没時期は19世紀前半から中頃であると考えられる。

SD008(第81図)

調査区中央よりやや東側で確認され南北方向に走る溝である。溝の北端に関しては調査区外に延びており、南側については、SD001とつながっている。僅かに東側へ湾曲しながら走り、溝の最大幅は北側で2.66mを測り、南方になるにつれて溝幅が狭くなっている。検出面からの最大深度は、北側で0.41mを測る。溝の東西両側面には径0.1 ~ 0.3 m大の石を用いて、2 ~ 3段程度の高さで雑に石積みを行った箇所が検出した溝の中程で確認した。溝内から肥前産の銅版印刷の染付碗や瓦質土器火鉢、銅製キセルなどが出土しており、19世紀後半頃に埋没したものと考えられる。

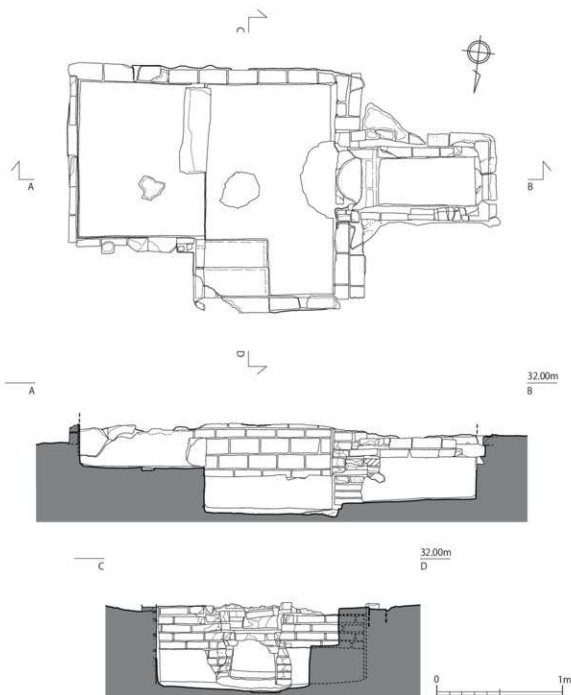
SD015(第81図)

調査区南東側で検出した東西方向に走る溝状遺構で、調査区外に延びている。切り合い関係は、床面に土管が埋設されているSD016に切られている。溝の最大幅は1.10 m、検出面からの最大深度は0.71mを測る。断面形状は、逆台形状になっている。土層の観察により、第1層から一度掘り返しを行っているようである。遺構内からは19世紀中頃の肥前産磁器の色絵小坏が出土している。

その他の遺構(酒造遺構)

SX069(第82図)

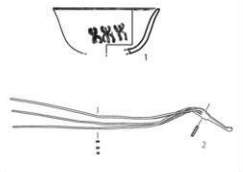
調査区中央よりやや東側で確認された煉瓦造りの遺構である。今回検出されたものは、平面形状は方形状を組み合わせた形状で、検出面からの深度が異なる3室構造になっており、部分的に壁面である煉瓦に強く火を受けている痕跡が認められたことから、焼成室関連の遺構であると考えられる。東西方向に3室を含め、全長3.38mを測る。西側の室内は、平面形状は長方形を呈し、床面での規模は、東西1.10m、南北0.36mである。検出面からの最大深は東側で0.57mを測り、西側に向かって床面が緩やかに上っている。西側の低い部分については、天井部が残存していて、高さ0.30m、幅0.35mの正面アーチ状を呈するトンネルが認められる。この室内については、壁面や床面に赤く焼けている痕跡や煤の付着痕が顕著に認められ、東側部分が燃焼部になり、西側部分が煙道部になると考えられる。中央の室内は、平面形状は長方形を呈し、床面での規模は、東西1.07m、南北1.68m、床面積1.80 m²である。検出面からの最大深度で0.70mを測る。この室内に関しては、焚口部になると考えられる。東側の室内は、平面形状は正方形を呈し、床面での規模は東西0.98m、南北1.22m、床面積1.20 m²である。床面は中央の焚口部と比較すると、0.35m程度高くなっている。中央の室内との間に長さ0.68m、幅0.21



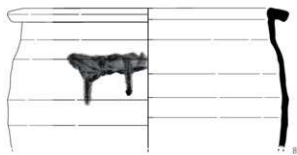
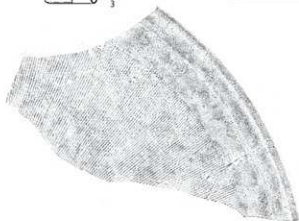
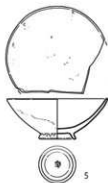
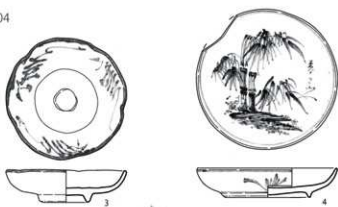
第 82 図 SX069 遺構実測図 (1/30)

m、検出面と同じ高さの切石が置かれていて、両室を仕切っている。この室内については、壁面や床面に火を強く受けた痕跡や煤の付着痕が認められないことから、燃焼の際に使用する木材などを保管していた保管庫などの可能性が想定される。3室の床面全体に漆喰の塗跡痕が認められ、一部漆喰をはがれたところから、白色粘土層の地表面が露出している。壁面の構造については、煙道部と焚口部では赤煉瓦を長手積みで7～8段積んでおり、赤煉瓦と赤煉瓦の間に漆喰を入れて充填している。また床面から0.30m位の高さまでの壁面を、積み重ねた赤煉瓦が見えないように漆喰で厚く上塗りしている。また保管庫と考えられる室内についても赤煉瓦が3段程度積まれた状態で検出し、その高さまでは漆喰が厚塗りされていた。焚口部の北側には、高さ0.3m、幅0.5m程度の2段の階段が認められ、表面には漆喰が上塗りされている。赤煉瓦自体の法量は、長さ0.23m、幅0.11m、高さ0.6mである。上部構造は破損していたため、全容は確認できなかったが、煙道部や焼成部の上には赤煉瓦積みの釜場や煙突などがあった可能性が考えられる。遺物は国産磁器の碗・皿・角皿、国産陶器の碗・甕・搦鉢などが出土し、19世紀後半の時期が考えられる。

SK002



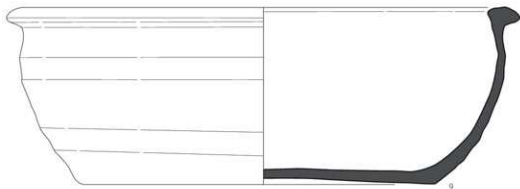
SK004



0 10cm

0 10cm

※9は 1/4



第 83 図 第 49 次調査区出土遺物実測図 1 (1/3・1/4)

SK007



10

SK039

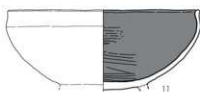


15

SK098

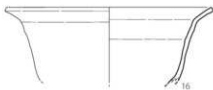


SK015



11

SK045



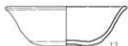
16

SK133



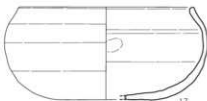
19

SK022



12

SK061



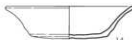
17

SK026



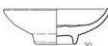
13

SK030



14

SD001



20



21



23



24

0 10cm

0 10cm

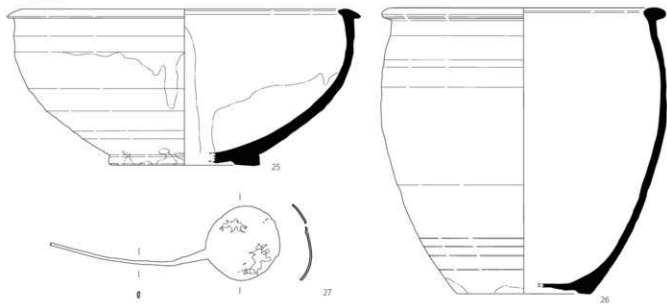
※20～24は1/3



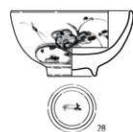
22

第84図 第49次調査区出土遺物実測図2(1/3・1/4)

SD001



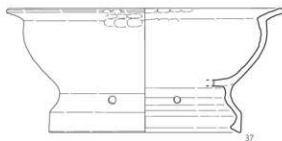
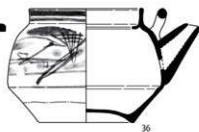
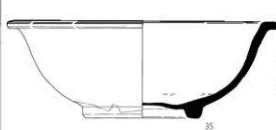
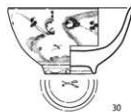
SD003



SD005

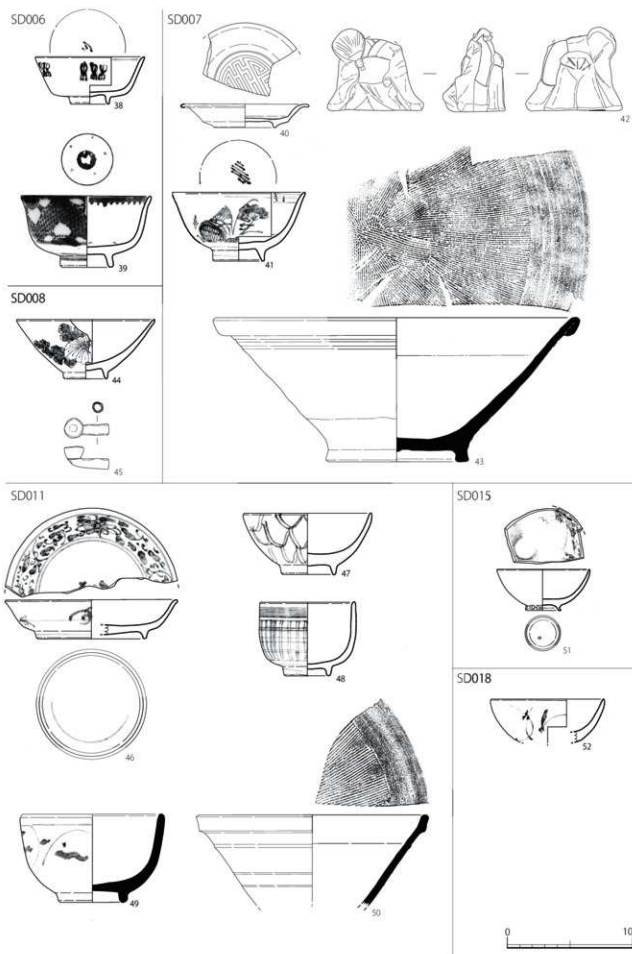


SD004



市37誌 1/4

第 85 図 第 49 次調査区出土遺物実測図 3 (1/3・1/4)



第 86 図 第 49 次調査区出土遺物実測図 4 (1/3)

3. 小結

本調査地は、区画整理事業が行われる前から、酒屋が営まれていた場所にあたる。今回の調査では、調査区の東半分の広範囲にわたって、19世紀前半から後半にかけての酒造遺構群が確認されている。検出した遺構は、精米された米の洗い作業を行う洗い場跡2基と洗い場に併設された排水溝跡2条、蒸米を行う煉瓦造りの釜場跡1基、しぼりを行う槽場（ふなば）跡1基である。各遺構から出土する遺物の量は少ないが、槽場跡SK002の遺構内から19世紀前半から中頃にかけての遺物が出土していることから、この段階には酒造りが行われていたものと考えられる。酒造遺構群に関連すると考えられる溝跡は、調査区の中央を南北方向に走る幅1.5m以上の溝跡5条、平面形状に展開する幅約0.5mの区画溝跡である。南北方向に走る溝跡6条については、溝同士が複雑に切り合っており、各溝から国産陶磁器・土師質土器・瓦質土器などの遺物が出土している。出土遺物の内容から、遺構の時期が最も古い溝が18世紀中頃、最も新しい溝で19世紀後半の段階で、継続的に改修が行われている。18世紀中頃段階の溝が認められることから、酒造りの開始時期が18世紀代まで遡る可能性が考えられる。掘立柱建物跡5棟については、SB005の柱穴から近世以降の磁器碗などが出土している。SB003やSB004の建物内には近現代の井戸跡が確認され、SB005についてはSX069の釜場跡との遺構配置状況から、SX069に伴う構造物であると考えられる。区画溝跡SD010については、深度0.10m前後の浅い溝跡であり、溝内から径0.1～0.2m大の礫石が多量に確認されていることから、建物の基礎跡である可能性が想定され、出土遺物の内容や他の溝跡を切っている状況などから、19世紀末以降の遺構であると思われる。

(12) 横尾遺跡第 52 次調査

1. 調査概要

本調査地点は、大分市大字横尾字寺ノ下に所在し、北隣りに第 21 次調査地点がある。遺構検出面の標高は、調査区西側で 32.40m 前後、東側で 32.00m 前後、西から東側にかけて緩やかに傾斜している。調査面積は 580 m²で、調査期間は平成 8 年 10 月 7 日に着手し、同年 12 月 18 日に終了した。調査の結果、主要遺構については、古代の粘土探掘坑 31 基、近世墓が 15 基、近世から近代にかけての溝跡 6 条、井戸跡 1 基、時期不詳の掘立柱建物跡 2 棟が検出された。

粘土探掘坑については調査区全体に分布がみられ、規模は径 1.5 ～ 2.5 m、検出面からの深度は 0.6m 前後を測るものが多い。遺構検出面から遺構内を 0.1 ～ 0.2m ほど掘削していくと、壁面に良質の白色粘土層が確認でき、この層が 0.4 ～ 0.5m 厚で堆積している。平面規模や深度が類似しているものが多いことから、粘土探掘を目的として掘っていると考えられる。出土した遺物の量は僅少であり、遺構時期の判別できる遺物が出土したのは SK016 のみで、10 世紀代の黒色土器 A 類の碗が出土している。

近世墓については調査区北側に分布が集中しており、一つの墓群を形成している。その内 ST056・ST067・ST069 は早稲を用いた墓で、桶内から成人人骨が出土している。一方の ST017 や ST045 の床面からは、曲げ物の痕跡が確認されているが、人骨は出土していない。

掘立柱建物跡については、調査区南西側で 2 棟確認している。SB001 は桁行 4 間 × 梁行 2 間以上の東西棟建物である。また SB002 は、南隣りの第 57 次調査地点の北側で確認された SB003 と整合する建物で、桁行 4 間 × 梁行 2 間の南北棟の建物である。2 棟の柱穴から遺物が出土していないが、柱穴が古代の粘土探掘坑を切っているため、中世以降に造営されたものと考えられる。

2. 遺構

井戸跡

SE050(第 88 図)

調査区南東側で確認された井戸跡である。平面形状は不整円形を呈し、長軸 2.02m、短軸 1.92 m、遺構検出面からの最大深度は 1.12m を測る。断面形状は、擂鉢状になっている。検出面から約 0.5 ～ 0.8m 掘り下げた段階で、径 0.05 ～ 0.15m 大の小礫石が多量に出土し、遺構内の外周を平面円形状に堆積しているのを確認した。石組の井戸として考えた場合、検出した礫石群の径が小さいことから、井戸枠部材が確認されていないが、おそらく木枠の井戸で、この礫石は井戸を築造する際に裏込めとして用いられたものと考えられる。土層の観察により第 3 層からは焼土のブロックが確認され、井戸を廃絶する際の埋井祭などの祭祀の痕跡だと考えられる。遺構内から染付碗や肥前産の染付皿、国産陶器の碗、瓦質土器の火鉢などが出土しており、19 世紀代の時期が考えられる。

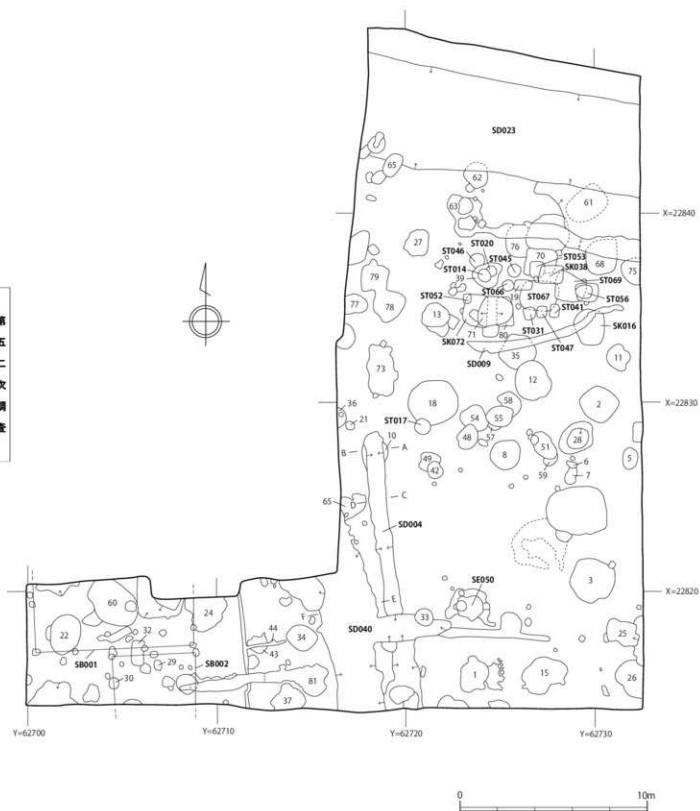
近世墓

ST014(第 89 図)

調査区北側の近世墓群域で確認され、切り合い関係は ST020 を切っている。平面形状は楕円形を呈し、長軸 0.66m、短軸 0.5 + αm、検出面からの最大深度は 0.30m を測る。断面形状は、丸底状になっている。土坑内から棺材や人骨は出土していないが、床面から肥前産の染付紅猪口や土師器の環が出土している。出土遺物から埋葬時期は、18 世紀後半から 19 世紀前半頃と考えられる。

ST017(第 90 図)

調査区中央で確認された木製の早稲を用いた墓である。平面形状は楕円形を呈し、長軸 0.95m、短軸 0.83m、

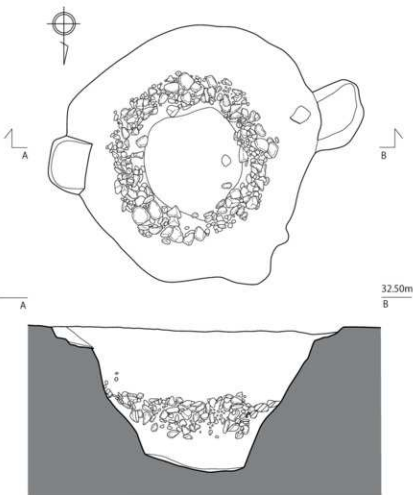


第 87 图 第 52 次調査区遺構配置図 (1/200)

検出面からの最大深度は 0.63m を測る。断面形状は、方形状になっており、壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。土坑内から人骨は出土していないが、床面から桶の底板を確認し、底板径で 0.47m を測る。土層の観察から、早桶の側板の立ち上がりを確認している。埋葬時期が判別できる遺物は出土していない。

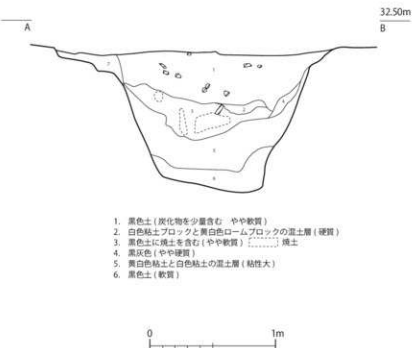
ST020(第 89 図)

調査区北側の近世墓群域で確認された土坑墓で、切り合い関係は ST014 に切られている。平面形状は楕円形を呈し、長軸 $0.5 + a$ m、短軸 0.45m、検出面からの最大深度は 0.35m を測る。断面形状は、楕円状になっている。土坑内から棺材や人骨は出土していないが、床面から土師器の坏や小皿が出土している。また計 4 枚の古銭が出土しており、「□永通□」「□永□宝」などの銭貨名が認められることから、「寛永通宝」であると思われる。出土遺物から埋葬時期は、18 世紀中頃と考えられる。



ST041(第 90 図)

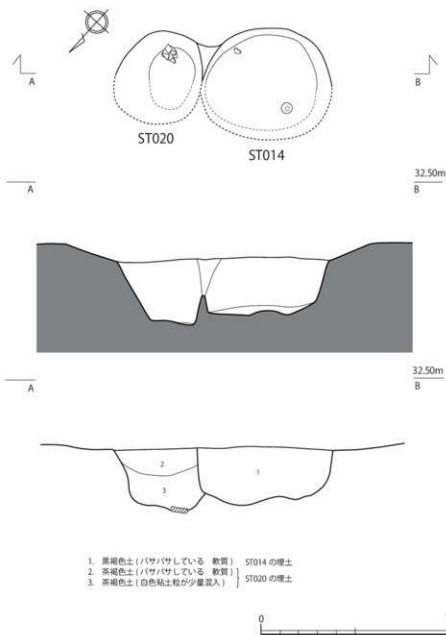
調査区北側の近世墓群域で確認された土坑墓で、ST047 の東隣りに位置している。平面形状は隅丸長方形を呈し、長軸 0.75m、短軸 0.55m、検出面からの最大深度は 0.46m を測る。断面形状は、壁面がほぼ垂直に立ち上がっていて、床面には径 0.45m、深度 0.10m の平面円形状の掘り込みが認められる。その掘り込み部分から、早桶の底板の一部と考えられる木製品が出土し、その板の上から「寛永通宝」の銅銭 2 枚が出土している。銅銭の文字の特徴から 18 世紀代に鋳造されたものと考えられる。人骨は検出していない。



ST045(第 91 図)

調査区北側の近世墓群域で確認された

第 88 図 SE050 遺構実測図 (1/30)



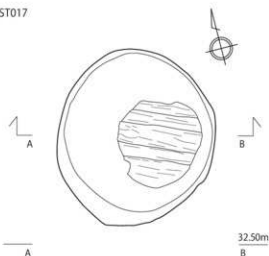
第 89 図 ST014・ST020 遺構実測図 (1/20)

墓で、ST020 の東隣りに位置している。平面形状は円形を呈し、長軸 0.84m、短軸 0.81m、検出面からの最大深度は 0.38m を測る。断面形状は、掘鉢状になっており、北側にテラスが一段認められる。テラス部分から土師器の小皿が口縁部を上にして置かれた状態で出土している。また床面からは径 0.28m の円形状に巡る曲げ物の木質の痕跡を確認した。曲げ物の木質痕の直上から古銭の寛永通宝が 6 枚出土しているが、人骨は検出していない。出土遺物から、18 世紀前半に埋葬されたものと考えられる。

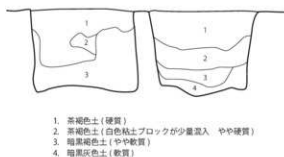
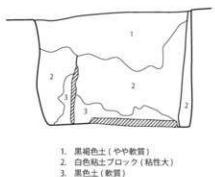
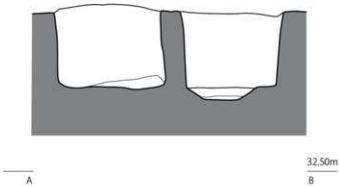
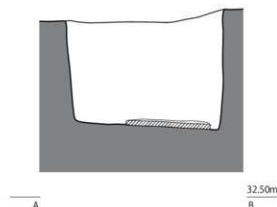
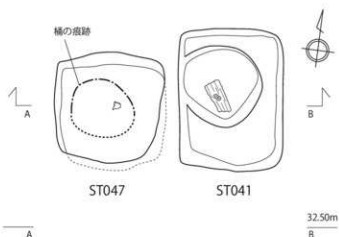
ST046(第 91 図)

調査区北側の近世墓域群で検出された土坑墓で、ST014 の北側に位置している。平面形状は円形を呈し、長軸 0.86m、短軸 0.6 + a m、検出面からの最大深度は 0.42m を測る。断面形状は、掘鉢状になっており、北から西側にかけて、中位にテラスを一段有している。棺材や人骨などは出土していないが、床面の北側で土師器小皿が伏した状態で出土している。出土遺物から 17 世紀以降に埋葬されたものと考えられる。

ST017



ST041・ST047



1. 黒褐色土 (やや軟質)
2. 白色粘土ブロック (粘性大)
3. 黒色土 (軟質)

1. 茶褐色土 (硬質)
2. 茶褐色土 (白色粘土ブロックが少量混入、やや硬質)
3. 暗黒褐色土 (やや軟質)
4. 暗黒灰色土 (軟質)



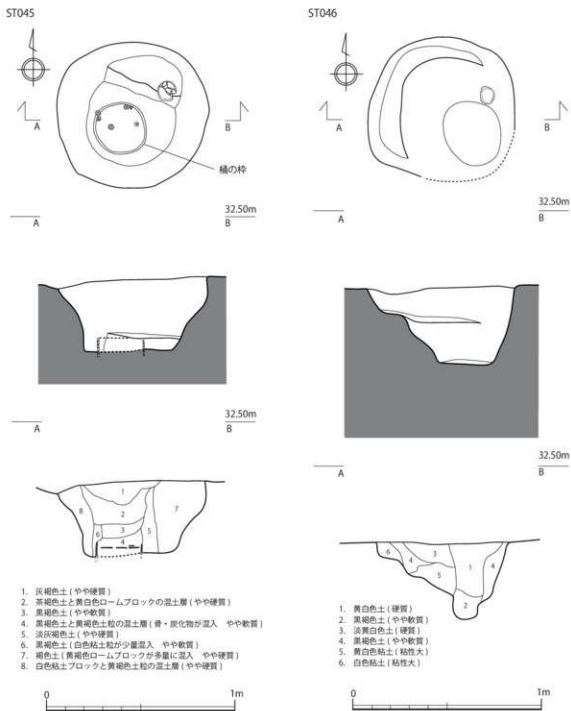
第 90 図 ST017・ST041・ST047 遺構実測図 (1/20)

ST047(第 90 図)

調査区北側の近世墓群で検出された墓で、ST041 の西隣りに位置している。平面形状は隅丸方形を呈し、長軸 0.60m、短軸 0.55m、検出面からの最大深度は 0.45m を測る。断面形状は、壁面が垂直に立ち上がっており、東側と南側は若干オーバーハングしている。床面から径 0.33m の曲げ物の木質の痕跡を確認した。人骨は出土していない。遺物も土師器の小破片が出土したのみで、明確な埋葬時期は不明である。

ST052(第 92 図)

調査区北側の近世墓群で検出された土坑墓で、ST014 の南隣りに位置している。平面形状は隅丸長方形を呈し、長軸 0.88m、短軸 0.38m、検出面からの最大深度は 0.23m を測る。断面形状は、緩い逆台形状になっている。



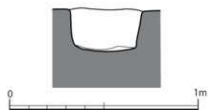
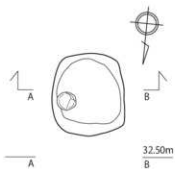
第 91 図 ST045・ST046 遺構実測図 (1/20)

床面の東側から土師器の小皿が伏した状態で出土した。遺構内から棺材や人骨は確認されていない。埋葬時期は、土師器小皿から 18 世紀中頃と考えられる。

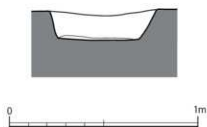
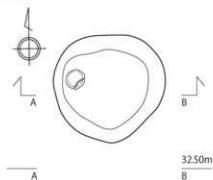
ST053(第 92 図)

調査区北側の近世墓群で検出された土坑墓で、東隣りに位置している SK038 に切られている。平面形状は不整楕円形を呈し、長軸 1.18m、短軸 0.7 + αm、検出面からの最大深度は 0.52m を測る。断面形状は、逆台形になっており、南側の中位に一段のテラスを有している。遺構検出段階で計 0.1 ~ 0.2m 大の礫石が 4 点検出している。遺構内から人骨や棺材、また埋葬時期が判別できるような遺物は出土していない。

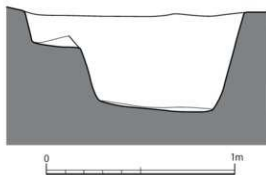
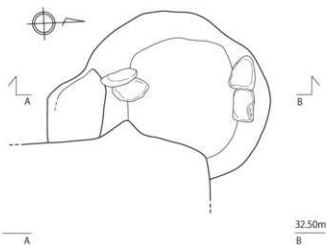
ST052



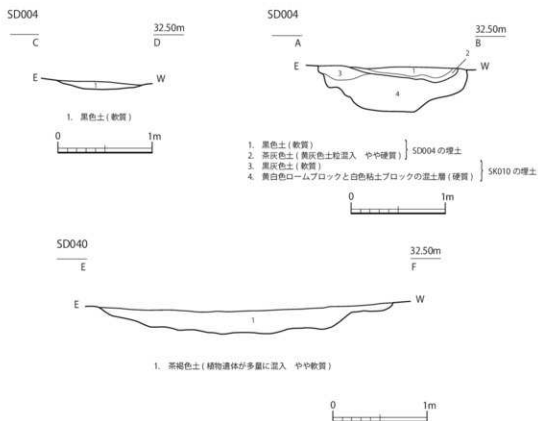
ST066



ST053



第 92 図 ST052・ST053・ST066 遺構実測図 (1/20)



第 93 図 SD004・SD040 土層図 (1/40)

ST066(第 92 図)

調査区北側の近世墓群で検出された土坑墓で、ST045 の南側に位置している。平面形状は楕円形を呈し、長軸 0.59m、短軸 0.56m、検出面からの最大深度は 0.16m を測る。断面形状は、逆台形に窪んでいる。床面の西側から土師器の小皿が、口縁部を上にして安置した状態で出土している。遺構内からは人骨や棺材出土していない。出土した土師器小皿から、埋葬時期は 18 世紀前半頃と考えられる。

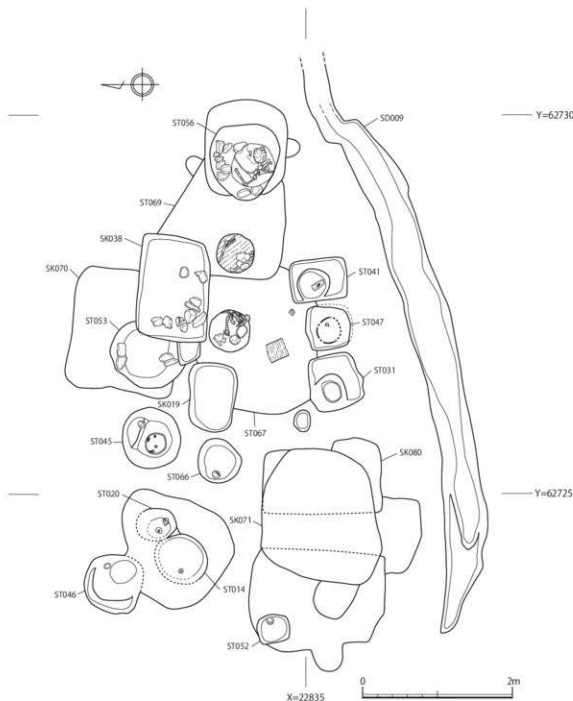
溝跡

SD004(第 93 図)

調査南側で検出した、南北方向に走る溝跡で、南端は調査区外に延びている。切り合い関係は、SK010 を切り、SD040 に切られている。遺構の規模は、長さ 15 + αm、最大幅 0.95 m、検出面からの最大深度は 0.13m を測る。ほぼ直線状に走り、主軸方向は N - 8° - W を指向している。断面形状は、浅い皿状に窪んでいる。土層の観察から、流水の痕跡は確認できなかった。溝内からは近世の備前産陶器壺の破片が出土している。

SD040(第 93 図)

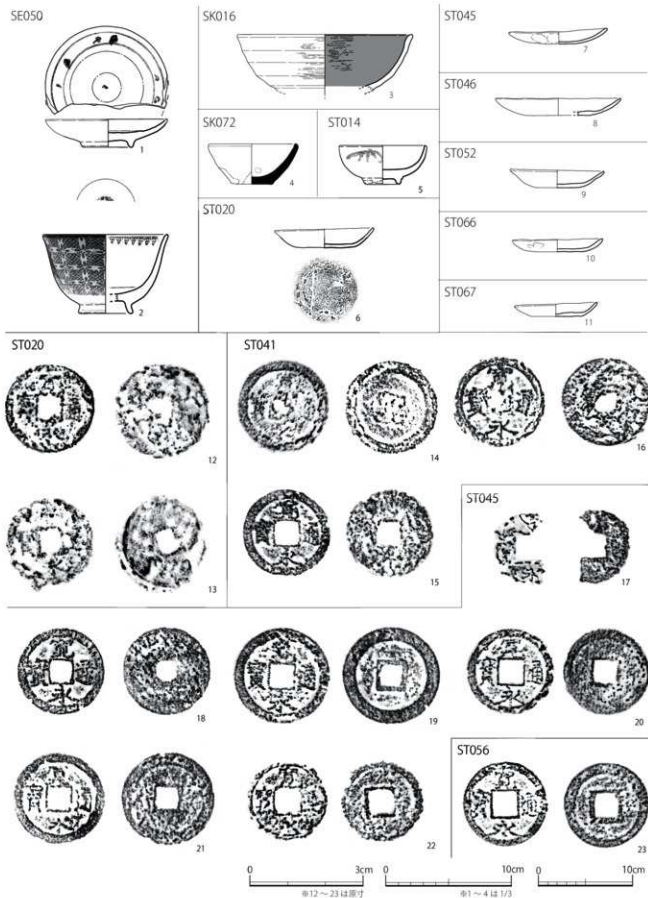
調査区南側で検出した、SD004 の西隣りを南北方向に流れる溝跡である。南北両端ともに調査区外に延びており、溝の東側では一部東西方向に短い溝が展開し、その部分で SD004 を切っている。溝の最大幅は 3.14m で、深度は 0.23m を測る。溝は浅い皿状に窪んでいる。埋土は、やや軟質の茶褐色土層で、植物遺体が多量に混入している。溝内からは肥前産の型紙摺りの染付碗や染付小坏、色絵碗などが出土し、遺構の時期は 19 世紀中頃から後半頃と考えられる。



第 94 図 調査区北側近世墓地群遺構配置図 (1/50)

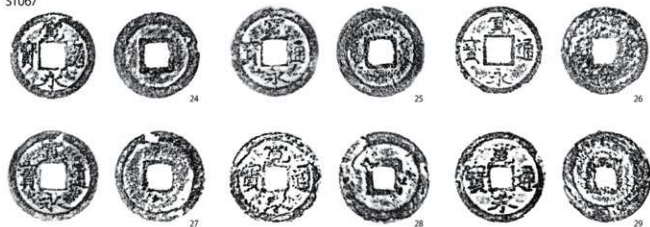
3. 小結

今回の調査で注目されるのは、調査区北側で確認された近世墓群である。調査区北側近世墓地群遺構配置図 (第 94 図) を参照すると 13 基の近世墓が集中して分布し、墓群の南側には、区画溝と考えられる SD009 が確認されている。また SD009 の南側でも ST017 や ST054 の土坑墓などが検出されている。埋葬の開始時期については、ST046 から 17 世紀代の土師器小皿が出土し、それ以外の近世墓からは 18 世紀以降の遺物が出土している。埋葬の形式は、基本的には木製品の残存状況が良好ではないため、棺材を確認できなかった土坑が多いが、大きく 2 種に分類される。一つは、径 0.55m 大の木製の円形棺桶 (早桶) であり、もう一つは径 0.30m 前後の曲げ物製蔵骨器を埋置したものである。早桶からは、副葬品として 18 世紀代を中心とする土師器の皿や寛永通宝や木製品の櫛などが出土している。ST056・ST067・ST069 からは人骨が出土しており、遺体は無処理遺体で、座葬人骨であり、人骨の各部位が良好に遺存していた。一方の曲げ物製蔵骨器の方は、ST017・ST031・ST045 で確



第 95 図 第 52 次調査区出土遺物実測図 1 (1/1・1/3・1/4)

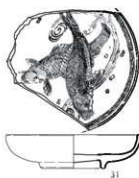
ST067



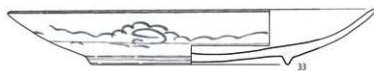
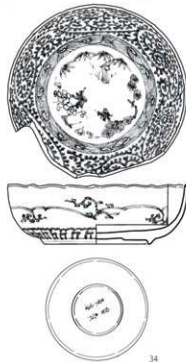
SD004



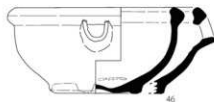
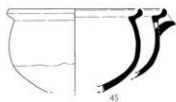
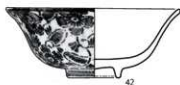
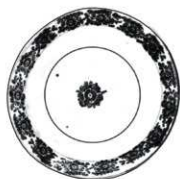
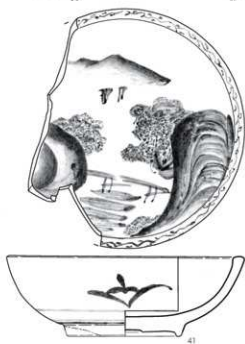
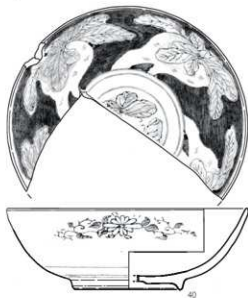
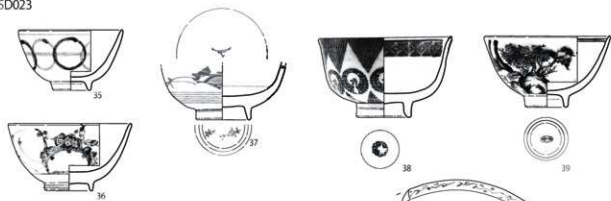
SD023



第
五
次
調
査
第
三
章

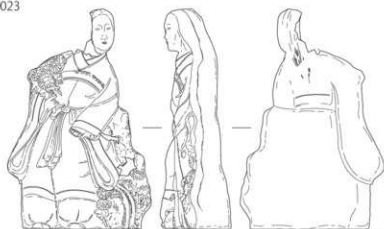


第 96 図 第 52 次調査区出土遺物実測図 2 (1/1・1/3)



第 97 图 第 52 次調査区出土遺物実測図 3(1/3)

SD023

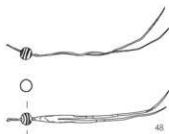


47

SD040



49



48



50



51



52



53



54



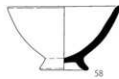
55



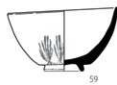
56



57



58



59



48は 1/6

第 98 図 第 52 次調査区出土遺物実測図 4 (1/3・1/6)

認されている。曲げ物自体の木質がほとんど残っておらず、その痕跡を留めているに過ぎない。副葬品には 18 世紀代の土師器の小皿や「寛永通宝」が出土しているが、人骨については残存しておらず、わずかに歯が残っている程度であった。早稲と曲げ物の規模や人骨の残存状態などから、前者が成人用であり、後者が幼児などを含む子供用であったと考えられる。また一定区画内に埋葬場所が限定されていることから、同一血縁関係による墓地であると考えられる。

(13) 横尾遺跡第53次調査

1. 調査概要

本調査地点は、大分市大字横尾字寺ノ下に所在し、南東側に第45次調査地点、北西側に第58次調査地点があり、両者に挟まれた地点に位置している。調査面積は1,050㎡で、発掘調査は平成8年12月10日に開始し、平成9年3月31日の期間で終了した。遺構検出面の標高は、北側端と南側端がともに32.60m前後の平坦地である。遺構検出面は黄色粘質土層である。遺構内を0.1～0.2m程度掘り下げると、遺構の壁面から白色粘土層が確認できている。検出した遺構は、古代の粘土探掘坑52基、近世から近代にかけての土坑16基、井戸跡4基、早稲墓1基、埋葬3基、溝・暗渠跡2条、時期不明の掘立柱建物跡4棟を確認した。

粘土探掘坑は調査区全体に分布しているが、東側にいくにつれて、遺構の密度が低くなっている。出土遺物は少なく、8世紀後半から10世紀にかけての土師器の坏d・坏e・皿aや黒色土器A類の轆cなどが出土している。

近世の遺構については、調査区中央の西隅で検出したSK011が径0.9m大の早稲を埋設した土坑墓で、棺内から直径5mmの数珠玉が数点出土し、棺外から18世紀代の土師器小皿が2点出土している。SX075は、調査区中央の西側で確認された石組遺構である。上面には径0.2～0.3m大の円礫が円形に取り巻き、その下部には直径1.0m、高さ0.6mの大きさに幅0.2mの板が組み込まれた遺構である。遺構の形状から水溜めとして使用されたものと考えられる。遺構内から近世の磁器の破片、瓦質土器破片、平瓦片などが出土している。また調査区南側で確認したSK115やSK159からは、口縁部から胴部上位が破損した土師質土器の埋裏が直立した状態で確認され、SK159から肥前産磁器の染付皿や唐津産陶器の碗が出土し、17世紀後半から18世紀後半の時期が考えられる。

2. 遺構

掘立柱建物跡

SB001(第100図)

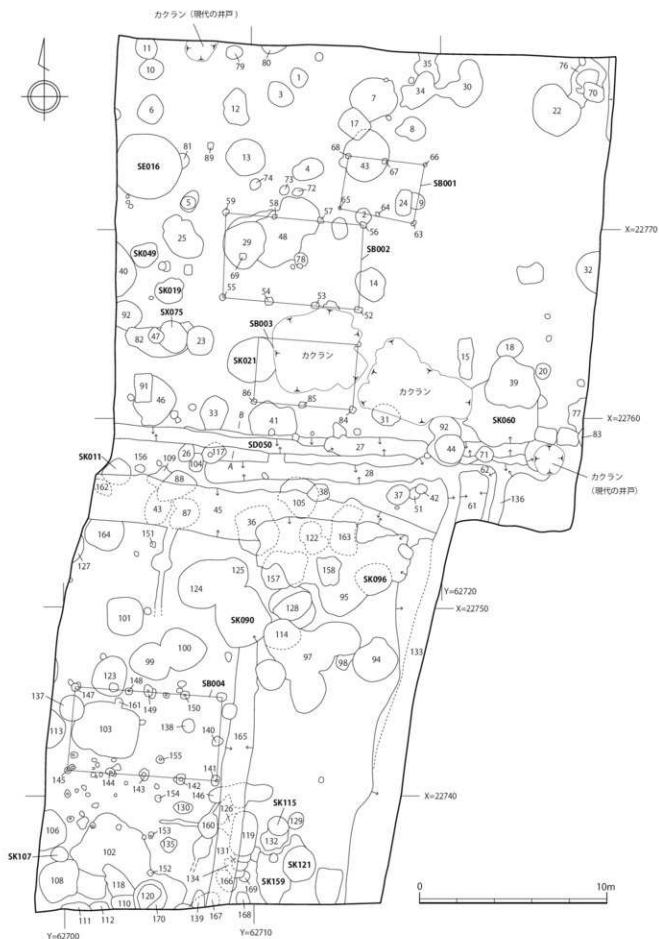
調査区北側で確認された、桁行2間×梁行1間、身舎面積12.35㎡の掘立柱建物跡である。SB001の柱穴が、粘土探掘坑と考えられるSK043を切っている。建物は東西棟で、梁行の主軸方向は、N-82°-Wを指向している。柱穴の平面形状は隅丸方形もしくは楕円形を呈し、径0.15～0.31m、検出面からの深度は0.07～0.19mを測る。柱穴の埋土は、やや軟質の黒褐色土層で、柱痕などは確認できなかった。柱穴柱間は、桁行が2.00～2.08m、梁行が2.94～3.10mである。柱穴から遺物は出土していない。

SB002(第101図)

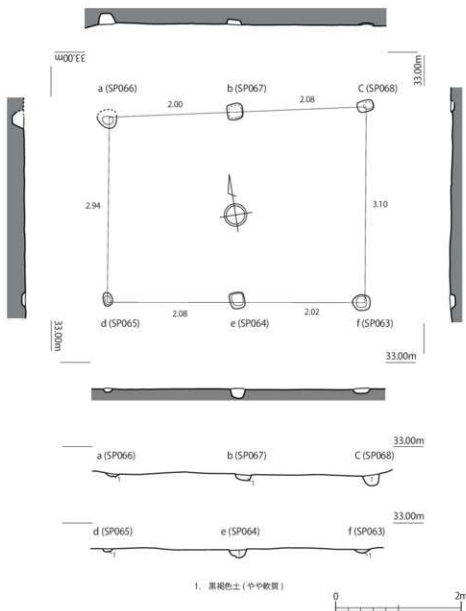
調査区北側でSB001の南西隣りで確認された、桁行3間×梁行1間、身舎面積33.44㎡を測る掘立柱建物跡である。SB002の柱穴が、粘土探掘坑と考えられるSK048を切っている。建物は東西棟で、梁行の主軸方向は、N-5°-Eを指向している。柱穴の平面形状は隅丸方形を呈し、径0.29～0.42m、検出面からの深度は0.13～0.28mを測る。柱穴柱間は、桁行が2.26～2.50m、梁行は4.54～4.66mである。遺構検出時及び土層の観察時に、柱穴b～fで柱痕を確認した。柱穴から遺物は出土していない。

SB003(第102図)

調査区中央でSB002の南隣りで検出された掘立柱建物跡である。北側の柱穴が後世の掘乱によって削平されているため、明確な建物の規模は不明であるが、桁行2間×梁行1間で、身舎面積約18㎡の建物であると考えられる。SB003の柱穴と粘土探掘坑と考えられるSK021との切り合い関係が認められるが、新旧関係については不明である。建物は東西棟で、梁行の主軸方向は、N-5°-Eを指向している。柱穴の平面形状は方形を呈し、径0.22～0.34m、検出面からの深度は0.10～0.24mを測る。柱穴柱間は、桁行の南側で2.50～2.66m、



第 99 図 第 53 次調査区遠構配置図 (1/200)



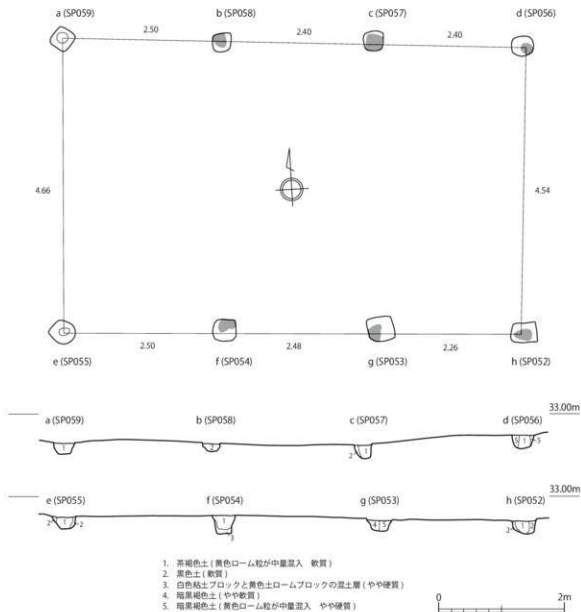
第 100 図 SB001 遺構実測図 (1/60)

梁行の東側で 3.46m である。柱穴から遺物は出土しなかった。

SB004(第 103 図)

調査区南側で検出した、桁行 4 間 × 梁行 2 間、身舎面積 34.43 m² の掘立柱建物跡である。西側の梁行については、東側で確認された柱穴 f に対応する柱穴が確認されていないため、調査区外に建物が展開し、さらに大型の建物になる可能性が考えられる。切り合い関係は、建物は東西棟で、梁行の主軸方向は、N - 2° - E を指向している。柱穴の平面形状は方形を呈しているものが多く、径 0.28 ~ 0.83m、検出面からの深度は 0.18 ~ 0.38m を測る。土層の観察から、柱穴 a・c・d・h・i・k で柱痕を確認している。柱穴柱間は、桁行が 1.80 ~ 2.24m、梁行が 1.94 ~ 2.24m である。柱穴から土師器や瓦質土器、陶器の小破片が出土したのみで、建物の時期の判断は困難である。

井戸跡



第 101 図 SB002 遺構実測図 (1/60)

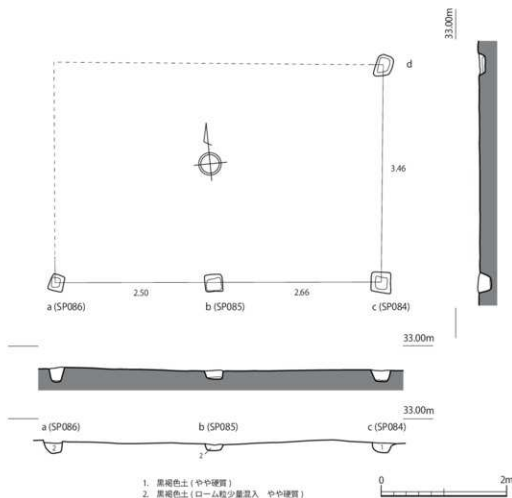
SE016(第 104 図)

調査区の北西隅で検出された井戸跡である。平面形状は隅丸方形を呈し、長軸 3.4 + a m、短軸 3.04 m を測る。深度については、掘削作業の安全を考慮して、検出面から 2.2 m 地点で掘削を停止している。断面形状は、上位が揺鉢状になっており、下位は壁面が垂直気味に落ちている。遺構の中心から下位にかけて、井戸に使用されたと考えられる木製の曲げ物や板材や桟木、竹筴などが出土している。土層の観察より、上層の方で複雑に堆積している状況が認められることから、人為的に埋没したものと考えられる。埋土中から肥前産磁器の染付筒丸形碗・小坏や国産陶器揺鉢などが出土しており、遺構の時期は 18 世紀末から 19 世紀中頃と考えられる。

土坑

SK019(第 105 図)

調査区北側の SB002 の西隣りで検出された土坑である。平面形状は不整楕円形を呈し、長軸 1.47 m、短軸 1.24 m、検出面からの最大深度は 0.53 m を測る。断面形状は、床面や壁面の凹凸の起伏が顕著で、中央にテラスがあり、



第 102 図 SB003 遺構実測図 (1/60)

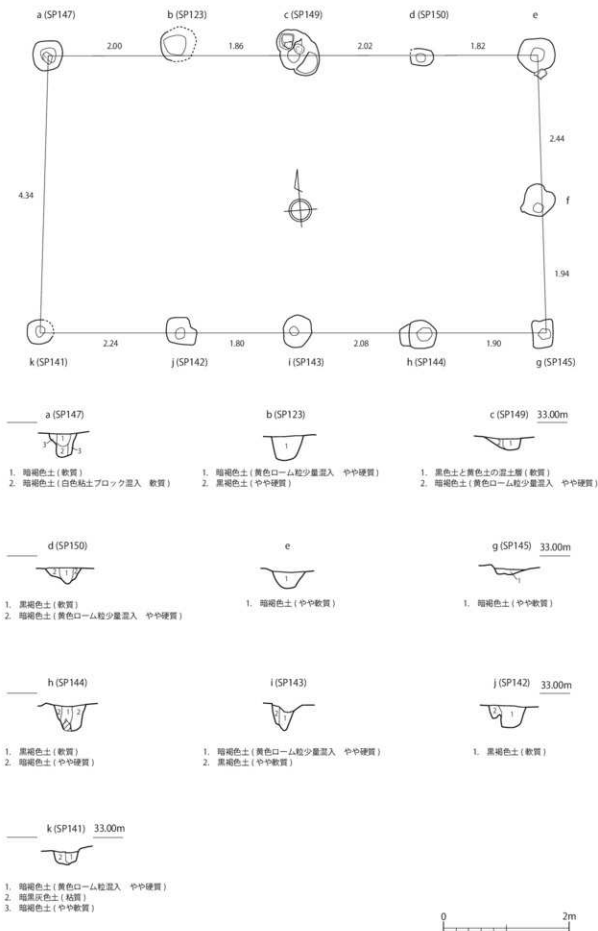
その周りを 3 箇所 0.1 ～ 0.2 m 程度大きく掘り込んでいる。埋土は、上層が黒褐色土と茶色土のやや軟質の混土層で、下層がやや硬質の茶褐色土層である。上層、下層ともに地山のロームブロックが混入しており、人為的に埋没したものと考えられる。遺構内から土師器の坏 d が出土していることから、遺構の時期は 8 世紀後半から 9 世紀前半頃と考えられる。

SK021(第 106 図)

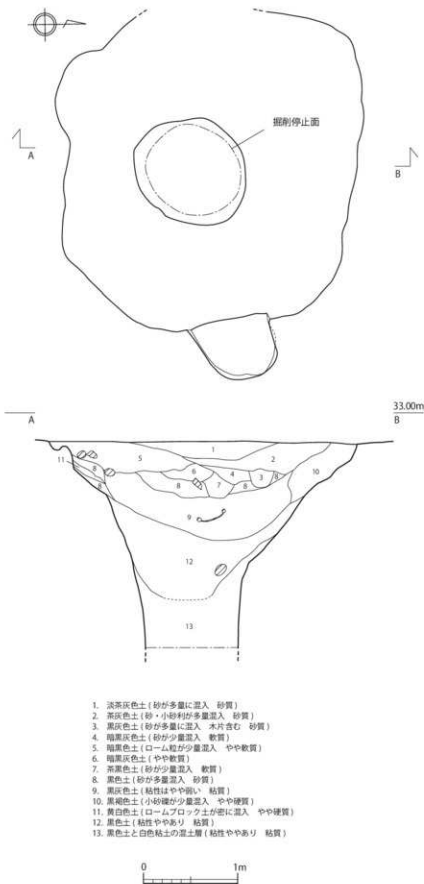
調査区中央で検出された土坑である。SB003 の柱穴との切り合い関係が認められるが、新旧関係については不明である。平面形状は不整楕円形を呈し、長軸 2.69 m、短軸 2.43 m、検出面からの最大深度は 0.46 m を測る。断面形状は、床面の凹凸の起伏が顕著で、10 箇所程度ピット状に掘り込んでいる痕跡が認められる。埋土は上層が黒褐色のやや軟質土層で、下層が黄色のロームブロックと白色粘土ブロックの混土層である。下層については人為的に埋没したものと考えられる。遺構内から 10 世紀前半頃の土師器皿 a が出土している。

SK049(第 107 図)

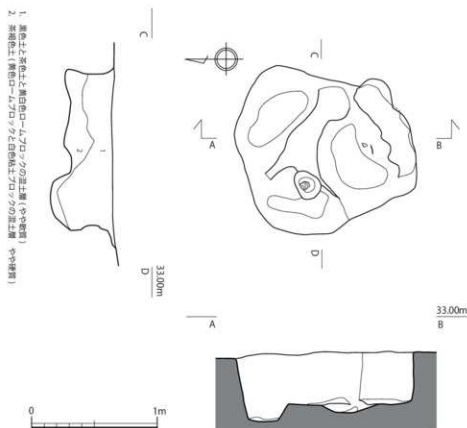
調査区北西側で、SK019 の南隣りで検出された土坑である。平面形状は不整楕円形を呈し、長軸 1.81 m、短軸 1.45 m、検出面からの最大深度は 0.57 m を測る。断面形状は、床面や壁面の凹凸の起伏が顕著である。土層の観察から、第 3 層については、地山のロームブロックの混入が顕著であることから、人為的に埋没したものと考えられる。第 1・2 層については、ロームブロックの混入が認められないことから、自然に埋没したもの



第 103 図 SB004 遺構実測図 (1/60)



第 104 図 SE016 遺構実測図 (1/40)



第 105 図 SK019 遺構実測図 (1/30)

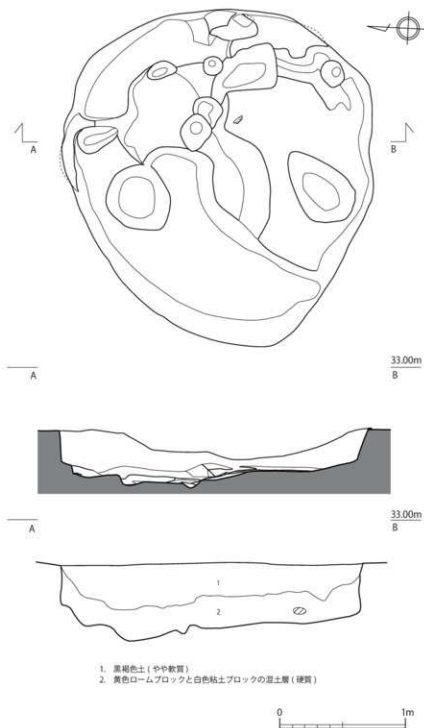
考えられる。遺構の中央部の床面直上に土師器杯 e が直立した状態で出土した。出土遺物から、遺構の時期は 9 世紀中頃から 10 世紀代頃と考えられる。

SK090(第 108 図)

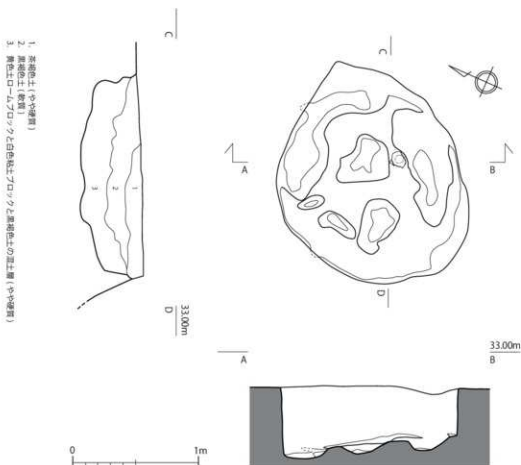
調査区の中央で検出された大型の土坑である。切り合い関係は SK090 が SD165 を切り、SK114 が切っている。平面形状は不整楕円形を呈し、長軸 5.28m、短軸 3.28m、検出面からの最大深度は 0.92m を測る。断面形状は、床面や壁面の凹凸の起伏が顕著である。土層の観察から第 2 ～ 4 層については、地山のロームブロックの混入が顕著であることから、人為的に埋没したものと考えられるが、第 1 層については、地山のロームブロックが混入していないことから自然に埋没した可能性も考えられる。遺構内からは、土師器杯や黒色土器 A 類の椀 c などが出土している。出土遺物から、遺構の時期は 10 世紀後半代と考えられる。

SK096(第 109 図)

調査区の中央部で確認された土坑である。SK095 との切り合い関係が認められるが、新旧関係については不明である。平面形状は不整楕円形を呈し、長軸 1.7 + α m、短軸 1.64m、検出面からの最大深度は 0.79m を測る。遺構の北側下位から黒色土器 A 類の椀 c が横倒れになった状態で出土した。土層の観察から、上層の第 1 層がやや軟質の茶褐色土層で、下層の第 2 層が黄色ロームブロックと白色ロームブロック土と黒色土の混成層であることから、下層は人為的に埋没したものと考えられる。出土遺物から遺構の時期は 10 世紀中頃から後半代と考えられる。



第 106 図 SK021 遺構実測図 (1/30)



第 107 図 SK049 遺構実測図 (1/30)

SK121(第 110 図)

調査区の南側で確認された土坑である。SK159 との切り合い関係が認められ、SK121 が SK159 を切っている。平面形状は楕円形を呈し、長軸 2.11m、短軸 1.98m、検出面からの最大深度は 0.72m を測る。断面形状は、掘鉢状になっている。口縁部から胴部上位部分が欠損した土師質土器の埋甕が直立した状態で出土した。土層の観察から、土坑の掘削終了後に、土坑内に第 3・4 層の土を入れ、その上に埋甕を安置していると考えられるが、第 3・4 層に粘土などの混入は認められなかった。遺構内からの出土遺物は、高取焼と考えられる陶器碗が出土しており、遺構の時期は 18 世紀以降と考えられる。

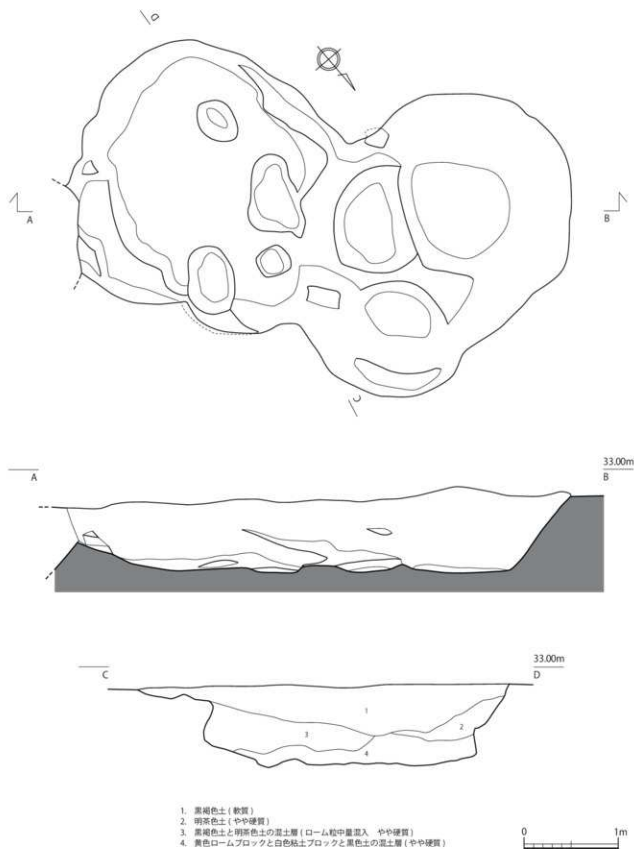
溝跡

SD050(第 111 図)

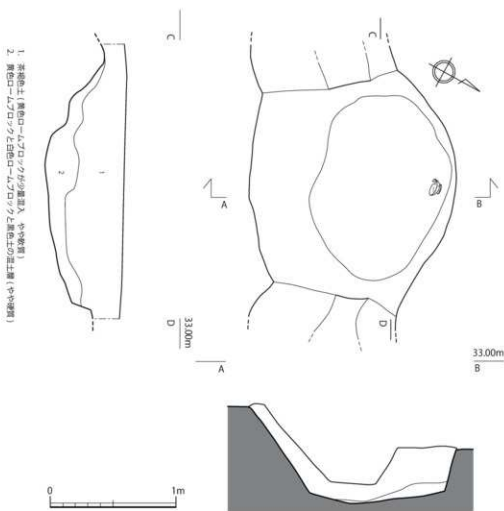
調査区の中央を東西方向に走る溝である。東側で SD027 に切られている。溝幅は 0.98 m、検出面からの最大深度は 0.24m である。溝の主軸方向は、N - 85° - W である。埋土は、上層が黄白色粘土層で、下層が暗黒灰色軟質土層である。溝内からの出土遺物は、肥前産磁器の染付碗、瀬戸美濃産の白磁皿などが出土しており、遺構の時期は 19 世紀中頃から近代の時期が考えられる。

3. 小結

粘土採掘坑については、調査区全体に分布しているが、東側に向かって次第に遺構の密度が低くなっており、本調査地点の南東隣りの第 45 次調査地点や、さらに東側に位置している 16 次調査地点から粘土採掘坑が確認



第 108 図 SK090 遺構実測図 (1/40)

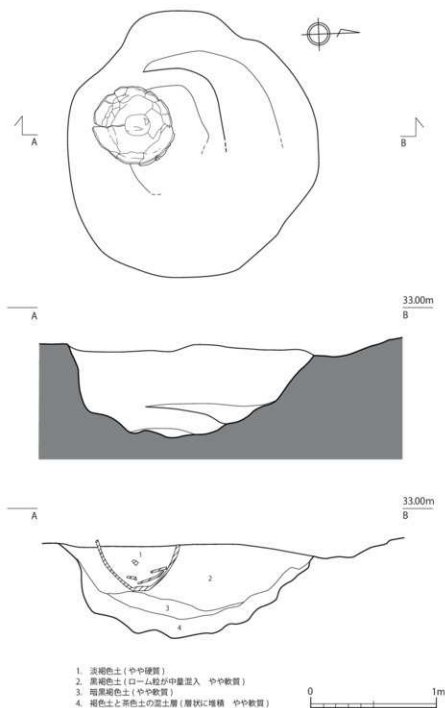


第 109 図 SK096 遺構実測図 (1/30)

されていないことなどから、今回の調査で粘土採掘坑の分布範囲の南東限を確認できたと考えられる。遺構内からの遺物出土量は少ないが、8 世紀後半から 9 世紀代にかけての土師器の坏 d・坏 e・甕 a が出土した SK019・SK021・SK049 の 3 基が調査区北西側で確認されており、10 世紀代の黒色土器 A 類の碗 c が出土した SK090 や SK096 の 2 基が調査区の中央からやや南側で確認されている。このことから広範囲にわたる採掘範囲内の採掘地点を移動しながら、比較的長期にわたって粘土採掘が行われていたものと考えられる。

掘立柱建物跡については、4 棟を検出したが、SB004 の柱穴から土師器や瓦質土器などの小破片が出土したのみで、明確な築造時期の判断は困難である。ただ粘土採掘坑との切り合い関係を見ると、柱穴が粘土採掘坑を切っているものが多く認められることや、今回の調査で近世の遺構が多く認められること、また周辺の調査で、14～15 世紀以降の掘立柱建物跡が数棟確認されていることなどから、今回検出した 4 棟も 14 世紀から近世段階の建物であると考えられる。

近世の遺構については、万治三（1660）年に法雲寺が再興されていることから、寺に伴う墓地群や建物が検出されることが想定されたが、調査区中央の西側で 18 世紀代の早稲墓 1 基、調査区の南側からは 17 世紀後半から 18 世紀にかけて土師質土器を用いた埋蔵 3 基、19 世紀代の溝跡が 2 条確認されたのみで、遺構密度は低く、一般的な集落域と考えられる。



第 110 図 SK121 遺構実測図 (1/30)

33.00m
A
B

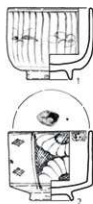


1. 黄白色粘土 (粘性大)
 中2層が堆積した後にその上面に5cm大の円礫を並べて
 その上に粘土を厚く貼る
 2. 暗黒灰色土 (軟質)

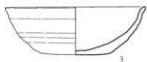
0 1m

第111図 SD050 土層図 (1/30)

SE016



SK019



SK021



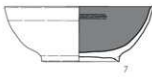
SK049



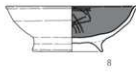
SK060



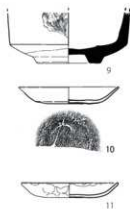
SK090



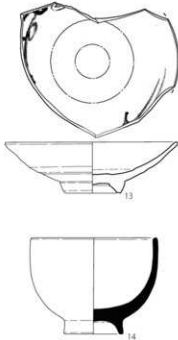
SK096



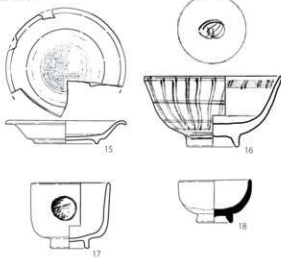
SK107



SK159



SD050



SK121



0 10cm

0 10cm
 中3・5・7・8・10・11は1/4

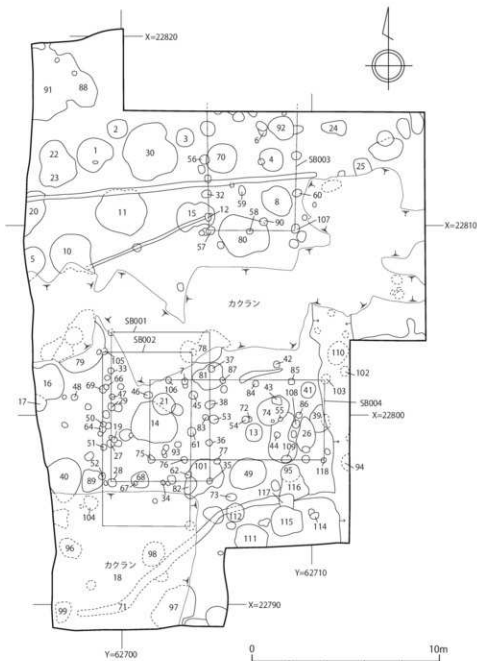
第112図 第53次調査区出土遺物実測図 (1/3・1/4)

(14) 横尾遺跡第57次調査

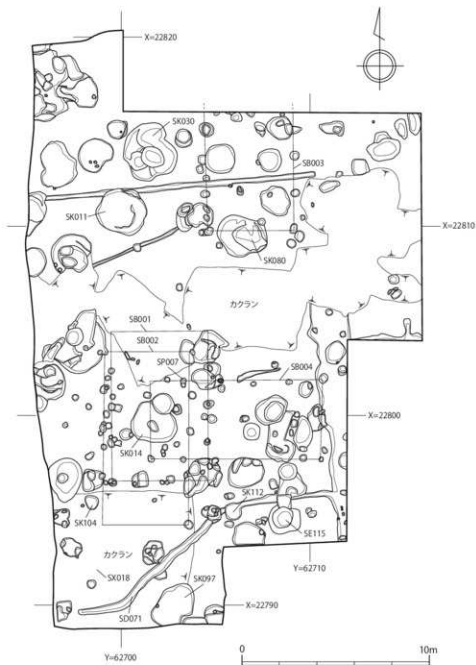
1. 調査概要

本調査地点は、大分市大字横尾字寺ノ下に所在し、本調査地点の北東側には第52次調査地点、南隣りには第58次調査地点、西隣りには1344年創建と伝わる法雲寺がある。調査面積は538㎡で、発掘調査は平成9年4月2日に開始し、同年6月6日の期間で終了した。遺構検出面の標高は、32.40m前後の平坦地である。調査の結果、古代の粘土採掘坑25基、中世の掘立柱建物跡1棟、井戸跡1基、近世の土坑2基、溝跡2条を確認している。その他に、時期不明の掘立柱建物跡3棟、用途不明の土坑を数基検出した。

粘土採掘坑については調査区全体に分布しており、その内4基の土坑から8世紀末から10世紀初頭の土師器



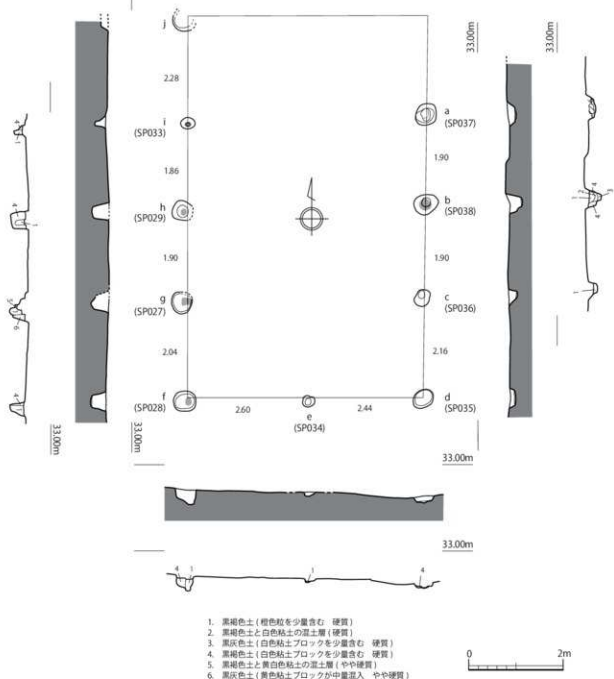
第113図 第57次調査区遺構配置図(1/200)



第 114 図 第 57 次調査区全体遺構図 (1/200)

の坏・蓋・甕などが出土している。遺構の形態については、平面形状が不整楕円形を呈しているものが多く、規模は径 1.0 ～ 2.5 m、遺構検出面からの深さは一定しており 0.4 ～ 0.6m 前後のものが多い。土層については、下層が地山のロームブロックを多く含むものが多い、人為的に埋没したものと考えられるものが多い。上層については、地山のロームブロックを含まないものが多いことから、自然に堆積して埋没したものが多いようである。

近世の土坑 2 基は、調査区の南側で確認し、土師質土器の埋藏が出土している。SK104 からは 18 世紀後半以降の国産陶器の陶胎染付碗や銅製のキセルが出土している。溝跡については、調査区南側で検出した SD071 が、東西方向に蛇行している溝である。溝幅は 0.2 ～ 0.5m、深度は 0.3m 前後を測る。溝内から 18 世紀代の肥前産のコンニャク印判の染付碗、国産陶器小碗などが出土している。

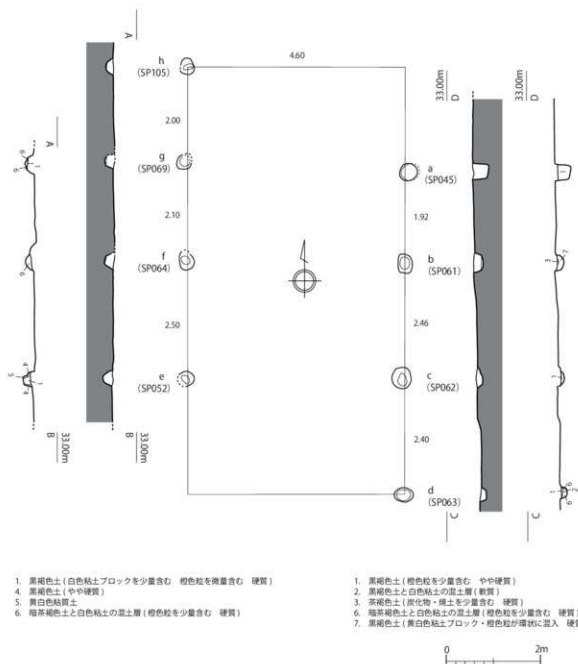


2. 遺構

掘立柱建物跡

SB001(第 115 図)

調査区中央で確認された、桁行 4 間 × 梁行 2 間、身舎面積 40.72 m² の大型の掘立柱建物跡である。建物の北側に関しては後世の攪乱によって大きく削平されている。建物は南北棟で、桁行の主軸方向は、N - 1° - E を指向している。柱穴の平面形状は楕円形もしくは隅丸方形を呈し、径 0.25 ~ 0.54m、検出面からの深度は 0.10 ~ 0.39m を測る。柱穴 5 基から柱痕を確認し、柱穴 1 基から底面に根石と考えられる径 0.3m 大の平石が置かれているのを確認した。柱穴柱間は、桁行が 1.86 ~ 2.28m、梁行が 2.44 ~ 2.60m である。柱穴から遺物は出土していない。



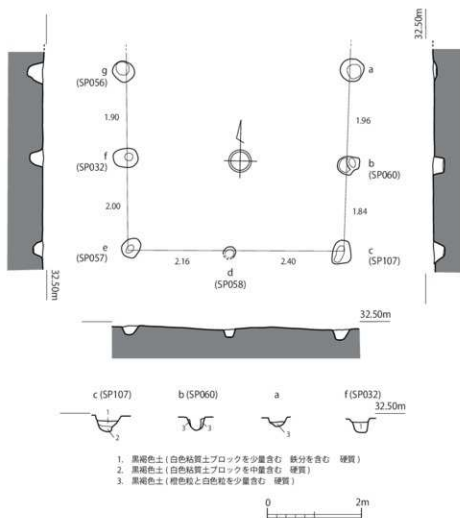
第 116 図 SB002 遺構実測図 (1/80)

SB002(第 116 図)

調査区中央で SB001 の建物跡と重なる位置に検出した掘立柱建物跡である。建物の北側と南側の柱穴は、後世の境乱によって削平されているため、明確な規模は不明であるが、確認できた規模は、桁行が 4 間で、梁行は 1 間もしくは 2 間、身舎面積 41.40 m² となり、SB001 と同規模である。建物は南北棟で、桁行の主軸方向は、N-2°-E を指向している。柱穴の平面形状は楕円形もしくは隅丸方形を呈し、径 0.28 ~ 0.45m、検出面からの深度は 0.14 ~ 0.35m を測る。土層の観察により、柱穴 2 基から柱痕を確認した。柱穴柱間は、桁行が 1.92 ~ 2.50m、梁行は 4.60m である。柱穴から土師器の小破片が出土しているが、築造時期の判断は困難である。

SB003(第 117 図)

調査区北側で検出された掘立柱建物跡である。柱穴の配置から建物の北側が調査区外に展開すると考えられ、明確な規模は不明であるが、桁行 2 間以上 × 梁行 2 間で、身舎面積 18 m² 以上の建物であると考えられる。切



第 117 図 SB003 遺構実測図 (1/80)

り合い関係はSB003の柱穴が粘土探掘坑と考えられるSK080を切っている。建物は南北棟で、桁行の主軸方向は、 $N-2^{\circ}-W$ を指向している。柱穴の平面形状は楕円形もしくは不整楕円形を呈し、径 $0.23 \sim 0.52\text{m}$ 、検出面からの深度は $0.08 \sim 0.33\text{m}$ を測る。柱穴柱間は、桁行が $1.84 \sim 2.00\text{m}$ 、梁行は $2.16 \sim 2.40\text{m}$ である。柱穴から遺物は出土しなかった。

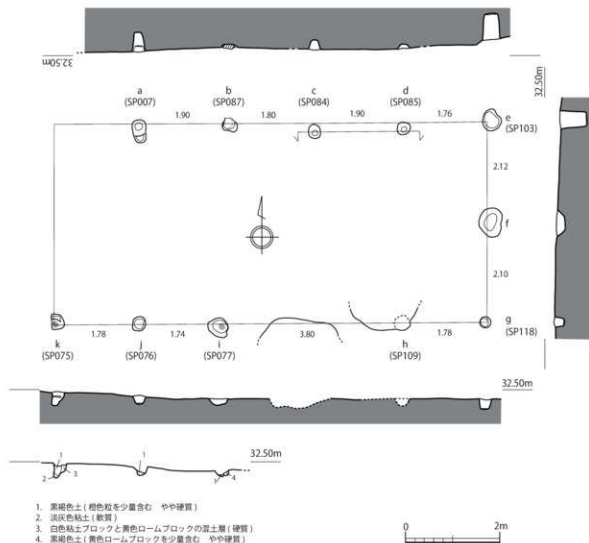
SB004(第 118 図)

調査区中央でSB001やSB002の西隣で検出した、桁行5間×梁行2間、身舎面積 38.40m^2 の掘立柱建物跡である。数基の柱穴と粘土探掘坑の切り合い関係が認められ、柱穴が切っている。建物は東西棟で、梁行の主軸方向は、 $N-1^{\circ}-E$ を指向している。柱穴の平面形状は楕円形を呈しているものが多く、径 $0.23 \sim 0.60\text{m}$ 、検出面からの深度は $0.07 \sim 0.56\text{m}$ を測る。平面上と土層の観察により、柱穴2基から柱痕を確認し、柱穴SP087から根石に使用されたと考えられる径 0.2m 大の平石を検出した。柱穴柱間は、桁行が $1.74 \sim 1.90\text{m}$ 、梁行が 2.10m 前後である。柱穴SP007からは14世紀中頃から15世紀にかけての土師器環Aが出土している。

井戸跡

SE115(第 119 図)

調査区の南側で検出された井戸跡である。切り合い関係は、SK117との切り合い関係が認められ、SE115がSK117を切っている。平面形状は不整楕円形を呈し、長軸 2.19m 、短軸 1.96m を測る。深度については、掘



第118図 SB004 遺構実測図(1/80)

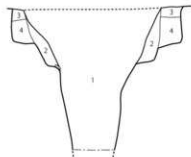
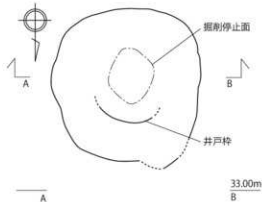
削作業の安全を考慮して、検出面から1.8m地点で掘削を中断している。断面形状は、検出面から0.5m地点と0.7m地点で、2段のテラスが認められ、三段掘りになっている。遺構検出面から0.8m程度掘削した段階で、遺構内の北側から平面円形に展開する木製の井戸枠を確認している。土層については、第1層の黒褐色土層が遺構検出面から掘削停止面まで堆積していることから、井戸廃絶後において、人為的に一気に埋め戻されたものであると考えられる。第2～4層については、埋土中に人頭大の円礫や砂・白色粘土が混入していることが認められることから、井戸構築時の裏込め層であると考えられる。埋土中から備前産陶器の掻鉢などが出土しており、遺構の時期は15世紀後半から末頃と考えられる。

土坑

SK011(第119図)

調査区北西側で検出した土坑である。平面形状は不整楕円形を呈し、長軸2.68m、短軸2.47m、検出面からの最大深度は0.34mを測る。断面形状は、床面に凹凸の起伏が認められる。埋土は、上層が黒色軟質土層で、下層については黄色ロームブロックと白色粘土ブロックの混土層で人為的に埋没したものと考えられる。上層については地山ブロックの混入が認められないため、自然に堆積したものと考えられる。遺構検出段階で8世紀後半から9世紀前半頃の土師器杯eが出土している。

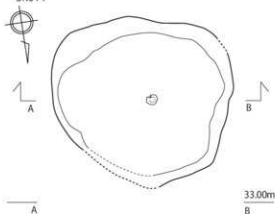
SE115



1. 黒褐色土 (軟質)
2. 黒褐色土 (20 ~ 30cm 大の円礫を円形に組む 砂まじり 硬質)
3. 白色粘土 (やや硬質)
4. 黒褐色土と白色粘土の混土層 (やや硬質)

0 1m

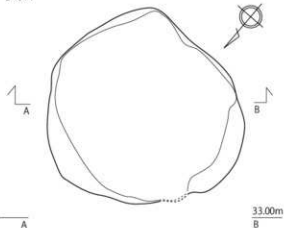
SK014

33.00m
A B

1. 黒褐色土 (軟質)
2. 黄色ロームブロックと白色粘土の混土層 (硬質) ※壁面崩落
3. 黒褐色土と黄色ロームブロックと白色粘土の混土層 (硬質)

0 1m

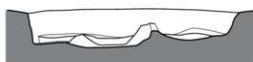
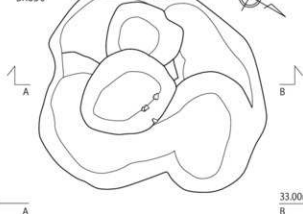
SK011

33.00m
A B

1. 黒色土 (軟質)
2. 黄色ロームブロックと白色粘土ブロックの混土層 (やや硬質)

0 1m

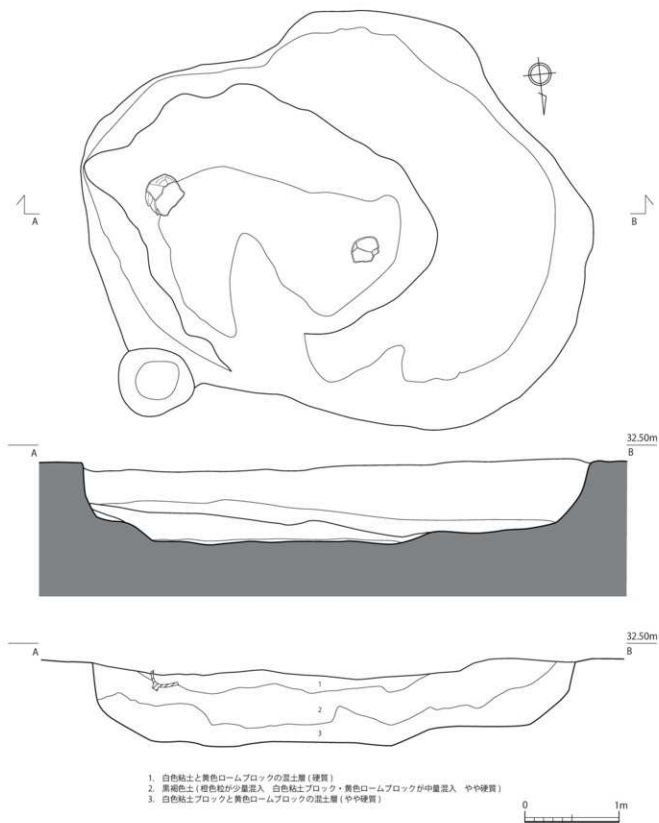
SK030

33.00m
A B

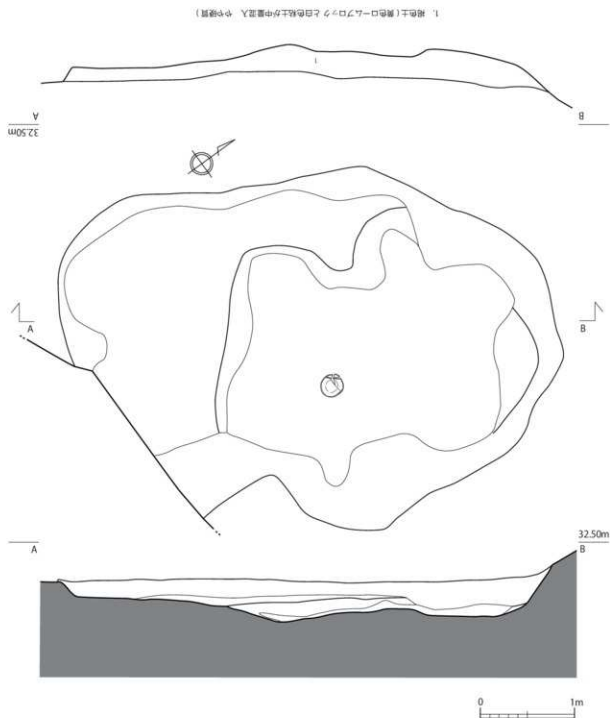
1. 黒色土と茶色土の混土層 (黄色ロームブロックが少量混入 軟質)
2. 黒色土と茶色土の混土層 (軟質)
3. 黄色ロームブロックと白色粘土ブロックの混土層 (硬質)
4. 白色粘土 (黄色ロームブロックが少量混入)

0 1m

第 119 図 SE115・SK011・SK014・SK030 遺構実測図 (1/50)



第 120 図 SK080 遺構実測図 (1/40)



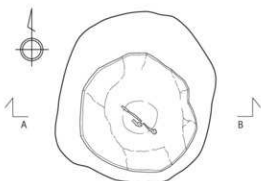
第 121 図 SK097 遺構実測図 (1/40)

SK014(第 119 図)

調査区の中央で検出した土坑である。SK021 との切り合い関係が認められ、SK014 が切られている。平面形状は不整楕円形を呈し、長軸 2.44m、短軸 2.16m、検出面からの最大深度は 0.42m を測る。断面形状は、床面に凹凸の起伏が認められる。埋土の第 3 層については黒褐色土に黄色ローームブロックと白色粘土ブロックの混土層で、人為的に埋没したものと考えられる。第 3 層埋没後に土師器の坏 e が遺構内の中央で安置されているのを確認した。土師器坏 e から 9 世紀中から 10 世紀初頭にかけて遺構が埋没したものと考えられる。

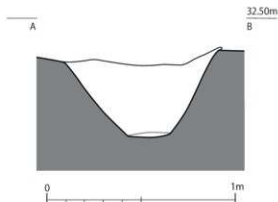
SK030(第 119 図)

調査区の北側で検出された大型土坑である。平面形状は不整楕円形を呈し、長軸 3.13m、短軸 2.82m、検出面からの最大深度は 0.50m を測る。断面形状は、床面の凹凸の起伏が顕著で、部分的に 0.1 ～ 0.2m 程度の深さで大きく掘り込んだような痕跡が数箇所認められる。埋土の堆積状況から第 3・4 層については人為的に埋没したものと考えられる。遺構内からは 9 世紀代と考えられる土師器甕 a が出土している。



SK080(第 120 図)

調査区北側で確認された土坑である。SB003 の柱穴と切り合い関係が認められ、SB003 の柱穴に切られている。平面形状は不整楕円形を呈し、長軸 2.72m、短軸 2.12m、検出面からの最大深度は 0.41m を測る。段面形状は、床面に凹凸の起伏が認められ、中央から東側にかけては深度 0.1m 程度で広範囲にわたって、さらに大きく掘り込んでいる。土層は上層から下層まで黄色ロームブロックと白色粘土ブロックが混入していることから、人為的に埋没したものと考えられる。遺構検出面から 0.1m 程度掘削した段階で、遺構内の中央と東側から古代のものと考えられる土師器甕の胴部破片が出土している。



第 122 図 SK112 遺構実測図 (1/20)

SK097(第 121 図)

調査区の南端で検出した土坑である。遺構の上面は、後世の掘削によって大きく削平されている。平面形状は不整楕円形を呈し、長軸 2.65m、短軸 1.90m、遺構面からの最大深度は 0.31m を測る。断面形状は、床面に凹凸の起伏が認められる。遺構内中央部の床面から 0.1m 浮いた地点で土師器の蓋 a5 が伏した状態で出土している。埋土は黄色ロームブロックと白色粘土を含む褐色土単層で、遺構は人為的に埋め戻されたものと考えられる。土師器の蓋 a5 の年代から、遺構の時期は 8 世紀末から 9 世紀初頭頃と考えられる。

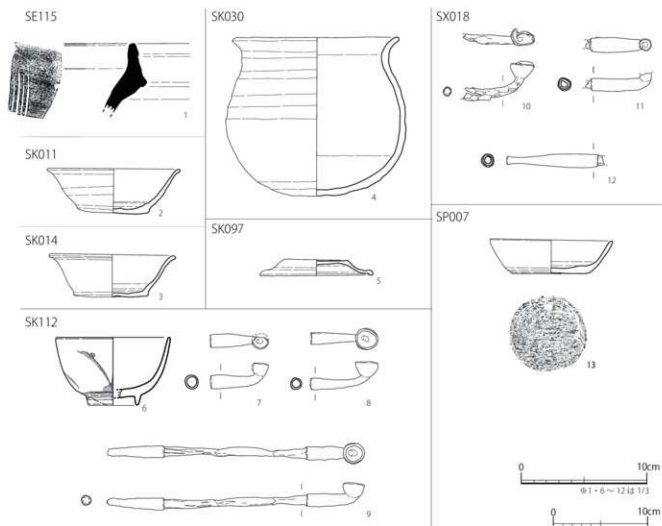
SK112(第 122 図)

調査区南側で検出した土坑で、SD071 が SK112 を切っている。平面形状は楕円形を呈し、長軸 0.91m、短軸 0.79m、検出面からの最大深度は 0.46m を測る。断面形状は、掘鉢状になっている。遺構検出した段階では、土師質土器甕の口縁部から胴部上位にかけて破片が散在して状況で出土し、その下から人頭大の礫が 40 個ほど固まって検出された。この礫群を除去すると胴部下位から底部が残存した土師質土器の甕が直立に埋設した状態で出土している。甕内から肥前産磁器の染付碗とともに青銅製のキセル 2 本や銭名不明の古銭などが出土している。18 世紀後半から 19 世紀初頭頃の年代が考えられる。

3. 小結

今回の調査では、古代の粘土採掘坑 25 基、掘立柱建物跡 4 棟と近世の土坑 2 基、井戸跡 1 基、溝跡 2 条などが確認された。

中世の掘立柱建物跡については、東西棟建物の SB004 の柱穴から土師器環 A が出土しており、14 世紀中頃から 15 世紀にかけての造営時期が考えられる。その他の南北棟建物 3 棟については、柱穴から遺物は出土してい



第123図 第57次調査区出土遺物実測図(1/3・1/4)

ないが、SB004の梁行の主軸方向と、他の南北棟建物3棟の桁行の主軸方向がほぼ同じであることや、SB004とSB001・SB002の建物規模がほぼ同じであることなどから、SB004と同時期、もしくはそれに前後する時期の建物であると考えられる。

近世の遺構については、調査区の南側で18世紀代の東西方向に蛇行している溝跡SD071が確認されている。溝の西側の延長が法雲寺への入口階段の方へ延びているため、参道の北側の側溝の可能性が考えられる。その他の遺構としては、同じく調査区の南側で埋裏が直立状態で検出された土坑が2基確認され、その内1基はこのSD071を切っている。SK104からは18世紀後半以降の国産陶器の陶胎染付碗、SK112からは18世紀後半から19世紀初頭頃の年代が考えられる肥前産磁器の染付碗が出土している。また早稲などを用いた近世墓などは確認されていない。

本調査地点の西隣りには康永3(1344)年創建と伝わる法雲寺があり、16世紀後半に兵火によって焼失して廃寺になっているが、17世紀中頃に再興されている。現在の法雲寺敷地内からみて、境内への侵入口は東側になっており、本調査地点は法雲寺へ境内への入口部分にあたることから、中世後期以降の法雲寺との関係が考えられる遺構群が多く検出されることを想定していたが、当該期の遺構密度は低く、長期にわたり広い空間地であったものと考えられる。

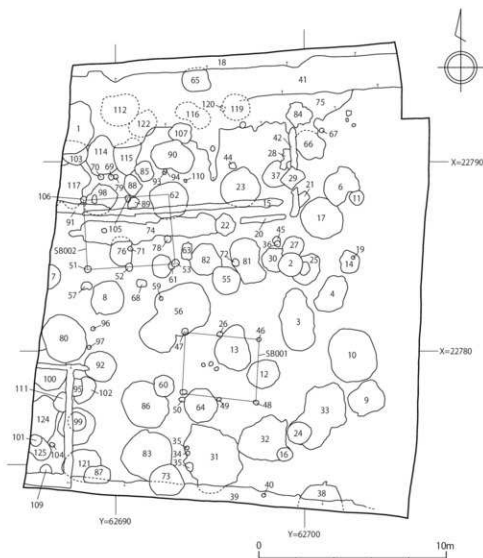
(15) 横尾遺跡第 58 次調査

1. 調査概要

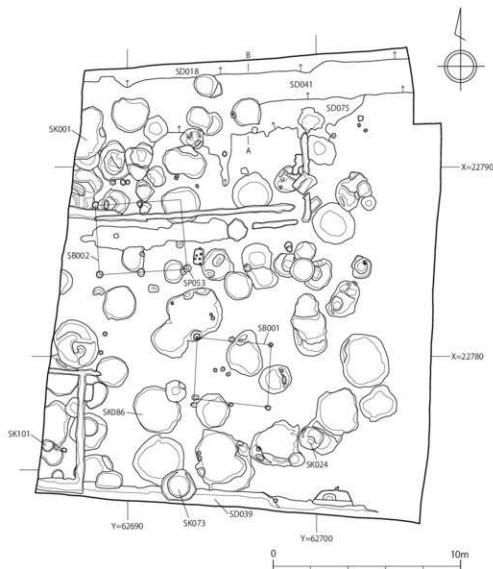
本調査地点は、大分市大字横尾字寺ノ下に所在し、東側に第 53 次調査地点、北側に第 57 次調査地点があり、西隣りには 1344 年創建と伝わる法雲寺がある。調査面積は 510 m²で、調査期間は平成 9 年 5 月 7 日～同年 8 月 1 日の期間で調査を実施した。遺構検出面の標高は、調査区の西端で 32.90m、東端で 32.60m、わずかに西から東側にかけて傾斜している。遺構検出面は、黄色粘質土層である。遺構内を 0.1～0.2m 程度掘り下げると、地山の基盤層が白色粘土層になる。

今回の調査で検出した主要遺構については、古代の粘土採掘坑 33 基、中世の掘立柱建物跡 2 棟、井戸跡 2 基、近世の埋裏 2 基、溝跡 4 条、土坑 23 基を確認した。

古代の粘土採掘坑は、平面形状が円形・楕円形・不整形など不揃いであることや掘削完了時の壁面や床面の凹凸の起伏が著しい状況などから、確実に粘土採掘坑と判断できる遺構数が 33 基あり、調査区全面に分布している。基本的には出土遺物は少ないが、SK086 から 9 世紀代と考えられる土師器鉢 a が出土していることや、隣接し



第 124 図 第 58 次調査区遺構配置図 (1/200)

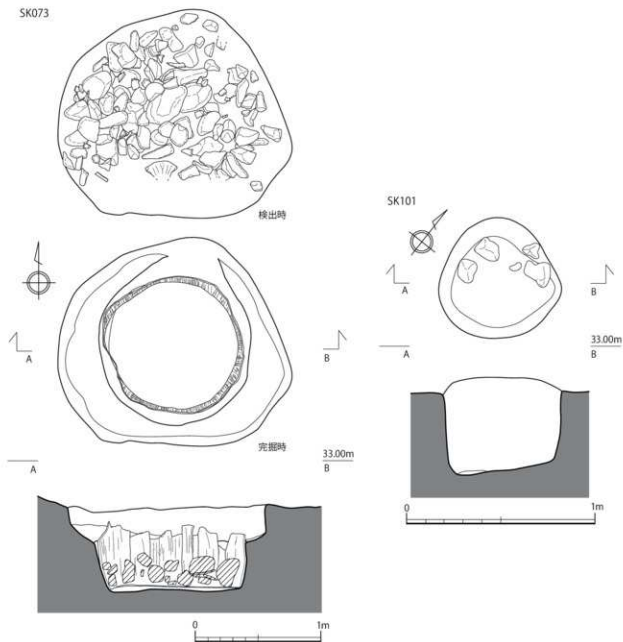


第 125 図 第 58 次調査区全体遺構図 (1/200)

ている 57 次調査の粘土採掘坑の調査成果などから、9 ～ 10 世紀代の所産であると推定される。

中世の掘立柱建物跡は、2 棟確認されている。調査区南側で検出した SB001 は 2 間 × 1 間の東西棟建物で、身舎面積は 13.20 m² を測る。建物の主軸方向は、N - 3° - E を指向している。柱穴から土師質土器破片が出土している。調査区西側で検出した SB002 は 2 間 × 1 間の東西棟建物で、身舎面積は 16.92 m² を測る。建物の主軸方向は、N - 9° - W を指向している。柱穴から 14 世紀代の土師器環 A が出土しており、2 棟の建物は、この時期に該当するものと考えられる。

近世の遺構については、近世の土坑を 23 基確認している。土坑内から早稲などの棺体は確認されていないが、土坑の平面形状は円形もしくは楕円形を呈し、規模も径 1.0 ～ 1.5m 前後、検出面からの深度が 0.6 ～ 0.8m 前後を測るものが多い。また各土坑内から 18 世紀から 19 世紀代の陶磁器の碗や皿、土師器の皿などが 1 ～ 3 点ずつ出土している状況などから、墓であった可能性が高いと考えられる。溝跡では、SD018 と SD039 が注目される。SD018 は調査区北側端で検出された東西方向に走る溝である。溝の主軸方向は、N - 86° - E を指向している。溝内からは、19 世紀代の肥前産磁器の染付皿や国産陶器の行平銅、播鉢などが出土している。本調査



第 126 図 SK073・SK101 遺構実測図 (1/20・1/30)

の遺構の広がりを確認するため、平成 9 年の 6 月に調査区北側の道路下の遺構検出を行った。SD018 と同一方向の石列が道路下北側で確認された。SD018 と同一方向という点から同時期の遺構の可能性が高く、旧道路の側溝跡とも考えられる。調査区南側端を東西方向に走る SD039 は、主軸方向 $N-84^{\circ}-W$ を指向している。溝内からは 18 世紀後半から 19 世紀初頭頃と考えられる肥前産の染付碗や染付皿・青磁碗・青磁仏花瓶や国産陶器の陶胎染付火入や唐津産陶器の掻鉢などが出土している。

2. 遺構

土坑

SK073 (第 126 図)

調査区南側で確認された埋桶遺構で、SD039 に切られている。平面形状は不整楕円形を呈し、長軸 1.88m、



第 127 図 SD041 土層図 (1/40)

短軸 1.66 m、検出面からの最大深度は 0.68 m を測る。断面形状は、中位にテラスを有し、2 段階りになっている。遺構検出した段階で、径 0.1 ～ 0.3 m 大の礫石が大量に集中した状態で見つかり、その中から陶磁器、瓦質土器の浅形火鉢、石製品の硯・石臼、木製の下駄など出土した。礫石については下層まで堆積した状態で廃棄されていた。遺構検出面から約 0.2 m 掘り下げた段階で、掘方に沿って 0.08 ～ 0.10 m 幅の板を桶状に立て並べているのを確認した。遺構の時期が判断できる陶磁器には、肥前産の染付くわんか碗があり、遺構の時期は 18 世紀後半から 19 世紀代と考えられる。

SK101(第 126 図)

調査区南西隅で検出した土坑である。SK124 や SK125 との切り合い関係が認められ、SK101 が両者を切っている。平面形状は不整形円形を呈し、長軸 0.66 m、短軸 0.64 m、検出面からの最大深度は 0.52 m である。断面形状は、壁面が直立気味に落ちている。遺構検出段階で、人頭大の礫石を 5 点確認した。遺構内から近世の国産磁器染付碗や国産陶器の鉢などが出土している。

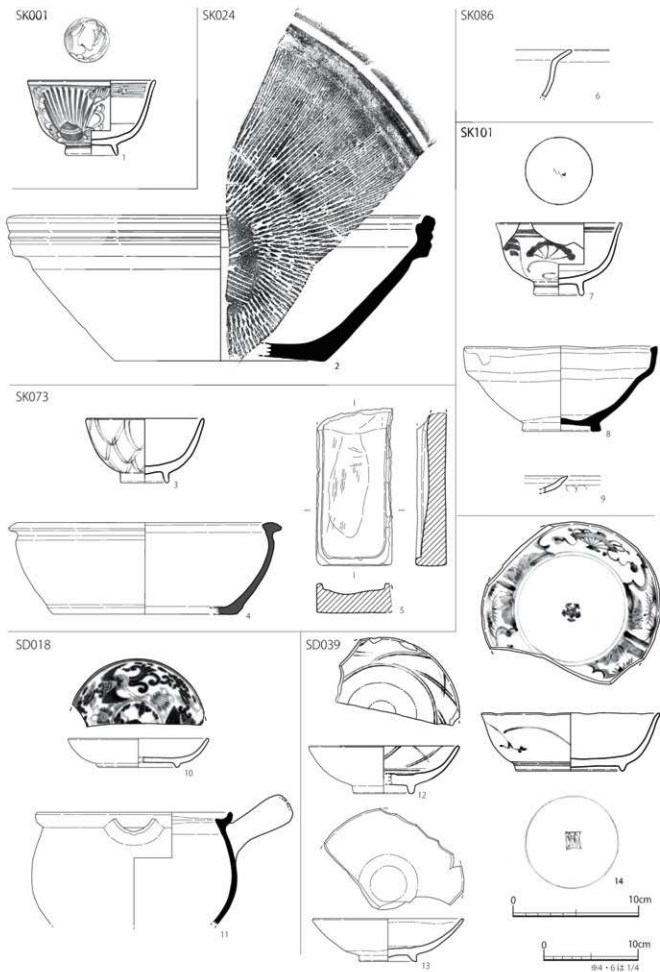
溝跡

SD041(第 127 図)

調査区北側で検出した、東西方向に直線的に走る溝状遺構である。SD018 と SD075 との切り合い関係が認められ、SD041 が SD018 に切られている。SD075 との関係については、東側部分で SD041 が切っているのを確認したが、西側部分では、明確な切り合いの遺構ラインを確認することができなかった。溝の両端が調査区外に延びているため規模の全容については不明であるが、溝の規模は、長さ $18 + \alpha$ m、最大幅 1.82 m、検出面からの最大深度は 0.25 m を測る。主軸方向は、 $N - 85^{\circ} - W$ を指向している。断面形状は、浅い皿状に窪んでいる。埋土はやや硬質の暗茶褐色土の単層で、流水の痕跡は確認できなかった。出土遺物には、国産磁器の破片や国産陶器の壺・揉鉢などが出土しており、遺構の時期は 19 世紀代と考えられる。

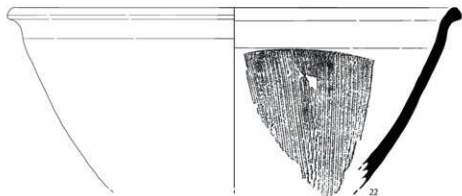
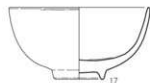
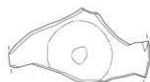
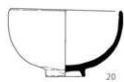
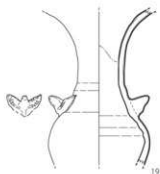
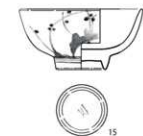
3. 小結

今回の調査では、粘土を採掘していた土坑跡を多数確認でき、土器生産の実体の一端をみる事ができた。粘土採掘坑からの出土遺物は少なかったものの、100 基近くの粘土採掘坑が確認された第 5 次調査地点から本調査地点は西方 100 m 地点にあり、粘土の採掘範囲がさらに西側に広がる状況が確認できた。14 世紀代の遺構については、掘立柱建物跡 2 棟が確認されており、建物の規模から倉庫等の建物が想定される。本調査地点の西隣りには康永 3 (1344) 年創建と伝わる法雲寺があり、創建当時の法雲寺との関係が注目される。近世の遺構については、18 世紀後半から 19 世紀代にかけての溝跡 4 条や埋裏 2 基、土坑 23 基などが確認されている。土坑については、前述したとおり遺構の形態・規模・出土遺物の内容などから、その多くが墓であったと考えられる。北側の SD041 については、SD039 と溝の主軸方向が類似していて、ほぼ同時期の遺構であり、南溝と北溝間の



第 128 図 第 58 次調査区出土遺物実測図 1 (1/3・1/4)

SD039



SD041



SD075



SP053



0 10cm

0 10cm

※23～25は1/4

第129図 第58次調査区出土遺物実測図2(1/3・1/4)

距離で約20mを測る。南北溝の間に、溝と同時期の18世紀後半以降の土抗群が認められることから、南北の溝が埋没した後に溝の上に土坑が形成されるようになり、さらに墓域が広がっていったようである。

(16) 横尾遺跡第 73 次調査

1. 調査概要

横尾遺跡第 73 次調査地点は、大分市大字横尾字小迫に所在し、横尾地区区画整理事業区域の最南端に位置する。このうち乙津川支流の谷川に開析された河川敷部分が今回の調査区である。調査区は南北方向の長方形で、調査面積は 800 m² である。調査は平成 11 年 2 月 1 日に開始し、同年 3 月 8 日に終了した。遺構検出面の標高は、北側で 13.90 m 前後、南端で 13.40 m 前後を測り、北から南側に向かって緩やかに傾斜している。基本土層については、昭和の頃までは水田として利用されていたようで、最上層で 0.2m 厚の水田耕作土層が認められる。その下層については約 0.5m 厚の川の氾濫や川の流れによる上流からの土砂・礫の堆積層が 5 層ほど重なった状態で確認した。最下層の黒褐色土層には、8～9 世紀の土師器を多く含んでおり、この層を除去すると、遺構が検出された。検出された遺構は、溝跡 1 条と溜まり状の堆積層、土坑状の性格不明遺構 7 基、ピット 50 基程度である。

2. 遺構

溝跡

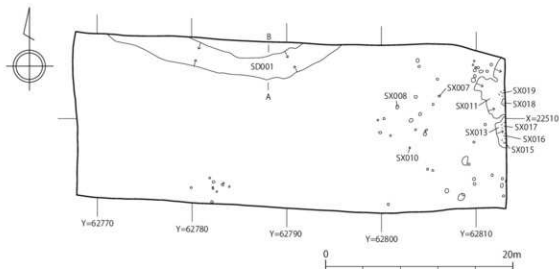
SD001(第 130 図)

調査区北側で検出した溝で、平面形状は、弧状に展開しており、両端は調査区外に延びている。溝の規模に關しては、最大幅で 2.80 m、検出面からの最大深度は 0.19m である。断面形状は、浅い皿状に窪んでいる。埋土は、上層が黒褐色砂質土で、下層は茶褐色砂質土である。埋土中から土師器の椀 c と蓋が出土しており、9 世紀前半から中頃に位置づけられる。

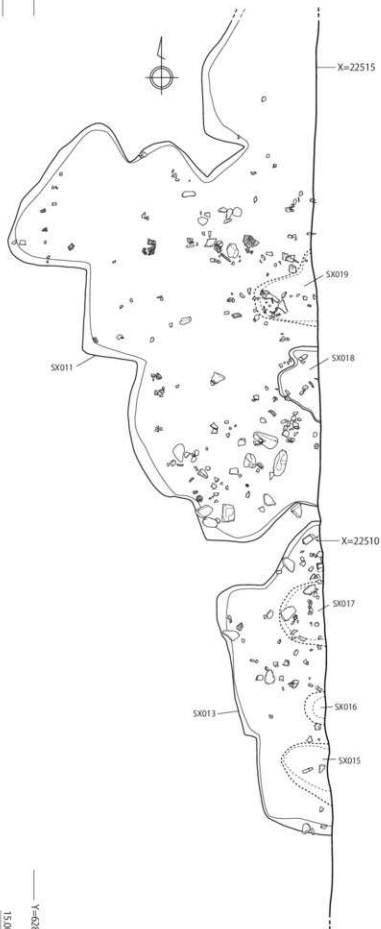
自然堆積層

SX011(第 131 図)

調査区の東端で確認した自然堆積層であり大型の浅い溜まり状に確認できた。切り合い関係は、SX018 に切られ、SX019 を切っている。一部調査区外に延びている堆積層の広がり是不整形を呈しており、長軸 5.9 + a m、短軸 3.2 + a m、厚さは 0.17 m を測る。堆積層は、黒褐色を基調とする軟質土である。堆積層内から土師器が大量に出土しており、器種は 坏 a3・椀 c・蓋 a5・鉢 a・甕 a・甕 b・甕・移動式カマドなどである。その他に黒色土器 A 類の椀 c や土製品土鍬や平瓦片などが出土しており、時期は 8 世紀後半から 9 世紀前半頃と考えられる。また径 0.1～0.3m 大の礫石が 15 点ほど出土したが、明確な配列などは確認できなかった。

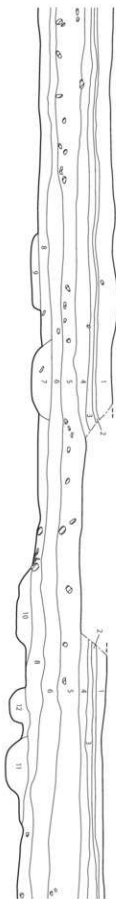


第 130 図 第 73 次調査区遺構配置図 (1/400)

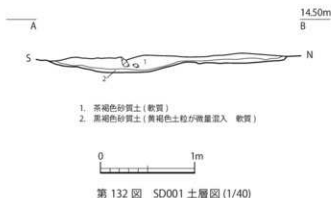


1. 民色土（灰質） 粘性あり やや軟質 ※水田耕作土
2. 耕作・放牧による表層土（やや軟質）
3. 民色土（灰質） 粘性あり やや軟質
4. 民色土（灰質） 粘性あり やや軟質
5. 民色土（灰質） 粘性あり やや軟質
6. 民色土（灰質） 粘性あり やや軟質

7. 民色土（灰質） 粘性あり やや軟質
8. 民色土（灰質） 粘性あり やや軟質
9. 民色土（灰質） 粘性あり やや軟質
10. 民色土（灰質） 粘性あり やや軟質
11. 民色土（灰質） 粘性あり やや軟質
12. 民色土（灰質） 粘性あり やや軟質



第 131 図 SX011・SX013・SX015・SX016・SX017・SX018・SX019 遺構実測図・調査区東壁土層図 (1/40)



SX013(第 131 図)

調査区の東端で検出した浅い溜まり状の自然堆積層で、SX011 の南側に位置している。切り合い関係は、SX015・SX016・SX017 を切っている。調査区外に延びていて、堆積層の広がり是不整形を呈し、長軸 $3.3 + \alpha$ m、短軸 $1.1 + \alpha$ m、厚さは 0.18 m を測る。堆積層は、黒褐色を基調とする軟質土で、東壁面土層の観察から SX011 と同一の堆積層であり、広範囲にわたっていることが分かる。遺構からの土師器の坏や甗、黒色土器 A 類の椀 c、製塩土器甗、鉄鎌などが出土しており、SX011 と同時期の 8 世紀後半から 9 世紀前半頃の遺物が出土している。

性格不明遺構

SX015(第 131 図)

調査区東端で検出した土坑で、調査区壁面土層の観察から SX013 の堆積層に覆われる。SX016 を切っているが、遺構の半分は調査区外にかかっている。平面形状は長楕円形を呈し、長軸 $0.58 + \alpha$ m、短軸 0.65 m、検出面からの最大深度は 0.12 m を測る。埋土は、茶褐色砂質土単層で径 0.05 ～ 0.06 m 大の礫を多く含んでいる。遺物は土師器坏の破片が出土している。

SX016(第 131 図)

調査区東端で検出した土坑で、調査区壁面土層の観察から SX015 に切れ、SX013 の堆積層に覆われている。遺構の半分は調査区外にかかっているが、平面形状は円形を呈し、長軸 $0.23 + \alpha$ m、短軸 0.35 m、検出面からの最大深度は 0.10 m を測る。埋土は、茶褐色軟質土層の単一層である。遺構内から遺物は出土していない。

SX017(第 131 図)

調査区東端で検出した土坑で、調査区壁面土層の観察から SX013 の堆積層に覆われている。遺構の半分は調査区外にかかっている。平面形状は楕円形を呈し、長軸 $0.48 + \alpha$ m、短軸 0.68 m、検出面からの最大深度は 0.09 m を測る。埋土は、茶褐色軟質土層で、径 0.03 m 程度の礫が少量混入している。遺構内から遺物は出土していない。

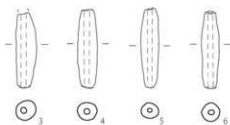
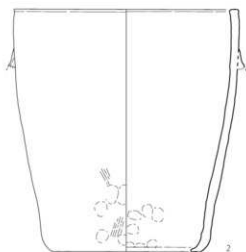
SX018(第 131 図)

調査区東端で検出した土坑で、調査区壁面土層の観察から SX011 の堆積層の上面より掘り込まれている。遺構の半分は調査区外にかかっているが、平面形状は不整楕円形を呈し、長軸 0.79 m、短軸 $0.43 + \alpha$ m、検出面からの最大深度は 0.11 m を測る。埋土は、黒灰色軟質土層の単一層である。遺構内から、遺物は土師器の小破片が出土しているが、明確な時期については不明である。

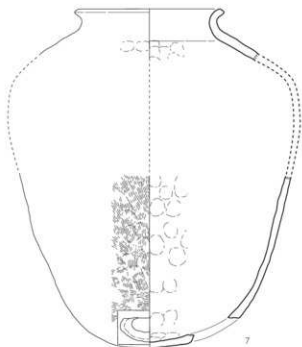
SD001



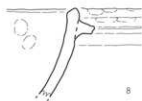
SX007



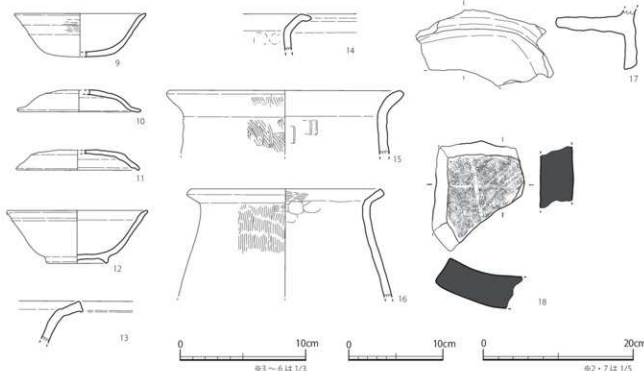
SX008



SX010

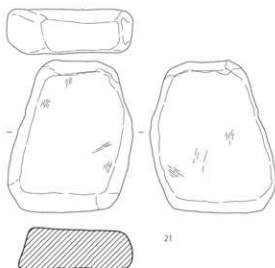
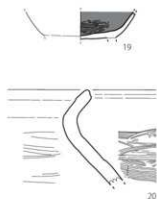


SX011

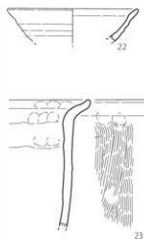


第 133 図 第 73 次調査区出土遺物実測図 1 (1/3・1/4・1/5)

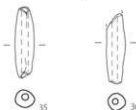
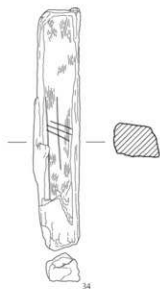
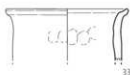
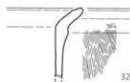
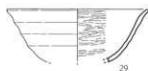
SX013



SX019



堆積層



Vトレンチ



表採



市 35・36 は 1/3



市 34 は 1/5

第 134 図 第 73 次調査区出土遺物実測図 2 (1/3・1/4・1/5)

SX019(第 131 図)

調査区東端で検出した土坑で、調査区壁面土層の観察から SX011 の堆積層に覆われている。遺構の半分は調査区外にかかっているが、平面形状は不整形を呈し、長軸 $0.78 + a$ m、短軸 $0.66 + a$ m、検出面からの最大深度は 0.05 m を測る。断面形状は、浅い皿状に窪んでいる。埋土は、黒褐色軟質土層の単一層である。遺構内から 9 世紀代の土師器の坏や甕 b が出土している。

3. 小結

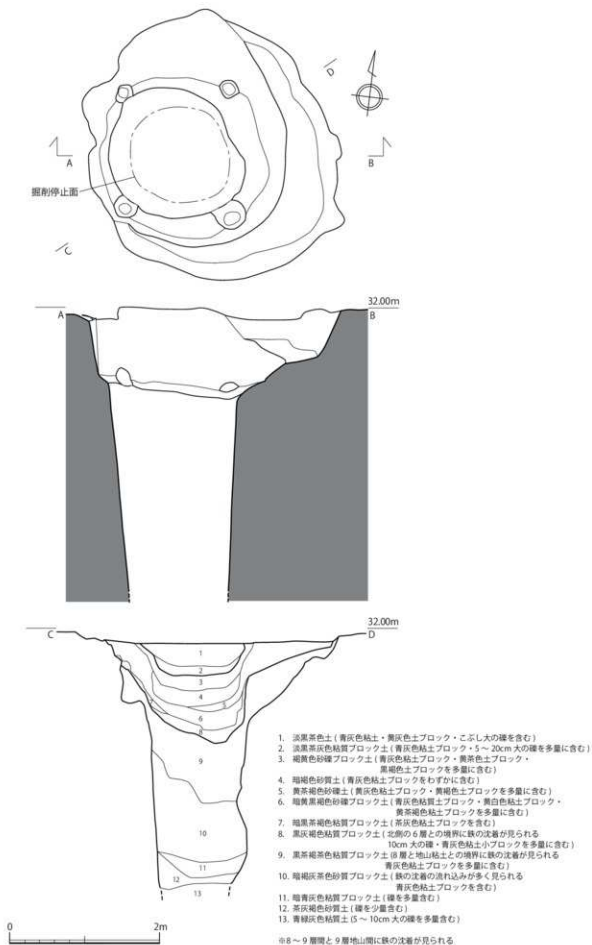
本調査地点は、乙津川支流の谷川に開析された標高 13.60m 前後の河川敷部分に立地している。調査区の東側で確認された SX011 と SX013 は、調査区壁面の土層観察から同一の自然堆積層である。下層は土砂や礫を多く含む堆積層で、川の氾濫や川の流れの痕跡が確認されている。この層から 8 世紀後半から 9 世紀前半にかけての遺物が集中して出土しており、それ以降の遺物が含まれていないことから、9 世紀代に大きな河川の氾濫があり、遺構面が大きく削平された可能性が考えられる。同時期の河川の氾濫跡は、本調査地点から南方約 0.7km 地点に所在する井ノ久保遺跡からも確認されている。遺跡は乙津川支流の狭間川近辺の扇状地上に位置し、調査の結果、遺跡が狭間川の氾濫や土砂流によって大きく削平されているのが確認されている。このことから 9 世紀代に大野川の本川や乙津川・谷川・狭間川など支川の付近に所在していた 9 世紀以前の低地の遺跡や遺構については、河川の氾濫に伴って大きく削平され、一部は消失したものと考えられる。

(17) 横尾遺跡第 80 次調査

1. 調查概要

古代の地層横転遺構 3 基は、平面形状が不整形を呈し、径 4 ～ 7m 大の規模を測る。SX052 の埋土中から弥生土・土器片が出土していることから、弥生時代以降の遺構であると考えられる。粘土探掘坑 3 基は、調査区の南側でまとまって確認されている。3 基ともに平面形状は不整形を呈し、断面形状では床面や壁面に凹凸の起伏が認められ、検出面からの掘削深度も 0.70m 前後と同様である。出土遺物が皆無であるため、遺構の時期は不明である。

第135図 第80次調査区遺構配置図(1/200)



第136図 SE070 遺構実測図 (1/50)

近世の溝に関しては、地形標高の等高線に直行するように、調査区の北端を東西方向に走る SD011 と SD062 があり、これに並行するように、調査区の南端では SD025 と SD060 が東西方向に走っている。ともに溝幅は 2～3m の範囲で収まる。北側と南側を走る両溝の間幅は、東側で約 40m、西側で約 51m である。SD025 からは、国産磁器の碗や波佐見焼の蛇ノ目釉刺し皿、備前産陶器播鉢が出土しており、18 世紀後半頃に比定にされる。



第 137 図 SD035 土層図 (1/40)

2. 遺構

井戸跡

SE070 (第 136 図)

調査区南側で確認された素掘りの井戸跡である。南北方向に走る SD056 の溝に切られている。平面形状は不整楕円形を呈し、長軸 3.58m、短軸 3.17 m を測る。深度に関しては、作業の安全性確保の為、遺構検出面から 3.4m 掘下げた段階で、掘削を中止した。遺構検出面から約 1.1m 掘り下げた段階で中央やや西よりに直径約 1.5m の平面形状が円形を呈する掘り込みとその周辺に径 0.2～0.4m、深さ 0.2～0.3m を測る円形状の小穴 4 基を確認した。小穴の配置は、1.5m 間隔で四方に配列されていることから、井戸屋形（覆屋）に伴う柱穴や 2 段階掘りの上下 2 段階造の井戸であれば、上段部に方形井戸枠を設置した際に基礎部を安定させるため掘り込んだ穴の可能性も考えられる。直径約 1.5m の円形を呈する掘り込みの中から、井戸枠・横桟・曲げ物などの木製品は確認できなかった。土層の観察により、上層部に関しては、井戸廃絶後に最低 1 回の掘り返しが認められる。また出土遺物には、肥前産磁器の染付碗・染付皿、国産陶器の唐津産鉢や備前産播鉢などがあり、18 世紀後半から 19 世紀中頃にかけて使用されたものと考えられる。

溝跡

SD035 (第 137 図)

調査区西側で検出した、東西方向に湾曲しながら延びる溝である。遺構の規模は、長さ 21.50m、最大幅 2.45 m、検出面からの最大深度は 0.21m を測る。主軸方向は湾曲しているため不明瞭であるが、およそ N-75°-W を指向している。断面形状は浅い皿状に窪んでいる。埋土は淡黄白色ブロックを少量含む黒灰褐色を基調とする単一層で、流水等の痕跡は確認できなかった。溝の長軸が等高線と直行しており、傾斜面を利用するために掘り込まれた遺構で、区画に伴う溝の可能性が考えられる。出土遺物には、14 世紀代と考えられる瓦質土器の甕の破片が出土している。

性格不明遺構

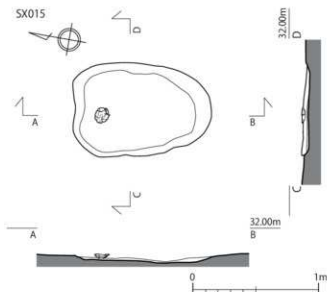
SX015 (第 138 図)

調査区の東南側で確認された土坑である。平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸 1.08m、短軸 0.73m、検出面からの最大深度は 0.06m を測る。断面形状は浅い皿状に窪んでいる。土坑の北側に、土師器環 A が正位置で出土していることから、埋納されたものであると考えられる。遺構の時期は、16 世紀前半頃に位置づけられる。

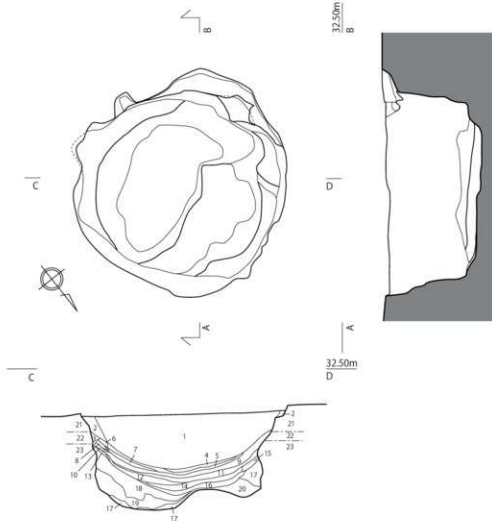
SX040 (第 138 図)

調査区南側で検出した土坑である。平面形状は不整円形を呈し、長軸 1.78 m、短軸 1.70 m、検出面からの最大深度は 0.76 m を測る。断面形状については、壁面に凹凸の起伏が目立ち、床面は中央部を作業面として周辺を掘り窪めたような形状を呈していることなどから、粘土採掘坑であると考えられる。埋土は、大きく 3 層に分けることができる。上層は黒茶褐色土層、中層はブロック土混じりの細かいレンズ状堆積土層、下層は大きく

の黄白色・灰白色粘質ブロック土を多く含む褐色粘質土層に分けられる。地山壁面は3層が認められるが、遺構検出面から0.2m掘下げた地点で、良質な青灰白色粘土層が確認できる。土層観察から、下層及び中層に関しては粘土採掘後に人為的に埋め戻されており、上層の黒褐色土層に関しては、自然に堆積したものと考えられる。遺構内から出土遺物は皆無であり、遺構の時期は不明である。



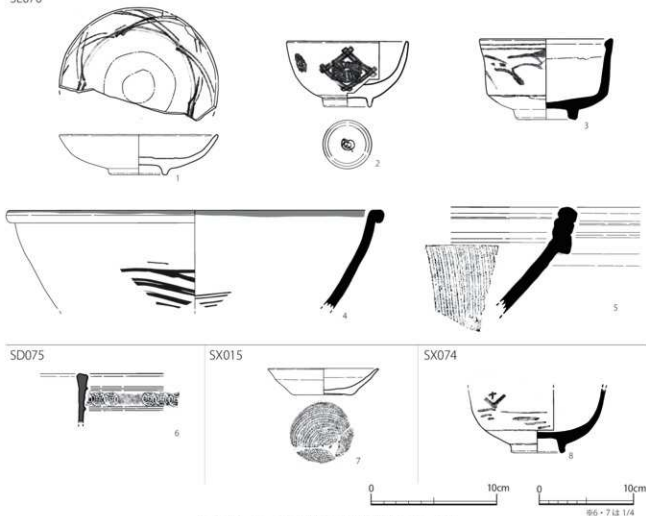
SX040



1. 淡黒茶褐色土 (1~5cm 大の小礫を多量に含む)
2. 暗茶灰褐色土と黄灰色土の混土層
3. 淡黒灰褐色土 (やや粘質)
4. 暗茶灰褐色シルト土 (淡白灰白色粘質土小ブロック・淡黄白色粘質土ブロックをわずかに含む)
5. 黒茶褐色シルト土 (淡褐色土ブロック・灰褐色土ブロック・黄褐色土粒を多量に含む)
6. 灰黒褐色土 (地山土の崩落)
7. 暗茶褐色土 (暗茶黒色土ブロックを多量に含む)
8. 暗灰黒褐色土 (地山土の崩落) ※5と対応
9. 淡茶灰褐色土 (淡黄白色粘質土ブロック・黄褐色土ブロックを多量に含む)
10. 灰黄白色土 (地山土の崩落)
11. 暗黒灰褐色土
12. 暗灰白色土 (黄白色粘質土ブロックを含む)
13. 黄灰白色土 (地山崩落土)
14. 淡褐色土 (黄褐色土ブロック・黄白色粘質土ブロック・黒褐色土ブロックを多量に含む)
15. 黄灰白色土 (地山崩落土)
16. 暗黒茶褐色土 (黄白色粘質土ブロック・灰白色粘質土ブロックを多量に含む)
17. 黄白灰褐色粘質土 (黒褐色土ブロックを含む)
18. 暗褐色土 (黄白色粘質土ブロック・灰白色粘質土ブロックを多量に含む)
19. 青灰白色粘質土 (黄白色粘質土ブロック・黒褐色土ブロックを多量に含む)
20. 暗黒褐色土 (黄白色粘質土ブロック・灰白色粘質土小ブロックをわずかに含む)
21. 暗褐色土
22. 黄褐色粘質土
23. 青灰白色土

第138図 SX015・SX040 遺構実測図 (1/30)

SE070



第 139 図 第 80 次調査区出土遺物実測図 (1/3・1/4)

3. 小結

古代の粘土採掘坑は、調査区の南側で 3 基確認したのみで、北側では認められていない。本調査地点の南側に位置する第 5・21・22 次などの各調査地点で 9 世紀から 10 世紀にかけての多くの粘土採掘坑が確認されており、今回は広範囲にわたる粘土採掘坑の所在範囲の北限を確認できたと考えられる。また今回の粘土採掘坑から遺物は出土していないが、おそらく同時期の遺構と考えられる。

近世の遺構については、18 世紀後半頃の調査区の北端を東西方向に走る SD011 や SD062、調査区の南端には、同じく東西方向に走る SD025 や SD060 がある。この時期には、両溝の間に大きな空間があったと考えられる。この空間利用であるが、西側の傾斜がきつくと、東側はわずかに傾斜するのみでほぼ平坦地である。東側の平坦地に関しては、溝と同時期の遺構は、SE070 のみで、他に建物などの明確な生活遺構は確認出来なかった。西側の傾斜地に関しては、径 0.2 ～ 0.5 m 規模の小穴を数多く確認しているが、出土遺物がほぼ皆無で、性格が不明なものが多い。

(18) 横尾遺跡第 151 次調査

1. 調査概要

横尾遺跡第 151 次調査地点は、大分市大字横尾上ノ辻に所在し、東隣りには第 80 次調査地点がある。台地の横尾面 (tm1) から東側の城原面 (tm3) へと傾斜する斜面上に位置し、遺構検出面の標高は、調査区の西端で標高 36.00m、調査区の東端で 34.75m を測る。調査面積は 280 m² を測り、調査前は竹林であった。発掘調査は、平成 25 年 7 月 18 日に開始し、同年 9 月 6 日に終了した。基本土層は、竹の根が多い 0.1m 厚の表土層があり、その下に地形の影響を受けているが西側で 0.1m 厚、東側では 1.5m 厚の黒褐色土が堆積している。この層を除くすると、標高 35.50m 地点では小円礫が混入する茶褐色粘質土層の上面で遺構が検出できる。また標高 35.50m より低い地点では、明茶褐色粘質土層の上面で遺構が検出できる。調査の結果、今回検出した遺構は、近世段階と考えられる柵状遺構 2 条と柱穴 2 基・溝状遺構 1 条と近現代の土坑 1 基、段造成跡を確認した。

段造成跡 SX002 と SX008 は、調査区の東側と南側で確認されている。緩斜面に切土を行い、段差を形成している。調査区の南隣には丘陵を切り通した東西方向に延びる道路がある現状と、また東側については横尾地区の土地区画整理事業が始まる前までは、南北方向に延びる道路があり、おそらく旧道路の建設に伴う切土の痕跡ではないかと考えられる。

2. 遺構 柵状遺構

SA009(第 141 図)

調査区の西側緩斜面の D1・2 グリッドで確認した柱穴 6 基からなる柵状遺構である。南北 3 間 × 東西 2 間で、削平された平坦面から傾斜面に変わるところで平面逆 L 字状に展開している。南北軸の主軸方向で、N - 18° - E を指向している。柱穴の平面形状は楕円形及び隅丸方形を呈し、径 0.32 ~ 0.50 m、検出面からの深度は 0.05 ~ 0.50m を測る。柱穴 b・e から柱痕を確認し、柱穴柱間は、南北軸で 1.80 ~ 2.10m、東西軸で 2.00 ~ 2.20m である。柱穴内から遺物は出土していない。

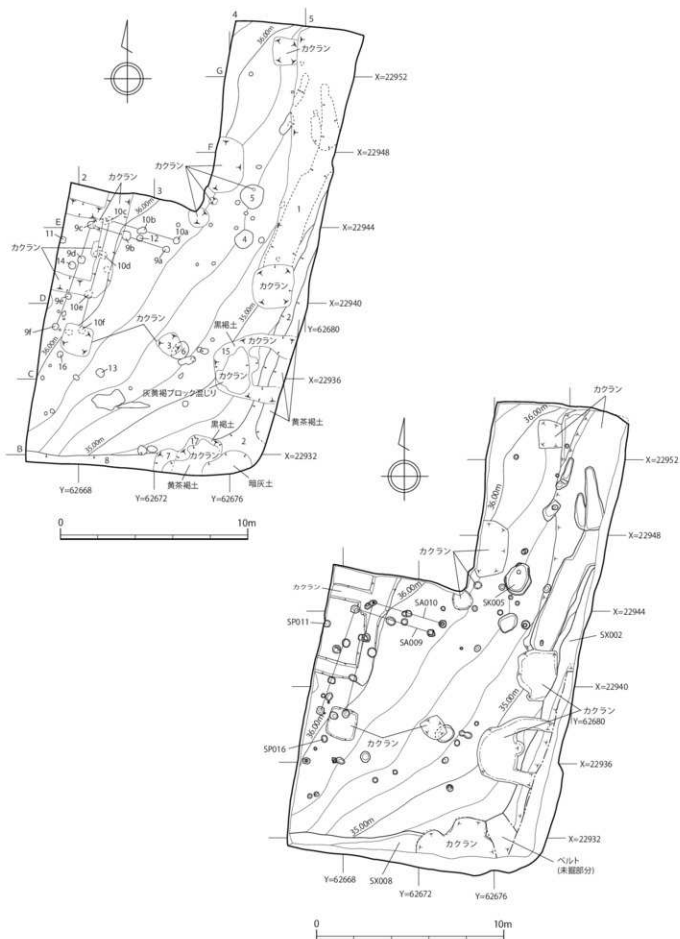
SA010(第 142 図)

SA009 と同様調査区の西側緩斜面の D1・2 グリッドで確認した柱穴 6 基からなる柵状遺構である。南北 3 間 × 東西 2 間で、削平された平坦面から傾斜面に変わるところで平面逆 L 字状に展開している。南北軸の主軸方向で、N - 13° - E を指向している。柱穴の平面形状は楕円形及び隅丸方形を呈し、径 0.28 ~ 0.52 m、検出面からの深度は 0.10 ~ 0.38m を測る。柱穴 b・d から柱痕を確認し、柱穴 d の上面から径 0.3m 大の平石がやや傾いた状態で検出している。柱穴柱間は、南北軸で 1.90 ~ 2.15m、東西軸で 1.90 ~ 2.00m である。柱穴内からの出土遺物がなく、遺構の時期は不明である。隣接している SA009 との配置関係から、ほぼ同時期で時期差はなく、前後して設置されたものであると考えられる。

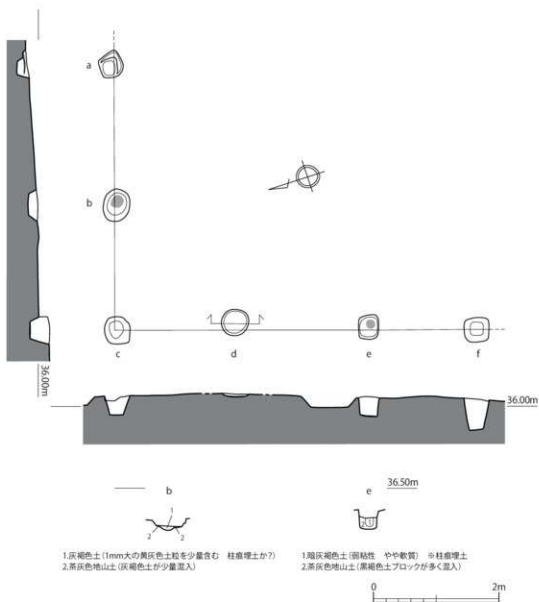
土坑

SK005(第 143 図)

調査区の E4 グリッドで検出した土坑である。平面形状は楕円形を呈し、長軸 1.70 m、短軸 1.38 m、検出面からの最大深度は 0.25 m である。断面形状は、浅い舟底状になっており、遺構内を外周するような形で、中位にテラスを有している。遺構内の北側では残存状態の良い歯がまとまって出土し、歯の形状や大きさなどから小牛のものであると考えられる。その遺構内の中央や南側からも骨片が数点出土しているが、残存状態が良くないため、部位については不明があるが、P - 6・7 については、おそらく脚部の骨であると考えられる。歯や獣骨の出土状況や土坑の規模などから、頭位を北方向にして、東側を背に埋葬したものと考えられる。埋土は、暗灰



第140図 第151次調査区道構配置図・全体道構図 (1/200)



第 141 図 SA009 遺構実測図 (1/60)

褐色土に地山ブロック土が混入している。遺構内からは遺構時期が判断できる遺物は出土していない。

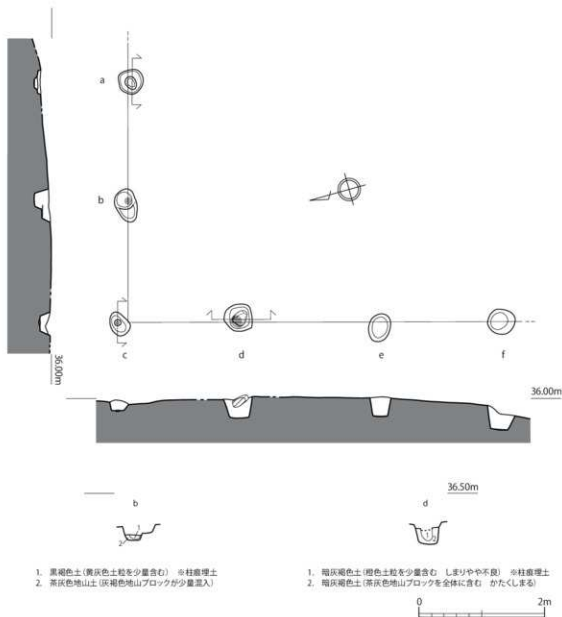
柱穴

SP011(第 143 図)

調査区西側の D1 グリッドで、SA009 の西隣で検出されたピットである。一部調査区外にかかっているが、平面形状は隅丸方形を呈し、長軸 0.33 + αm、短軸 0.34m、検出面からの最大深度は 0.52 m を測る。平面上で柱の抜き取り痕を検出し、その中から被熱された石臼片 2 点と人頭大の礫 2 点が出土している。柱の抜き取り後に、石臼や礫を埋めている。遺構の埋土は、柱抜き取り痕が黒褐色土で、掘方が灰褐色土である。柱穴内から遺構の時期が判断できる遺物は出土していない。

SP016(第 143 図)

調査区の南西隅の C1 グリッドで、SA009 や SA010 の南側で検出されたピットである。平面形状は楕円形を呈し、長軸 0.37m、短軸 0.30m、検出面からの最大深度は 0.20m を測る。埋土は黒褐色土層である。遺構内からは 17 世紀前半頃の絵唐津碗の底部片が出土している。

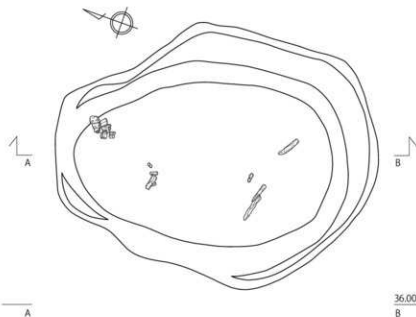


第 142 図 SA010 遺構実測図 (1/60)

3. 小結

今回の調査で検出した遺構は、時期が判断できるものが少なく、SP016 から 17 世紀前半頃の絵唐津碗、SD001 からは 18 世紀末から 19 世紀中頃にかけての肥前産染付碗が出土している程度である。また他の攪乱遺構からもガラス瓶などに混じって近世の陶磁器や焼し瓦などが出土していることから、遺構自体は近世から現代にかけて主体を占めているものと考えられる。調査区の南側一带に分布する古代の粘土採掘坑などの遺構は確認できなかった。東側に隣接する第 80 次調査地点においても、その分布は南側の一部に限定されることから、粘土採掘坑の分布は当該地帯が北限と判断される。

SK005



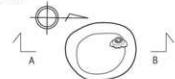
SP011

柱抜き取り痕

36.00m
B

0 1m

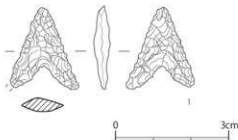
SP016



0 1m

第 143 図 SK005・SP011・SP016 遺構実測図 (1/20)

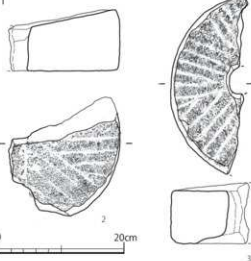
SX017



SP016



SP011



第 144 図 第 151 次調査区出土遺物実測図 (1/1・1/3・1/6)

第IV章 総括

今回報告を行うのは、横尾遺跡群の西側区域 18 調査地点におよび、このうち特筆される成果としては、古代に粘土採掘を行った範囲の一部が確認できた点と近世以降の酒造に関連した遺構を確認した事である。この 2 つの成果を中心に古代から近世にかけての遺構の様相についてまとめを行う。

第 1 節 古代の粘土採掘坑について

粘土採掘坑は市内で唯一確認されており、今回報告する 18 調査地点の内、10 調査地点において検出され、総数は 300 基を超えている。検出した遺構の数量に対し、遺構内からの遺物出土量が僅少であるため、粘土採掘の作業期間を解明する事は困難であるが、分布と埋没状況に一定の規則性が認められる。

まず粘土採掘坑の掘削分布範囲（第 145 図）については、現状で南北約 200m、東西約 130m の範囲で、南限と西限については確認できていないが、地形の制約のため、ある程度限られた範囲で展開するものと考えられる。北限は第 80 次調査地点の南側になり、北東限は第 21 次調査地点を南北方向に縦断し、西側に分布が広がる。東限については、第 5 次調査地点の東方 50m 地点に位置する第 11 次調査地点から粘土採掘坑が確認されていないことから、両調査地点の間まで展開するものと考えられる。また第 49 次調査地点では調査区全域に粘土採掘坑が確認されているが、南側に隣接する第 50 次調査地点からは確認されていないことから、両調査区の間分布範囲の境界があるものと想定される。南東限の範囲については第 53 次調査地点で確認される。粘土採掘坑の分布範囲内は、土坑内を 0.1 ～ 0.2m 程度掘り下げると、良質の白色粘土層に変わっている事が遺構壁面から確認できる。これは中位段丘面から低い段丘面に向かって流れる地下水の影響によって良質な粘土層が形成され、中位段丘崖縁辺に帯状に堆積したものであると想定される。粘土採掘坑の密度が特に集中しているのが、分布域の東側に所在する第 5 次・第 49 次調査地点で粘土採掘坑同士が複雑に切り合っている。

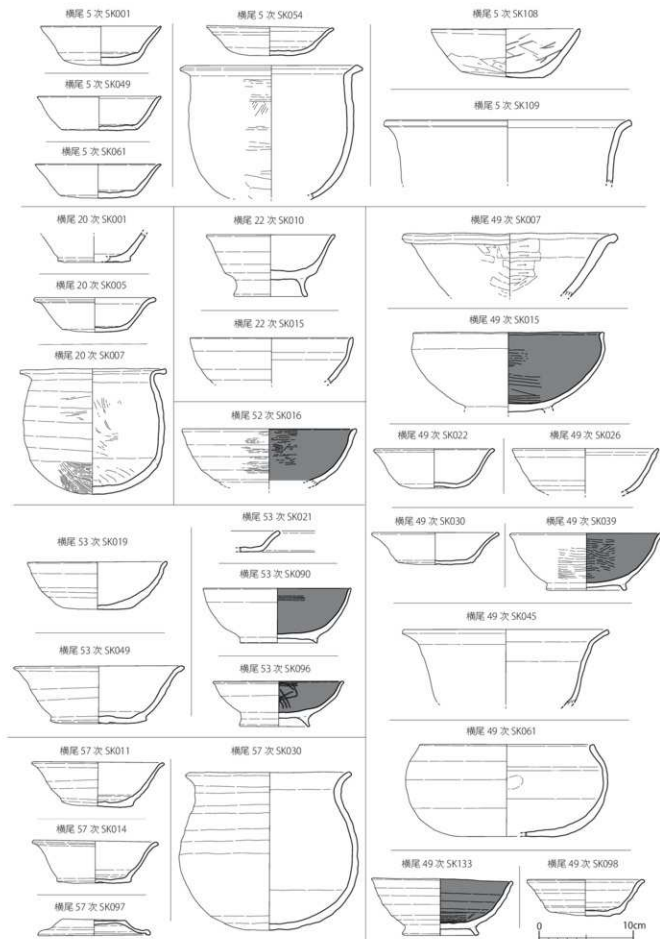
粘土採掘坑の遺構形態の特徴としては、平面形状が不整形円形を呈し、径については 1.5 ～ 2.5m 前後のものが多く、中には連続して掘削されたことから 5m を超するものや、1m 未満の土坑も認められる。断面形状については壁面や床面に凹凸の起伏が著しく、また検出面からの深度については 0.4 ～ 0.6m 程度のものが多い。これは良質の白色粘土の堆積層のみをねらって掘ったためである。また遺構の埋没状況については、土層の観察から、下層に地山ブロックを含む土坑が多く、粘土採掘終了時に人為的に埋め戻しを行った痕跡が認められる。上層については、埋土中に地山ブロックの混入が認められず、軟質の黒色土層が確認できることから、自然に埋没したものと考えられる土坑が多い。また粘土採掘坑から出土した遺物の量が僅少であるが、約 10 基の土坑から遺構中央部分の床面上や人為的な埋め戻しが終了した段階で、1 ～ 2 点の土師器の坏や甕が正位置の状態で出土している。このように遺構の形態・埋没状況・遺物の出土状況などについては、一定の規則性が認められる。

粘土採掘坑から出土した遺物の器種と年代を見てみると（第 146 図）、時期が古いものでは 9 世紀初頭段階の土師器坏・甕・蓋などが出土し、新しいものについては 10 世紀中頃から後半にかけての土師器皿・椀・黒色土器 A 類の椀・土師器 A 類の椀などが出土している。遺構時期が 9 世紀初頭から 10 世紀中頃にかけての土器については、分布域の東側にある第 5 次・第 49 次調査地点、分布域の南西側にある第 53 次・第 57 次・第 58 次調査地点で出土している。また 10 世紀中頃から後半にかけての遺物が出土しているのが、分布域の北西側にある第 22 次・第 52 次調査地点である。土坑内から出土した遺物量が僅少であるという問題点があるが、9 世紀初頭から 10 世紀前半頃までは分布域の南西側や東側で粘土採掘を行い、10 世紀中頃以降になると粘土採掘範囲を北側に広げながら粘土採掘を行うようになり、当地では 10 世紀後半段階には粘土採掘が終了したものと考えられる。

粘土採掘坑の近辺には、採掘した粘土を保管する建物跡、土器などを製作する工房跡、土器などを焼成するための焼成坑などの遺構が存在するものと考えられるが、今回の報告を行った 18 調査地点内からは、9 世紀から 10 世紀後半にかけての明確な遺構は確認されていない。今回報告する調査地点には、掘立柱建物跡が総数約 50



第 145 図 粘土採掘坑及び関連遺構分布図 (1/6,000)



第 146 図 粘土採掘坑出土遺物実測図 (1/4)

棟確認されているが、柱穴からの出土遺物が僅少であるため、建設時期が不明な建物が多く、粘土採掘坑と同じ時期の掘立柱建物かどうかは判断できない。このため粘土採掘を行った後は、土器などの製作を別の作業地点で行った可能性が高いと考えられる。また近接する井ノ久保遺跡⁽²¹⁾や尾崎遺跡⁽²²⁾などでは、9世紀初頭から後半にかけての土師器焼成土坑が河川の河原で検出されていることから、そうした場所に構築されていたものと考えられる。

第5次調査地点から北東方向約300m地点に位置する第135次・第139-1・2次調査地点からは、9世紀前半から後半にかけての掘立柱建物跡が確認されている。また第5次調査地点の南東方向約300m地点に位置する第133-3次調査地点からは、「直人」と書かれた墨書土器や、第136次調査地点から、「本」と書かれた墨書土器が出土している。墨書土器などから郡司に仕えた役人の居住地などが考えられており⁽²¹⁾、土器などの生産に関する管理などに関わっていた可能性が考えられる。粘土採掘坑から出土した遺物の年代から横尾遺跡群の粘土採掘は10世紀後半まで行われていたと考えられるが、10世紀段階の掘立柱建物跡などは確認されていない。

今後の課題としては、粘土採掘坑の西側や南側の分布範囲の詳細な確定や、土器などの製作に関連する工房跡や土器焼成遺構の確認、配給先の解明などが挙げられる。

第2節 近世以降の酒造遺構群について

第49次調査地点の調査区中央から東部にかけての広範囲にわたって、19世紀中頃から後半にかけての酒造に関わる遺構群が確認されている。第49次調査地点周辺は、区画整理事業が行われる前から、酒屋が営われていた場所あたり、明治元(1868)年には酒造していたことが分かっている。

一般的な清酒の酒造工程を概観すると、①精米、②洗米、③蒸米、④麹仕込み、⑤もと仕込み、⑥しぼり(压榨)、⑦濾過、⑧火入れ、⑨貯蔵という9つの過程で行われる。技術的進歩はあるが、この工程自体は江戸時代から現代まで、ほぼ共通である。この9つの工程はそれぞれ専用の作業場で行われ、発掘調査では酒造関連遺構として確認されるのは、主に井戸跡・米洗い場跡・釜場跡・酒搾りの槽場跡・蔵建物の基礎跡などである。

第147図は、兵庫県の伊丹市教育委員会が発行した「伊丹の酒造り道具」「伊丹の民具」から転載したものである⁽²³⁾。図から、洗米を行う「洗い場」、蒸米を蒸す釜屋(場)、蒸した米に麹を混ぜて発酵する「室」、発酵した米から酒をしぼり出す「槽場」など、主な酒蔵の構造が分かる。

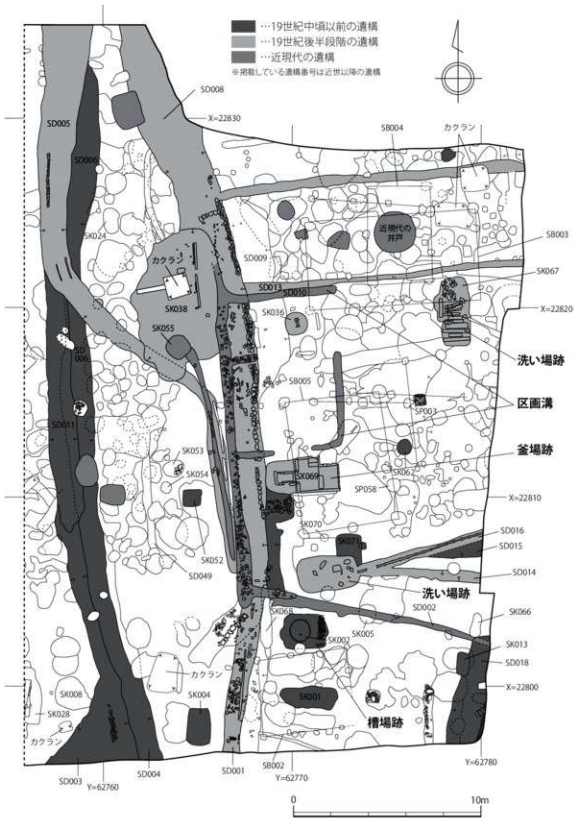
第49次調査地点で検出した酒造遺構(第148図)は、洗い場跡2基と洗い場に併設された排水溝跡2条、釜場跡1基、槽場跡1基である。また酒造に関連する遺構としては、調査区中央を南北方向に走る幅1.5m以上の溝跡6条、平面方形状に展開する幅約0.5mの区画溝跡、掘立柱建物跡5棟などがある。

調査区北東側で確認されたSK067については、検出面から深度0.2m地点で掘削を停止しているが、遺構の北側から0.1~0.4m大の礫石が散在していた状況から、地下に石組の井戸が存在する可能性が考えられる。また遺構の東側部分に排水溝と思われる細長い溝を有している状況やSK067の北側から近現代の井戸が確認されており、「②洗米」を行う洗い場跡の可能性が考えられる。またSK002とSX069の間で確認された、溝床

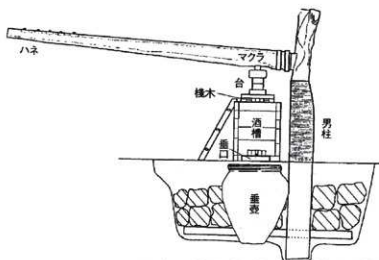


(伊丹市教育委員会 1991『伊丹の民具』『伊丹の酒造り道具』より転載)

第147図 酒造構造復元図



第 148 図 第 49 次調査区酒造遺構群配置図 (1/200)



（伊丹市 1999『旧岡田家保存修理工事報告書』より転載）
第 149 図 機場復元図

では、遺構の検出状況から、「⑥しほり」作業を行った槽場の可能性が考えられる。第149図は、伊丹市教育委員会が旧岡田家住宅保存修理工事報告書にて作成した槽場の復元図である⁽²³⁾。近世から近代にかけての一般的な槽場は、上部構造と下部構造の2構造に分かれる。まず上部構造としては、圧搾用のタンクの役割を果たす、「酒槽」と呼ばれる木製の大きな箱型の容器が床面に置かれている。その中に、発酵してろみに変化した蒸米を入れた「洗袋」を重ねて積んでいく。酒槽に圧力を加えるために太い男柱を酒槽の横に立て、その男柱の先に長いハネと呼ばれる横棒を差し込み、ハネ棒の先に石の重りをたくさんぶら下げて梃(てこ)の原理で上から強く押さえつけることで、もろみから水分が搾り出されて、槽の底に近い場所にあけられた「垂口」とよばれる穴から外へ流れ出す仕組みになっている。下部構造については、地下に深度1mの土坑を掘り、そこに垂口の先から出てきた酒を溜めるための大甕「垂壺」が据えられている。土間面に槽を設置し、その底辺に垂口が開いていることから、垂口から出る酒を受ける垂壺のふちは、土間面より低い位置になっている。そのため垂壺は土間に掘り込んだ穴の中に据えられている。男柱は、搾り作業の際にものものすごい力がかかるため、男柱が浮き上がらないように、男柱の底に横木を噛まし、さらにその上に石を置いている。酒槽を設置する箇所の下部構造の壁面については、石垣が認められ、掘り下げ中や酒槽への加圧による壁面崩落防止を目的として施工されたものと考えられる。今回の調査で確認されたSK002については、平面形状は長方形を呈し、長軸2.52m 短軸1.81m、検出面からの深度は約0.7mを測る。床面に直径0.18m大の丸太が水平に設置され、丸太の上に石が置かれた状況が確認され、また土坑内から東壁面には石垣を検出していることから、槽場の下部構造であると考えられる。遺構内からや遺構の周辺から男柱の痕跡は確認されていないが、床面中央に認められる径約1mの桶状の中に男柱を立てた可能性が考えられる。

SD001・SD003・SD005・SD006・SD011などの調査区の中央を南北方向に流れる溝跡については、溝同士が複雑に切り合っている状況から、継続的に改修が行われたようである。このうちSD005については、遺構配置状況から酒造遺構群に向かって溝が展開しており、導水する目的で掘り込まれていることが窺える。また平面形状に展開する区画溝跡SD010であるが、溝幅0.5m、検出面からの深度は0.1m前後と非常に浅い溝で、径0.1～0.2m大の礫群が多量に出土している。酒蔵の構造は江戸時代から木造土蔵造りが一般的で^(注28)、区画溝の配置や深度の状況などから、建物の基礎である可能性も考えられ、出土遺物の内容やSD002・SD013との切り合い関係などから近代以降の年代が考えられる。またSD002やSD013については、SD013と同規模の浅い溝であるが、礫群が認められないことから、建物周りの雨落ちの溝の可能性が考えられる。

掘立柱建物跡は5棟確認されており、SB005の柱穴から近世以降の磁器碗や皿が出土している。その他の4

に土管を埋設した東西方向に走る排水溝SDO16があり、SDO16の西側からは、大きな土坑状遺構が認められ、遺構内から石や板材が数点確認されている。おそらくこの土坑と排水溝についても「②の洗米」を行う洗い場跡の可能性が考えられる。なおSDO16は東側へ展開し、本調査地点の東側に隣接する第5調査地点から延長部分を確認している。

調査区の中央よりやや東側で確認した SX069 については上部構造が確認できていないが、下部構造から「③蒸米」の作業を行った煉瓦造りの釜場跡であると考えられる。

調査区南東側で確認した SK002 につい

棟については、建物時期が判別できる遺物が出土していないが、各建物跡の柱穴が古代の粘土探掘坑を切っている状況や、SB004の配置内に近現代の井戸が認められること、建物の主軸方向がSB005と類似していることなどから、酒造遺構群と同時代の建物であると考えられる。

酒の製造時期であるが、酒造遺構からの出土遺物量は少ないものの槽場跡SK002の遺構内からは、19世紀前半から中頃にかけての陶磁器類が出土し、この段階には酒造りが行われていたようである。釜場跡については、赤煉瓦が生産され、煉瓦積みの釜場が認められるのは、明治初期以降である^(註24)。このことから、近代以降の構造物であると考えられる。南北方向に走る溝跡群については、国産陶磁器・土師質土器・瓦質土器などの多くの遺物が出土している。出土した遺物の内容から、溝群の中で遺構時期が最も古いのがSD003やSD011で、18世紀中頃から後半段階の溝である。時期が最も新しいのはSD005やSD008で、19世紀後半段階の溝である。酒造遺構群の西側を南北方向に走るSD003やSD011の存在から、18世紀代まで酒造りが遡る可能性も考えられる。区画溝SD010については、19世紀後半のSD008を切っていることから19世紀末から20世紀にかけての遺構であると考えられる。洗い場跡と考えられる遺構が2基確認されていることや、南北方向の溝が複雑に切り合っている状況などから、19世紀代には酒蔵建物の建て替えや各作業場などの作り替えなど、2期以上にもわたる構造の変遷があったものと推定される。

第3節 中世から近世にかけての遺跡様相について

当該地では、10世紀代に粘土探掘が終了した後、11世紀から13世紀の遺構は皆無である。14世紀代に法雲寺に隣接する第57次調査地点と第58次調査地点から掘立柱建物跡が1棟ずつ確認され、周辺の第99次調査地点では14世紀から墓域が形成され、16世紀代まで存続する^(註25)。

16世紀には、周辺部に方形館が点在し、第18次調査地点の東方200m地点の第83次・第112-2次調査地点から、一辺約60m規模の方形館跡が確認されている^(註26)。第18次調査地点からは掘立柱建物跡が検出され、法雲寺周辺の第16次・第20次・第48次・第53次調査などの各地点では、掘立柱建物跡群やそれに伴う井戸跡などの生活遺構が確認されている程度である。江戸時代の幕末期に記された「増上山略伝記」によると法雲寺の前身となる長福寺が康永3(1344)年に創建され、天正十五(1587)年に島津氏の侵攻による兵火によって焼失したと伝えられているものの、その現地比定は現状では断定できないため、これまで検出されている建物との関連は不明である。

近世には、当該地は横尾村となり、江戸時代を通じて白杉藩領に属し、万治三(1660)年に白杉藩の命によりキリスト教を圧する目的として法雲寺が再興されている。

今回報告を行ったのは横尾遺跡群の西城範囲になるが、17世紀から18世紀前半頃までの建物跡・井戸跡・墓などの検出遺構数は希薄で、西側区域での発掘調査の成果を見ていくと、17世紀代の遺構は希薄で、第16次調査地点から溝跡1条、第48次調査地点から掘立柱建物跡1棟、第52次調査地点から土坑墓1基が確認されている程度である。18世紀中頃以降から徐々に遺構数が増え、集落や墓群が形成されるようになる。第32次・第37次調査地点では、18世紀後半から19世紀中頃の掘立柱建物跡や井戸跡、溝跡などが確認されており、火事によって建物が焼失し、溝の中に崩れ落ちた大量の瓦片や炭化した柱材などを廃棄し、火災処理を行っている状況が窺える。法雲寺の東近辺に位置する第52次・第53次・第57次・第58次調査地点や法雲寺から北東方150m離れた第48次調査地点からは、早稲を用いた墓を15基程度確認している。早稲墓の周辺には、早稲などの棺体や人骨は確認できていないが、早稲墓と遺構の形態・規模・出土遺物の内容などが早稲墓と類似する土坑を40基程度確認しており、近世墓である可能性が考えられる。埋葬時期は、出土した陶磁器類の年代から17世紀代の墓が1基、それ以外は18世紀以降の墓で、特に18世紀中頃から19世紀代の墓が多い。これまでの横尾遺跡群の発掘調査では、近世段階の遺構数が数少ないため、横尾村の近世集落の展開については、今後の調査の課題になると考えられる。

江戸時代の横尾村は、近隣の村々から集めた年貢米の収納施設として、規模2間半×3間半の在蔵が設置さ

れた記録が残っている。集積した年貢米は、府内の沖ノ浜町や家島にあった白杵藩の蔵から大阪へ直送していた記録から、白杵方面から横尾の南側の毛井、西側の二目川を通過し府内城へ向かう白杵城路^{〔註18〕}や、また横尾から森町・鶴崎を抜けて家島に向かう街道を通過して、回送されたものと考えられる。また横尾地区は、乙津川の左岸に位置し、水上交通との結びつきも良い場所である。今回酒造りに関連する遺構群が確認されているが、江戸時代や明治時代を通じて、酒は幕府・各藩・明治政府などの強い統制のもとに置かれ、営業税の納入を条件に造酒や販売には許可を受けることが必要であったようである。近世の横尾村については、在蔵が設置された点、村が交通の要衝に所在している点、幕末期段階には藩からの許可を受け酒の製造を行っていたと考えられる点、そして今回報告を行った横尾遺跡群の西側区域の調査成果から18世紀代に入ると遺構数が増えていく状況が確認できた点などから、近世中期から幕末期にかけて横尾地区の村落が徐々に大きく形成されていった様相が窺える。

【註】

- 註1 豊田寛三 1997『大野川下流域町・村の構造と舟運』『大野川』大分大学教育学部編・発行
- 註2 竹村恵二 2008『横尾貝塚周辺の地質と地形、および横尾貝塚立地との関連』『横尾貝塚』大分市教育委員会
- 註3 大分市教育委員会 2009『横尾遺跡第130次調査』『横尾遺跡2』大分市埋蔵文化財調査報告書第96集
- 註4 大分市教育委員会 1999『スポーツ公園内遺跡発掘調査報告書（第4分冊）』大分県文化財調査報告書第103輯
- 註5 大分県教育庁埋蔵文化財センター 2012『横尾貝塚—県道鶴崎大南線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第59集
- 註6 大分県教育委員会 2002『尾崎遺跡 清水遺跡 新田遺跡 川野遺跡 久木小野遺跡 平岩遺跡』東九州自動車関係埋蔵文化財発掘調査報告書（3）
- 註7 大分市教育委員会 1982『大分市多武尾遺跡調査概報』
- 註8 大分市教育委員会 1992『有田古墳群』『大分市埋蔵文化財調査年報3』平成3年度
- 註9 大分県教育委員会 2002『毛井遺跡B地区—国道197号大分南バイパス工事に伴う発掘調査報告書—』
- 註10 大分市史編さん委員会 1987『地蔵原遺跡は語る』『大分市史 上巻』
- 註11 大分市教育委員会 1996『猪野新土井遺跡第1・2次調査』『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.7 1995年度
- 大分市教育委員会 1997『猪野新土井遺跡（第3次調査）』『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.8 1996年度
- 註12 大分市教育委員会 2000『松岡古窯跡群』『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.11 1999年度
- 註13 大分市教育委員会 2000『井ノ久保遺跡発掘調査報告書—東九州自動車道及び併設市道建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—第1分冊—本文編—』
- 註14 大分県文化財調査報告書 2001『二目川遺跡—県道松岡日岡線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』大分県文化財調査報告書第122輯
- 註15 大分市教育委員会 2010『横尾遺跡3—大分市横尾土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第98集
- 註16 大分市教育委員会 2013『横尾遺跡6 第144・145・146・147・148次調査—大分市横尾土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第123集
- 註17 大分市教育委員会『猪野・中原遺跡』『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.8 1996年度
- 註18 大分市史編さん委員会 1987『大分市史 中巻』
- 註19 法雲寺 2011『臨濟宗妙心寺派増上山法雲寺—中興三百五十年祭記念—』
- 註20 大分市教育委員会 2008『横尾遺跡—大分市横尾土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書—』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第82集
- 註21 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1987『大分県の諸職—大分県諸職関係民俗文化財調査報告書—』
- 註22 伊丹市教育委員会 1991『伊丹の酒造り道貝』『伊丹の民』
- 註23 伊丹市 1999『重要文化財 旧岡田家住宅保存工事報告書（災害復旧）』
- 註24 山口昭三 2009『日本の酒蔵』九州大学出版会
- 註25 大分市教育委員会 2013『横尾遺跡7—大分市横尾土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第124集